高松市埋蔵文化財調査報告　第116集

史跡高松城跡整備報告書　第３冊

玉藻廟解体・記録保存調査報告書

２００８年９月

高　　松　　市
高松市教育委員会

例　　言

1　本報告書は，高松市が平成17年度から国の補助を受けて実施した史跡高松城跡天守台石垣（しせきたかまつじょうあとてんしゅだいいしがき）の調査・保存整備工事に伴って行った玉藻廟（たまもびょう）の解体・記録保存調査報告書である。

2　工事及び調査期間は次のとおりである。
　記録保存：平成18年8月28日～12月20日
　玉藻廟解体工事：平成18年8月30日～11月1日
　玉藻廟関連施設解体工事：平成19年9月28日～平成20年4月30日
　玉藻廟階段撤去工事（上部）：平成18年11月1日～平成19年3月29日
　玉藻廟階段撤去工事（下部）：平成19年3月13日～平成19年3月30日

3　玉藻廟解体工事をはじめとする諸工事及び玉藻廟の記録保存の設計・監理・監督については都市整備部（平成18年度までは都市開発部）公園緑地課笹野尚子が担当し，鳥居・手水鉢・灯籠・狛犬の記録は同課主査長樂佳明が担当し，文化財に関する監督は教育部文化財課（平成19年度までは文化部文化振興課）文化財専門員大嶋和則が担当した。

4　本報告書は第3章を笹野尚子，第4～6章を㈶文化財建造物保存技術協会，それ以外は大嶋が執筆を行い，編集は大嶋が行った。

5　解体工事及び記録保存から整理作業，報告書執筆を実施するにあたって，下記の関係諸機関から御教示・御協力を得た。記して厚く謝意を表すものである。（五十音順，敬称略）
　香川県教育委員会，香川県立ミュージアム，㈶松平公益会，玉藻公園管理事務所，屋島神社

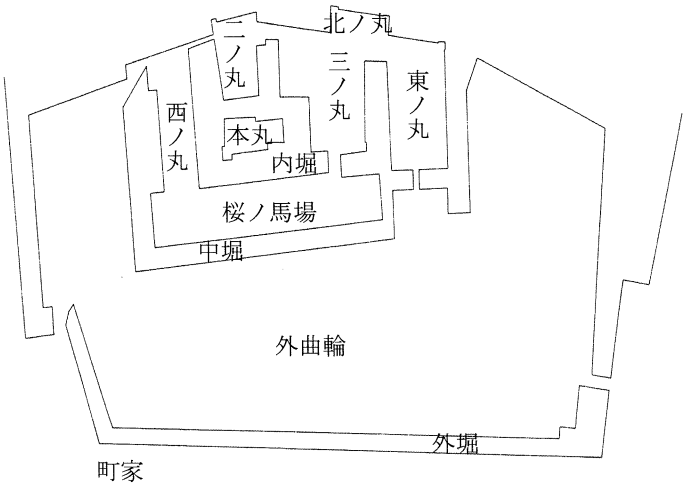
6　本調査に関連して，以下の業務を委託・工事発注により実施した。
　玉藻廟記録保存……㈶文化財建造物保存技術協会
　玉藻廟解体工事……㈱熊組
　玉藻廟関連施設解体工事……四国産業㈱（平成19年度石垣解体工事に含む）
　玉藻廟階段撤去工事（上部）……四国産業㈱（平成18年度天守台発掘調査業務に含む）
　玉藻廟階段撤去工事（下部）……四国産業㈱

7　挿図として，国土地理院発行1／25,000地形図「高松北部」を一部改変して使用した。

8　本報告の高度値はT.P.を規準とし，方位は国土座標第Ⅳ系（日本測地系）の北を示す。

9　調査で得られたすべての資料は高松市教育委員会で保管・活用している。

10　高松城内の曲輪の名称については，城内の縄張りの変化，各曲輪の使用方法の変化，新規建物の築造により，時期的に変化しており，一定していない。本報告書では，事実誤認を避けることから，一部古文書引用部分を除き，右略図の用語で統一した。建物の名称については，『旧高松御城全図』（香川県立ミュージアム蔵）に記載された名称を基本とする。



高松城略図

目　次

例言

目次

第１章　工事及び調査の経緯と経過
　第１節　工事及び調査に至る経緯……1
　第２節　調査・工事の体制……2
　第３節　工事及び調査の経過……5
　第４節　整理作業の経過……5
第２章　地理的・歴史的環境
　第１節　地理的環境……6
　第２節　高松城築城以前の歴史的環境……6
　第３節　高松城の歴史的環境……8
　第４節　廃城後の歴史的環境……10
　第５節　玉藻廟の歴史的環境……10
第３章　工事の概要
　第１節　玉藻廟記録保存……13
　第２節　玉藻廟解体工事……13
　第３節　玉藻廟関連施設撤去工事……16
　第４節　玉藻廟階段撤去工事……17
第４章　調査の概要
　第１節　建造物の名称・所在地……18
　第２節　建造物の概要……18
第５章　調査事項
　第１節　調査の内容……22
　第２節　創建時の技法について……54
　第３節　構成部材調書……67
第６章　参考史料
　第１節　『御宮設計書』……84
　第２節　『玉藻御廟御造営御遷座御祭典記事』……97
　第３節　『玉藻公園内　建物配置平面図』……101
　第４節　『玉藻廟絵はがき』……102
第７章　玉藻廟関連諸施設の調査
　第１節　鳥居……103
　第２節　手水鉢・手水舎……103
　第３節　灯籠……105
　第４節　狛犬……109
　第５節　階段……111
附編　玉藻廟関連施設の移設……113
引用文献・主要参考文献……115

報告書抄録

挿図目次

第1図　史跡高松城跡位置図……1
第2図　史跡高松城跡整備事業組織図……2
第3図　施工箇所位置図……3
第4図　高松平野地形分類図……7
第5図　高松城跡および周辺部発掘調査箇所位置図‥11
第6図　天守台配置図……23
第7図　玉藻廟平面図……24
第8図　玉藻廟南立面図……25
第9図　玉藻廟西立面図……26
第10図　玉藻廟北立面図……27
第11図　玉藻廟縦断面図……28
第12図　玉藻廟横断面図(拝殿)……29
第13図　玉藻廟横断面図(本殿)……30
第14図　各柱間実測数値……56
第15図　創建時推定略平面図……57
第16図　鏡戸(推定復元図)……59
第17図　掛戸(推定復元図)……59
第18図　創建時小屋組推定番付……60
第19図　手水舎平・立面図……104
第20図　手水舎天井裏検出コテ実測図……105
第21図　玉藻廟階段平・立面図……111
第22図　階段側面石垣石材刻印拓本……112

挿表目次

表1　史跡高松城跡整備検討委員会名簿……2
表2　史跡高松城跡石垣検討委員会名簿……2
表3　史跡高松城跡建造物検討委員会名簿……2
表4　高松城略年表……11
表5　高松城跡周辺発掘調査履歴……12
表6　解体工事施工実績表……14
表7　玉藻廟主要寸法表……20
表8　史跡高松城跡玉藻廟記録保存業務工程‥‥22
表9　各所推定寸法値表……55
表10　本殿化粧材一覧表……67
表11　幣殿化粧材一覧表……73
表12　拝殿化粧材一覧表……75
表13　拝殿野物材一覧表……81
表14　幣殿野物材一覧表……82
表15　本殿野物材一覧表……83
表16　御拝殿設計書一覧表……90
表17　御幣殿設計書一覧表……92
表18　御本殿設計書一覧表……94
表19　御内陣設計書一覧表……96
表20　八足台一覧表……96
表21　唐ノ頭出し台一覧表……96
表22　石之部一覧表……96

写真図版目次

写真 1　解体前階段調査……13
写真 2　解体前側面調査……13
写真 3　解体前拝殿調査……13
写真 4　屋根調査状況……13
写真 5　拝殿小屋組み調査……13
写真 6　西側灯籠撤去状況……14
写真 7　東側灯籠撤去状況……14
写真 8　野地板解体状況①……14
写真 9　野地板解体状況②……14
写真 10　本殿屋根解体状況……14
写真 11　本殿小屋組み状況……14
写真 12　拝殿小屋組み……15
写真 13　小屋組み解体完了……15
写真 14　本殿床下状況……15
写真 15　拝殿床下状況……15
写真 16　拝殿床解体状況……15
写真 17　廃材積み込み状況……15
写真 18　廃材搬出状況……15
写真 19　本殿基礎……15
写真 20　床面モルタル撤去状況……16
写真 21　解体完了状況……16
写真 22　手水舎解体状況①……16
写真 23　手水舎解体状況②……16
写真 24　手水舎解体状況③……16
写真 25　手水舎解体状況④……16
写真 26　手水舎解体状況⑤……17
写真 27　手水舎解体状況⑥……17
写真 28　鳥居撤去状況……17
写真 29　灯籠撤去状況……17
写真 30　全景(南東より)……31
写真 31　全景(北東より)……31
写真 32　正側面拝殿・向拝を見る(南東より)‥‥32
写真 33　内部拝殿より幣殿・本殿を見る(南より)‥32
写真 34　正側面拝殿・向拝を見る(南東より)‥‥33
写真 35　正側面拝殿・向拝を見る(南西より)‥‥33
写真 36　東側面(北東より)……34
写真 37　本殿東側面(東より)……34
写真 38　西側面(北西より)……35
写真 39　本殿西側面(西より)……35
写真 40　拝殿西側面(西より)……36
写真 41　本殿・幣殿西側面(西より)……36
写真 42　内部本殿より幣殿・拝殿を見る(南より)‥37
写真 43　内部拝殿・幣殿(南東より)……37
写真 44　全景東側面(南東より)……38
写真 45　全景東側面(南東より)……38
写真 46　全景正面(南より)……38
写真 47　全景背面(北より)……38
写真 48　全景背側面(北東より)……38
写真 49　外観正側面(南西より)……38
写真 50　内部拝殿西側面(東より)……39
写真 51　内部拝殿正側面(北東より)……39
写真 52　格天井(南西より)……39
写真 53　縁廻り拝殿正面側(南西より)……39
写真 54　縁廻り正面(西より)……39
写真 55　登り高欄詳細(東より)……39
写真 56　高欄親柱詳細(西より)……40
写真 57　正面唐戸(南より)……40
写真 58　唐戸幣軸上金具詳細……40
写真 59　蔀戸正面西側(南より)……40
写真 60　軒廻り東側(北東より)……40
写真 61　組物詳細……40
写真 62　拝殿銅板屋根東側(本殿(北)より)‥‥‥41
写真 63　拝殿銅板屋根西側(本殿(北)より)‥‥‥41
写真 64　拝殿鬼瓦(西側)……41
写真 65　千鳥破風ならびに向唐破風(南東より)‥41
写真 66　千鳥破風鬼瓦(南より)……41
写真 67　千鳥破風棟詳細(北より)……41
写真 68　千鳥破風妻飾り詳細(南より)……42
写真 69　千鳥破風妻部組物詳細(東側)……42
写真 70　向唐破風(南より)……42
写真 71　向唐破風軒付詳細(南東より)……42
写真 72　向拝軒廻り詳細(南東より)……42
写真 73　向拝蟇股(虹梁間)……42
写真 74　向拝組物西側(南東より)……43
写真 75　向拝菖蒲桁茨垂木との取合詳細(東より)‥43
写真 76　向拝組物西側詳細(北西より)……43
写真 77　向拝手狭西側(東より)……43
写真 78　向拝懸魚(南より)……43
写真 79　内部幣殿(拝殿(南)より)……44
写真 80　内部幣殿東側(拝殿(南西)より)……44
写真 81　内部幣殿西側(拝殿(南東)より)……44
写真 82　内部幣殿東側(前室(北西)より)……44
写真 83　内部幣殿西側(前室(北東)より)……44
写真 84　格天井(南より)……44
写真 85　連子窓(西側)……45
写真 86　軒廻り詳細(東側)……45
写真 87　軒廻り見上げ(東側)……46
写真 88　幣殿屋根銅板(本殿(北東)より)……45
写真 89　軒付取合い部詳細(南西より)……45
写真 90　内部前室・本殿(幣殿(南)より)……46
写真 91　内部前室・本殿(幣殿(南)より)……46
写真 92　内部前室東側(西より)……46
写真 93　内部前室西側(東より)……46
写真 94　内部本殿背側面(南東より)……46
写真 95　内部本殿背側面(南西より)……46
写真 96　前室登り高欄ならびに木階(南西より)‥47
写真 97　登り高欄親柱(西側)詳細……47
写真 98　正面唐戸(南より)……47
写真 99　濡縁ならびに高欄(東より)……47
写真100　脇障子(西側)詳細(南西より)……47
写真101　高欄親柱(西側)詳細(西より)……47
写真102　軒廻り(東側)詳細(南東より)……48
写真103　組物(背面)詳細(北東より)……48
写真104　幣殿・本殿の屋根銅版(拝殿(南)より)‥48
写真105　本殿の屋根銅版(拝殿(南西)より)‥‥‥48
写真106　鬼板(東側)……48
写真107　千木・勝男木(西側)……48
写真108　鞘橋(北より)……49

写真109　石段ならびに狛犬(東より)……49
写真110　手水鉢(南西より)……49
写真111　石鳥居ならびに石灯籠(西より)……49
写真112　石灯籠⑤～⑧……49
写真113　石灯籠③・④……49
写真114　石階段(北東より)……50
写真115　地盤ならびに木柵(東側)……50
写真116　石灯籠①(東側)……50
写真117　石灯籠②(西側)……50
写真118　水盤(東より)……50
写真119　正面より見た風景(中央)……51
写真120　正面より見た風景(東側)……51
写真121　正面より見た風景(西側)……51
写真122　東側より見た風景(中央)……51
写真123　東側より見た風景(北側)……51
写真124　東側より見た風景(南側)……51
写真125　背面側より見た風景(中央)……52
写真126　背面側より見た風景(西側)……52
写真127　背面側より見た風景(東側)……52
写真128　西側より見た風景(中央)……52
写真129　西側より見た風景(南側)……52
写真130　西側より見た風景(北側)……52
写真131　蕪懸魚……53
写真132　虹梁間蟇股……53
写真133　唐破風内の彫物……53
写真134　唐戸幣軸上金具……53
写真135　拝殿扉乳金物……53
写真136　玉藻廟絵はがき……58
写真137　玉藻廟絵はがき(拡大)……58
写真138　本殿脇障子(西側)①……58
写真139　本殿脇障子(西側)②……58
写真140　本殿内部壁板(胴縁痕跡)①……58
写真141　本殿内部壁板(胴縁痕跡)②……58
写真142　前室・本殿濡縁境出入口①……59
写真143　前室・本殿濡縁境出入口②……59
写真144　前室高欄位置①……59
写真145　前室高欄位置②……59
写真146　掛戸……59
写真147　引違い障子窓……59
写真148　拝殿正面姿図……59
写真149　拝殿①鼻母屋……61
写真150　拝殿②鼻母屋……61
写真151　拝殿③鼻母屋……61
写真152　拝殿④鼻母屋……61
写真153　拝殿⑤鼻母屋……61
写真154　拝殿⑥鼻母屋……61
写真155　拝殿⑦桔木……61
写真156　拝殿⑧妻板……61
写真157　拝殿⑨破風板……62
写真158　拝殿⑩土居桁……62
写真159　拝殿⑪隅木……62
写真160　拝殿⑫隅木……62
写真161　拝殿⑬小屋貫……62
写真162　拝殿⑭母屋束・拝殿⑮母屋束……62
写真163　拝殿⑯一の母屋……62
写真164　拝殿⑰母屋束……62
写真165　拝殿⑱二の母屋……63
写真166　拝殿⑲向拝敷梁……63
写真167　拝殿⑳一の母屋……63
写真168　拝殿㉑二の母屋……63
写真169　拝殿㉒二の母屋……63
写真170　拝殿㉓桔木……63
写真171　拝殿㉔鼻母屋……63
写真172　拝殿㉕小屋貫……63
写真173　拝殿㉖前包……64
写真174　拝殿㉗妻板……64
写真175　拝殿㉘鼻母屋……64
写真176　拝殿㉙鼻母屋……64
写真177　幣殿①母屋束……64
写真178　幣殿②母屋束……64
写真179　幣殿③母屋束・幣殿④母屋束……64
写真180　幣殿⑤一の母屋……64
写真181　本殿①土居桁……65
写真182　本殿②破風板……65
写真183　本殿③妻板……65
写真184　本殿④妻板……65
写真185　本殿⑤前包……65
写真186　本殿⑥母屋束……65
写真187　本殿⑦棟木……66
写真188　本殿⑧一の母屋……66
写真189　本殿⑨母屋束……66
写真190　本殿⑩妻板……66
写真191　本殿⑪妻板……66
写真192　本殿⑫妻板……66
写真193　本殿⑬土居桁……66
写真194　本殿⑭鼻母屋……66
写真195『御宮設計書』①……84
写真196『御宮設計書』②……84
写真197『御宮設計書』③……84
写真198『御宮設計書』④……84
写真199『御宮設計書』⑤……84
写真200『御宮設計書』⑥……84
写真201『御宮設計書』⑦……85
写真202『御宮設計書』⑧……85
写真203『御宮設計書』⑨……85
写真204『御宮設計書』⑩……85
写真205『御宮設計書』⑪……85
写真206『御宮設計書』⑫……85
写真207『御宮設計書』⑬……85
写真208『御宮設計書』⑭……85
写真209『御宮設計書』⑮……86
写真210『御宮設計書』⑯……86
写真211『御宮設計書』⑰……86
写真212『御宮設計書』⑱……86
写真213『御宮設計書』⑲……86
写真214『御宮設計書』⑳……86
写真215『御宮設計書』㉑……86
写真216『御宮設計書』㉒……86
写真217『御宮設計書』㉓……87
写真218『御宮設計書』㉔……87
写真219『御宮設計書』㉕……87
写真220『御宮設計書』㉖……87
写真221『御宮設計書』㉗……87
写真222『御宮設計書』㉘……87
写真223『御宮設計書』㉙……87
写真224『御宮設計書』㉚……87
写真225『御宮設計書』㉛……88
写真226『御宮設計書』㉜……88
写真227『御宮設計書』㉝……88
写真228『御宮設計書』㉞……88
写真229『御宮設計書』㉟……88
写真230『御宮設計書』㊱……88
写真231『御宮設計書』㊲……88
写真232『御宮設計書』㊳……88
写真233『御宮設計書』㊴……89
写真234『御宮設計書』㊵……89
写真235『玉藻御廟御造営御遷座御祭典記事』①…97
写真236『玉藻御廟御造営御遷座御祭典記事』②…97
写真237『玉藻御廟御造営御遷座御祭典記事』③…97
写真238『玉藻御廟御造営御遷座御祭典記事』④…98
写真239『玉藻御廟御造営御遷座御祭典記事』⑤…98
写真240『玉藻御廟御造営御遷座御祭典記事』⑥…98
写真241『玉藻御廟御造営御遷座御祭典記事』⑦…99
写真242『玉藻御廟御造営御遷座御祭典記事』⑧…99
写真243『玉藻御廟御造営御遷座御祭典記事』⑨…99
写真244『玉藻御廟御造営御遷座御祭典記事』⑩‥100
写真245『玉藻御廟御造営御遷座御祭典記事』⑪‥100
写真246『玉藻御廟御造営御遷座御祭典記事』⑫‥100
写真247『玉藻公園内　建物配置平面図』……101
写真248『玉藻公園内　建物配置平面図』拡大……101
写真249『玉藻廟絵はがき』①……102
写真250『玉藻廟絵はがき』②……102
写真251　鳥居全景……103
写真252　鳥居北側柱文字部分①……103
写真253　鳥居北側柱文字部分②……103
写真254　鳥居南側柱文字部分……103
写真255　手水舎……105
写真256　手水鉢……105
写真257　灯籠①……106
写真258　灯籠②……106
写真259　灯籠①文字部分……106
写真260　灯籠②文字部分……106
写真261　灯籠配置状況……107
写真262　灯籠③……107
写真263　灯籠③文字部分……107
写真264　灯籠④……108
写真265　灯籠⑤……108
写真266　灯籠⑤文字部分……108
写真267　灯籠⑥……108
写真268　灯籠⑥文字部分……108
写真269　灯籠⑦……108
写真270　灯籠⑦文字部分……109
写真271　灯籠⑧……109
写真272　灯籠⑧文字部分……109
写真273　狛犬(阿)……109
写真274　狛犬(阿)文字部分……109
写真275　狛犬(吽)……110
写真276　狛犬(吽)文字部分……110
写真277　狛犬配置状況……110
写真278　階段……112
写真279　階段踏石裏面墨書……112
写真280　灯籠移設状況(新玉藻廟)……113
写真281　鳥居移設状況(屋島神社)……113
写真282　灯籠移設状況(屋島神社)①……113
写真283　灯籠移設状況(屋島神社)②……113
写真284　灯籠移設状況(屋島神社)③……113
写真285　灯籠移設状況(屋島神社)④……114
写真286　灯籠移設状況(屋島神社)⑤……114
写真287　狛犬移設状況(屋島神社)①……114
写真288　狛犬移設状況(屋島神社)②……114
写真289　手水舎移設状況(屋島神社)……114
写真290　手水鉢移設状況(屋島神社)……114

第１章　工事及び調査の経緯と経過

第１節　工事及び調査に至る経緯

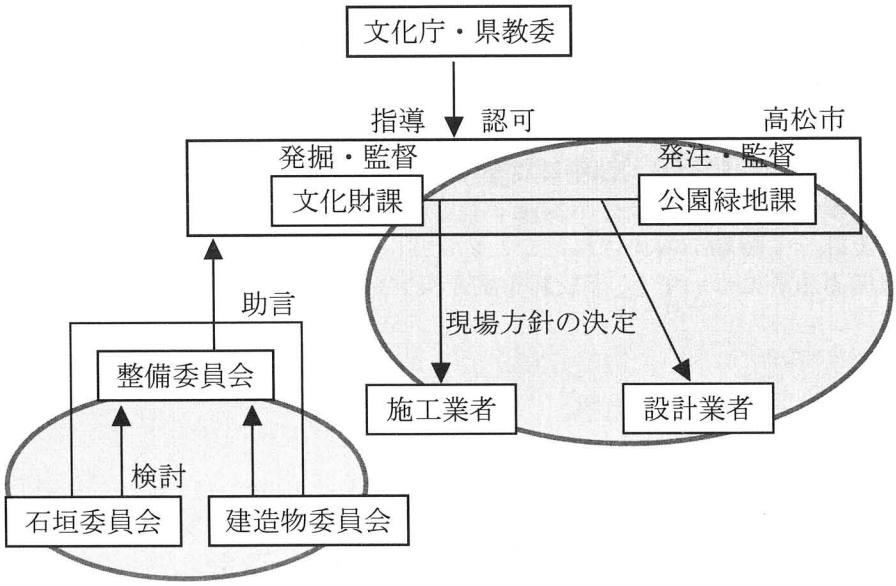
高松城跡は築城から420年が経過しており，史跡内各所の石垣にハラミ・ズレ・ヌケといった現象が見られる。平成15年度には鉄門の北側石垣の西面の石材が脱落し，石垣の傷みが崩壊寸前まで迫っている箇所が多数存在する可能性が考えられた。このため，史跡指定地内の石垣の分布・保存状況・編年・積み方・補修箇所・崩落等危険箇所等を調査するとともに，今後の石垣の保存整備に向けての基礎的判断の拠り所となるべき整備指針を作成する必要があり，平成16年度に石垣の基礎調査を実施した。その調査において史跡内の石垣のうち天守台石垣を構成する北・東・南面の危険度が最も高いことが判明した。特に東面の大きいハラミはその上部を歩くことができるほどであり，また南東隅角部のズレは石材間の開きが30㎝にも達しており，いつ崩れてもおかしくない状況と判断し，平成17年度から天守台石垣の解体修理工事を行うことになり，天守台上部に所在する玉藻廟についても平成18年度に解体することとなった。なお，玉藻廟は明治34・35年に建築された神社で，築100年以上経過した建物であるが，虫害や風雨による破損が著しく移築保存が困難であることから，記録保存を行って，解体することとした。

また，天守台上部の玉藻廟が解体されたことを受け，本丸内に残存していた鳥居・手水舎・灯籠・狛犬といった神社関連施設についても，平成19年度の天守台石垣解体工事に合わせて撤去することとした。

第１図　史跡高松城跡位置図

第２節　調査・工事の体制

高松市では，史跡高松城跡の整備を行うにあたり，都市整備部公園緑地課が工事の発注，施工時の土木・建築監督を担当し，教育委員会教育部文化財課が発掘調査，施工時の文化財監督を担当している。なお，平成16年12月に史跡高松城跡整備検討委員会を設置し，整備の検討を行っている。さらにその下部組織として石垣に関することについては史跡高松城跡石垣検討委員会，建造物に関することについては史跡高松城跡建造物検討委員会を設置し，検討を行っている。これら委員会の助言を元に，公園緑地課，文化財課，設計業者，施工業者による打合せ会議を行い，現場の方針を決定している。本工事についてもこの体制で実施した。



第２図 史跡高松城跡整備事業組織図

表1　史跡高松城跡整備検討委員会名簿

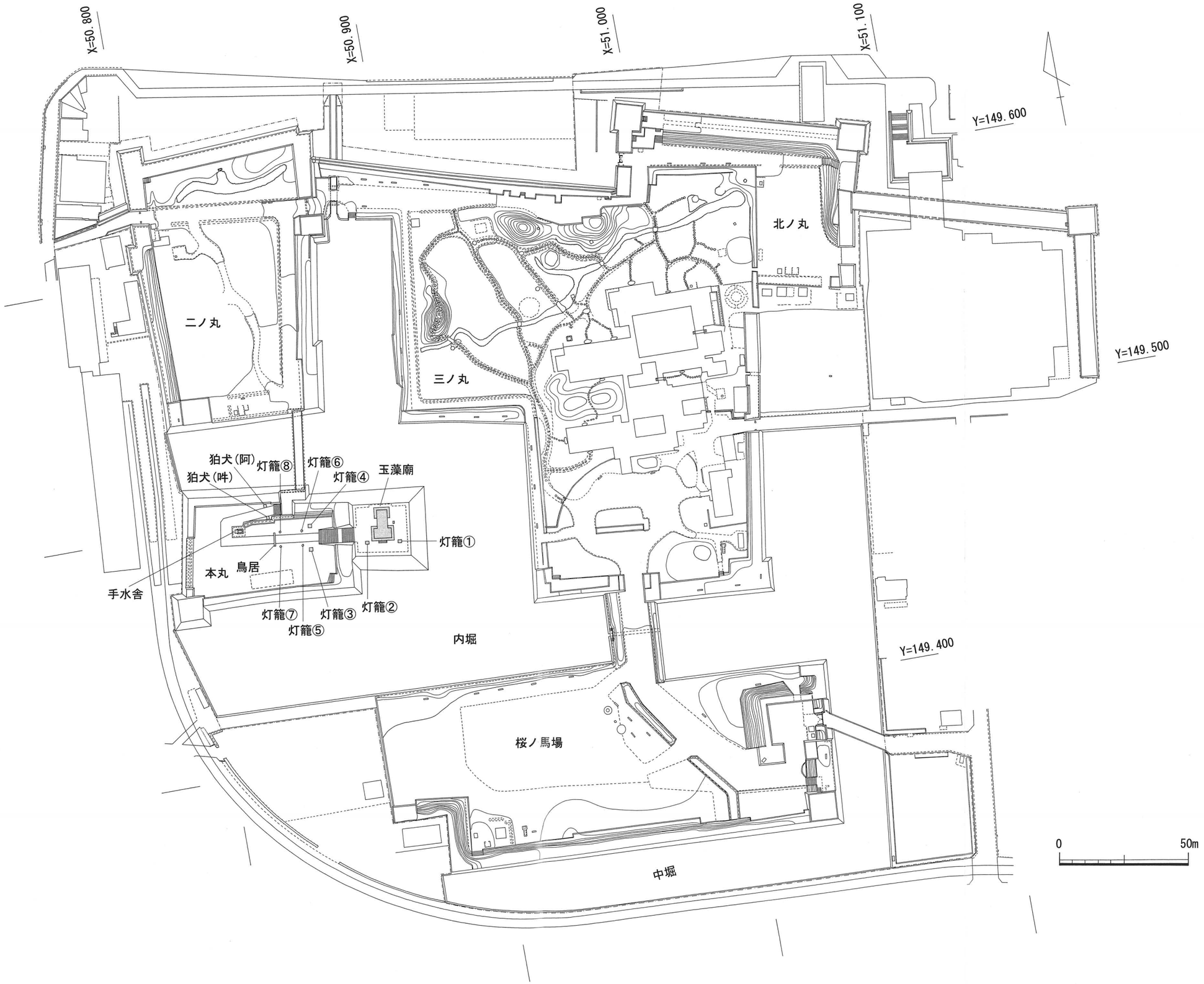
	氏　名	所　　属	専門分野	備　　考
委 員 長	渡邉　定夫	東京大学名誉教授	都市計画	
副委員長	吉田　重幸	元香川大学農学部教授	緑地環境学	
委　　員	牛川　喜幸	京都橘大学文学部教授	日本庭園史	～H20.1
委　　員	尼﨑　博正	京都造形芸術大学環境デザイン学科教授	日本庭園史	H20.1～
委　　員	木原　溥幸	徳島文理大学文学部教授	日本史学	
委　　員	五味　盛重	㈶文化財建造物保存技術協会参与	古建築	
委　　員	西　和夫	神奈川大学工学部教授	建築史，意匠	

表2　史跡高松城跡石垣検討委員会名簿

	氏　名	所　　属	専門分野	備　　考
委 員 長	内田　九州男	愛媛大学法文学部教授	近世文化史	H20.5～ 委員長
委　　員	五味　盛重	㈶文化財建造物保存技術協会参与	古建築	～H20.5 委員長
委　　員	西田　一彦	関西大学名誉教授	地盤工学	

表3　史跡高松城跡建造物検討委員会名簿

	氏　名	所　　属	専門分野	備　　考
委 員 長	西　和夫	神奈川大学工学部教授	建築史，意匠	
副委員長	谷　直樹	大阪市立大学大学院教授	建築史	
委　　員	波多野　純	日本工業大学工学部教授	都市史，建築設計	
委　　員	小沢　朝江	東海大学工学部教授	建築史	
委　　員	三浦　要一	高知女子大学生活科学部准教授	建築史	


X=50.800
X=50.900
X=51.000
X=51.100
Y=149.600
Y=149.500
Y=149.400
北ノ丸
二ノ丸
三ノ丸
狛犬(阿)
狛犬(吽)
灯籠⑧
灯籠⑥
灯籠④
玉藻廟
灯籠①
本丸
鳥居
手水舎
灯籠⑦
灯籠⑤
灯籠③
灯籠②
内堀
桜ノ馬場
中堀
0
50m

第３図　施工箇所位置図

第３節　工事及び調査の経過

玉藻廟解体工事に先立ち，解体前の状況の調査が必要なことから，記録保存については平成18年8月28日に財団法人文化財建造物保存技術協会と契約を行い，外観・内部の実測・写真撮影から実施した。一方，8月30日には株式会社熊組と解体工事の契約を締結した。記録保存については，特に内部の小屋組等の調査は解体工事と並行して行わなければならないことから，9月1日に高松市は財団法人文化財建造物保存技術協会及び株式会社熊組と解体方法・解体手順について協議を行った。解体工事は9月12日から開始したが，まず，玉藻廟の南側に所在する灯籠を撤去し，足場の組立を実施した。足場の組立後，地上から観察することができなかった屋根の状況等の調査を実施した。調査を伴うことから，解体はほぼ手作業で実施した。屋根が解体された10月上旬に小屋組及び床下の調査を行い，現地での調査は終了し，解体工事自体も11月8日に完了した。現地調査と並行して古文書・古写真等の調査を実施し，12月20日に記録保存を終了した。

なお，解体した部材の大半は虫害等により再利用できないことから廃棄したが，飾金具・彫物等一部部材は収集し，保管している。

調査・工事日誌

H18.9.28	調査開始。写真撮影・外観調査。	H18.11.8	玉藻廟解体完了。
H18.9.12	工事開始。玉藻廟前面の灯籠2基撤去。	H18.12.18	玉藻廟階段撤去開始。
H18.9.13	天守台東面足場組立。	H19.1.11	玉藻廟階段上部撤去完了。
H18.9.19	外観・内部調査。	H19.3.26	玉藻廟階段下部撤去開始。
H18.9.21	周辺仮囲い。	H19.3.30	玉藻廟階段下部撤去完了。
H18.9.23	屋根銅版解体。	H19.12.1	灯籠等撤去準備。
H18.9.26	野地板解体。	H19.12.6	鳥居撤去開始。
H18.10.5	小屋組・床下調査。墨書等発見。	H19.12.8	鳥居撤去完了。
H18.10.10	小屋組解体。	H19.12.10	手水舎解体開始。
H18.10.18	桁・梁解体。	H19.12.14	手水鉢解体開始。
H18.10.23	柱・壁解体。	H19.12.15	玉藻廟関連施設解体完了。
H18.10.26	解体部材搬出。	H19.12.18	玉藻廟関連施設場外搬出。
H18.10.30	床面モルタル撤去。		

第４節　整理作業の経過

記録保存については工期内に報告書として提出されたが，平成19年度工事分を含め，平成20年5月から6月において整理作業を実施した。概ね5月に図面整理・トレースを，6月に報告書の執筆・編集を行い，整理作業を完了した。

第２章　地理的・歴史的環境

第１節　地理的環境

高松城跡は，香川県の瀬戸内海側を占める讃岐平野の東側にあって，東を屋島・立石山・雲附山，南を日山・上佐山，西を五色台山塊に遮られた東西9km，南北8kmの扇状地性の海岸平野である高松平野の北端部に位置する。当地域を構成する地質は，基盤としての領家花崗岩類（深度－100～－200m）と，その上位に層厚100m以上で分布する三豊層群および層厚約10mの段丘堆積物からなり，最上部の層厚10～20mが沖積層である。また，侵食の容易な花崗岩層（三豊層群）が風化侵食に抵抗の強い安山岩層に覆われていたことによって侵食解析から取り残されて形成された台地状あるいは円錐状の小山塊が群立している。前者の台地群はメサと呼ばれ，後者の円錐状の小さい単体の山々はビュートと呼ばれ，讃岐ののどかな田園風景の象徴の一つである。両者は共に瀬戸内火山岩類に属し，今から約1,400～1,100万年前（中期中新世）の火山活動の産物である。

現在の高松城跡周辺の地形環境は，近世城下町や周辺の陸地造成（干拓）によって整えられたが，より本源的には高松平野を流れる諸河川と，潮流による海浜地形の形成を出発点としている。大部分が讃岐山脈に源をもつ香東川が運ぶ土砂の堆積によって形成されたと考えられており，これまでの発掘調査や微地形分析により分ヶ池，下池，長池，大池を結ぶ流路等，数本の主流路が確認されている。これら主流路のうち東方の流路は弥生時代後期から古代にかけて次第に河川としての機能を喪失したのに対し，石清尾山塊の東側の流路は近世初頭（寛永期）まで主要な流路群として存在した。現在，高松平野中央部に所在する石清尾山塊の西側を流れる香東川であるが，この流路は近世初頭に分流していた流路を一本化したものである。なお，石清尾山塊東側の旧流路は石清尾山麓を巡って西浜に至る流路群（現在の摺鉢谷川に並行）と石清尾山南麓から上福岡に至る流路群（現在の御坊川に並行）に細別できる。高松城跡は，この2本の流路群に挟まれた地域である。

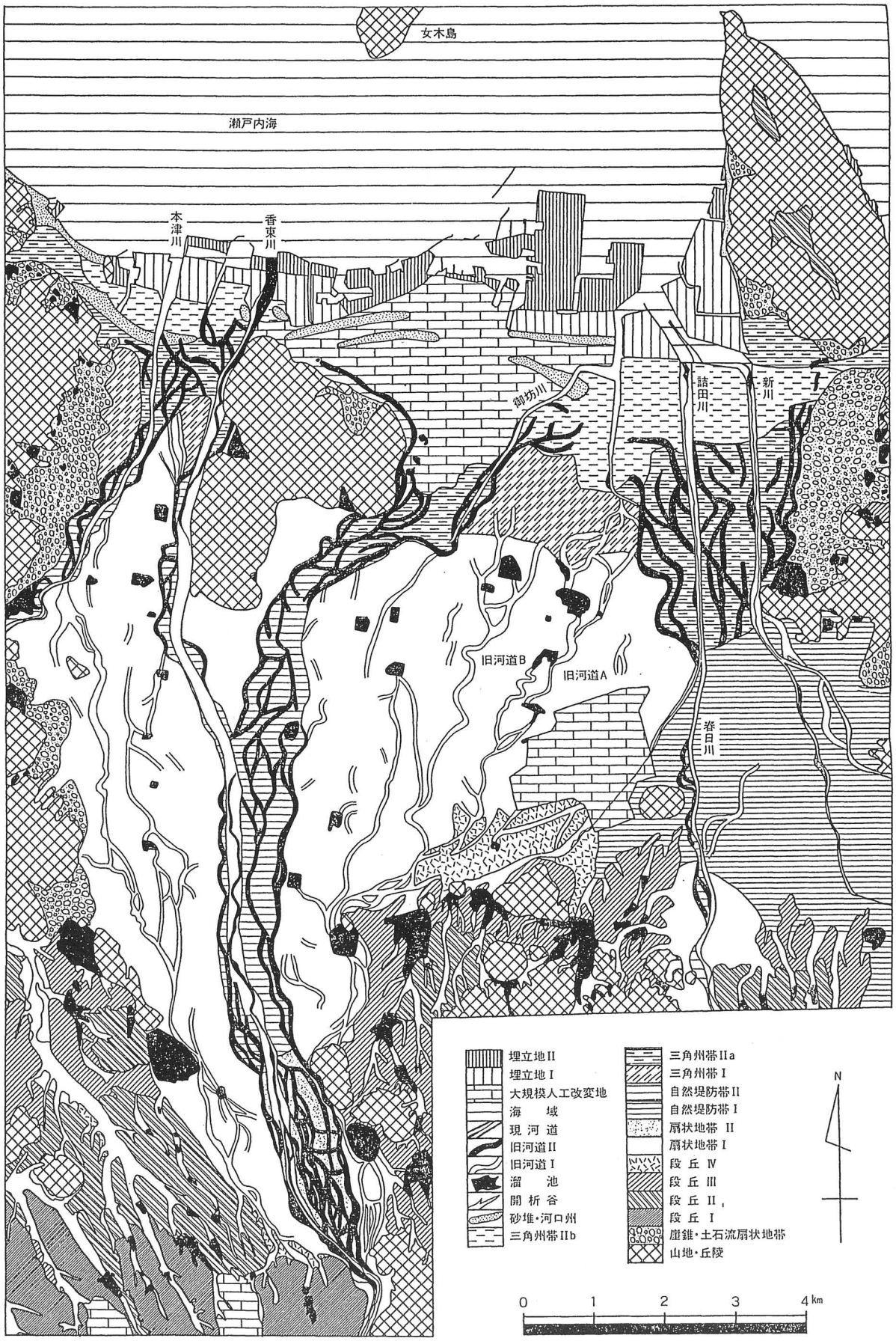
高松城跡周辺は高松城及び城下の建設に始まる市街化により旧状を復元することは困難であるが，近世城下の大手筋とほぼ一致する旧河道分岐点から高松城本丸にかけては周辺より高いことから，微高地状を呈した比較的安定した土地の可能性がある。これまでの高松城周辺の調査では11世紀後半以降の遺構・遺物が検出されており，既に中世前半には安定した地盤が面的に形成されていたことがうかがえる（佐藤2003）。なお，松平大膳家上屋敷跡において弥生時代終末期と考えられるピット群，8世紀末～9世紀と考えられる溝が検出されており（小川ほか2004），標高の高い大手筋では，微高地の形成がさらに遡る可能性がある。

この微高地の海浜部には，現在のＪＲ軌道とほぼ同位置・同方向の砂堆がある。発掘成果を考慮すると，この砂堆は現・高松駅付近で最も海側に突出すると見られ，やや南に湾曲して東ノ丸北半へと連続するようである。高松城跡東ノ丸（渡部ほか1987）や浜ノ町遺跡（乗松2004）の発掘では，この砂堆は中世を通じて堆積が進んだことをうかがわせるデータが得られている。

第２節　高松城築城以前の歴史的環境

先述したように，高松城跡周辺では，古代に遡る遺構はほとんど見られず，松平大膳家上屋敷跡において弥生時代終末期と8世紀末～9世紀と考えられる遺構がわずかに検出されているのみである。ただし，高松城跡周辺での発掘調査において弥生土器や須恵器等の出土量は決して少なくなく，大手筋付近に遺跡が所在する可能性は否定できない。なお，古代では平安期の『和名抄』に見られる香川郡12郷の一つである笑原郷に属していたと考えられる。

中世の状況については，文献史料から読み取れる。築城直前の高松については，『南海通記』巻廿の記述が有名である。西側と東側に海が湾入しており，その間の砂州（陸地）が海に向かって突き出す様子が，あたかも一筋の矢のようであり，そのため「篦原」郷と称され，郷内には，「西浜」「東浜」という漁村があったと記載されている。これらから，「篦原」郷が後の高松城下に相当することがうかがえるが，「篦原」という郷名は『和名抄』や中世文書にもみえず，『南海通記』も他の巻では「野原」郷と呼称している。したがって，地域の呼称としては「野原」郷が一般的であったと考えられる。野原郷では，応徳3年（1086），白河天皇の退位に伴い，郷内の勅旨田が立券されて野原庄が成立し，後に妙法院門跡領となっている。その庄域は康治2年（1143）の太政官牒案（『安楽寿院古文書』）によると，東西南北ともに条里坪付けで記されており，東・西・北は野原郷内で，南は坂田郷に及ぶことが分



第４図　高松平野地形分類図（高橋1992より抜粋）

かる。なお，『昭慶門院御領目録案』（嘉元4年：1306）には，野原郷が知行地として見えるため，郷内全体が立庄されたのではないことが分かる。

野原郷・野原庄の状況についても，文献史料及び発掘調査から判明しつつある。まず，応永19年（1412）に虚空蔵院の僧増範が願主となって勧進書写した『北野天満宮一切経』の奥書に野原の寺院として無量壽院・極楽寺・福成寺が見られることから，野原に寺院が多く所在していたことがうかがえる。これらの寺院のうち，無量壽院が発掘調査によって検出されている。「野原濱村无量壽院 天文（以下欠損） 九月（以下欠損）」と刻まれた瓦が高松城西ノ丸の下層から出土している（中西ほか2005）。同寺は『無量壽院随願寺記』等によると，天平11年（739）に坂田郷室山の麓に建立された寺で，天文年間（1532～1555）に兵火にかかり野原郷八輪島に移転しており，高松城築城に際して，再度移転している。「天文」と刻まれた瓦や同地の出土遺物が16世紀後半を主体とすることは寺記の記載と一致する。なお，応永19年当時は寺記の記述からすると坂田郷内に所在しており，『安楽寿院古文書』に記載された坂田郷に及ぶ野原庄を裏付けるものである。

また，文安2年（1445）の『兵庫北関入舩納帳』に「野原」を船籍地としたものが見られる。港の位置については，文献史料から読み取るのは難しいが，高松城跡（西の丸町地区）では，中世前半の港湾関連施設が検出されている（佐藤2003・松本2003b）。搬入された土器も高比率で出土しており，他地域との交易が活発であったことがうかがえる。

さらに，これまでの周辺の発掘調査において港湾施設以外にも11世紀後半以降の遺構が検出されている。浜ノ町遺跡では白磁四耳壺を埋納していた13世紀末～15世紀末の集落が検出され（乗松2004），東ノ丸地区では16世紀後半以前の漁民の墓群が検出されている（渡部ほか1987）。特に片原町遺跡（小川2002）においては屋敷地（居館）を囲む15～16世紀のL字形の大溝が検出されている。野原に基盤を置いた中世の領主層については，同時代の史料がほとんど存在しないが，『南海通記』に列記されている。永正5年（1508）の香西氏圍山田郡三谷城記では，「土居構ノ小城持」として真部・楠川・雑賀，「塹セヲ構ヘタル者」として唐人弾正・片山玄蕃・仲備中・岡本（岡田の誤りか？）・藤井が挙げられている。また元亀2年（1571）の香西宗心備州兒嶋陣記では，「城持ノ旗下」として藤井・雑賀・岡田丹後・真部，「其村持タル者」として楠川太郎左衛門，「香西城下名アル村主」として唐人弾正・片山志摩・藤井太郎左衛門尉・仲飛騨守が挙げられる。

以上から，中世の高松城周辺は多くの寺院や多くの小領主を抱えることができるだけの経済的基盤を有した港町「野原」と考えられ，地域の中心機能を果たしていた可能性は高い。

第３節　高松城の歴史的環境

高松城は，天正15年（1587）に讃岐1国17万3千石の領主に封ぜられた生駒親正によって天正16年（1588）に築城が開始された近世城郭である。なお，築城に際してそれまでの「野原」の地名を廃し，山田郡高松郷の名前をとり「高松」と称し，それまでの高松を「古高松」と称するようになった。築城に関する故事はほとんど伝えられておらず，わずかの史書が天正18年（1590）の築城完成記事を載せるのみで，詳細は不明である。『南海通記』によると，築城当初の縄張りは，藤堂高虎と黒田孝高が高松に立寄り見分し，親正の質問に孝高は「要害の地である」と答えたことから城地に決定したとされている。また，『讃羽綴遺録』によると，縄張りは黒田孝高または細川忠興によるともされている。本丸を中心に右回りに二ノ丸・三ノ丸・桜ノ馬場・西ノ丸の4つの曲輪を配し，さらにその外側に外曲輪が巡る，いわゆる「連郭式＋梯郭式」の曲輪配置である。本丸と二ノ丸を囲むのが内堀，三ノ丸と桜ノ馬場・西ノ丸を囲むのが中堀，その外側で武家屋敷の建ち並ぶ外曲輪全体を囲むものが外堀である。やや時代が下るが，17世紀中葉に描かれたとされる『高松城下図屏風』によると，城下の南端として表現された寺町の外側（南側）に東西方向の堀状の水路が描かれている。これは，ほぼ同時期成立とみられる『讃岐高松丸亀両図 高松城下図』でも描写されており，19世紀前半の絵図でも確認でき，城下東辺を画する仙場川に繋がっている。『高松城下図屏風』をより仔細に観察すると，堀状の水路は北半が埋め立てられて馬場（古馬場）となっており，17世紀中葉には既に本来の形態から改変された状況であったことがうかがえる。つまり，本来の水路幅は外堀に匹敵する規模であったことが推測でき，しかも水路北側（城からみて内側）に寺町が展開すること，また大手筋の町名が水路より北側で「丸亀町」，南側で「南新町」となることが指摘できることから，この「水路」は城下を囲繞した総構えの名残である可能性が高い。さらに，南西に据わる石清尾山塊を防御に利用し，城下の西側郊外を流れる香東川には橋を架けないなどあらゆる配慮がなされていた。

生駒期の城郭の変遷は不明な点が多いが，寛永4年（1627）の『讃岐伊豫土佐阿波探索書』によると，城郭の破損状況や修復が行われていない様子が記述されており，『生駒家文書』によると寛永13年（1636）に石垣や船入を元のように修築することが許可されている他は改修の記録は無い。このことから生駒期を通じて大幅な改変はなされていないと考えられる。

生駒親正は豊臣政権下では，中村一氏・堀尾可晴とともに「三中老」として五大老・五奉行の間を調整したとされるが，職制としての「三中老」の存在は疑問視されている（谷口2000）。その後，関ヶ原の戦いで親正が西軍に属したが，子の一正が東軍に属したことから，讃岐1国は一正に与えられることとなった。一正の後，正俊，高俊と4代続くが，家臣同士の争いから生じたお家騒動（生駒騒動）により，寛永17年（1640）に出羽国矢島1万石に転封された。

生駒家の後，一時的に讃岐1国は伊予3藩により分治され，高松城は大洲藩加藤泰興に預けられるが，寛永19年（1642），徳川御三家の水戸藩主徳川頼房の長子松平頼重が東讃岐12万石の領主となった。水戸家を継いだ徳川光圀は頼重の子綱條を水戸家の後継とし，実子頼常を高松藩の2代藩主としている。その後も高松藩と水戸藩の間では養子縁組による相続が行われている。他の御三家の分家は3万石余が最高であることや，江戸城における高松藩主の詰所が溜間となるよう格式が設定されたことから，高松藩が重要視されていたことがうかがえる。このことは，頼重が讃岐入部の際に幕府より中・四国の監察の密命を受けたとされる『増補高松藩記』の記述に通じるものがある。

頼重は，正保3年（1646）以降，石垣の修築を順次行い，寛文10年（1670）にはそれまでの3重4階であった天守を3重5階（3重4階＋地下1階）に改築した。『小神野夜話』等によると，姫路城天守を模倣しようとしたが断念し，小倉城天守を模倣したとしており，現存する天守の写真や絵図から，南蛮造り（唐造り）であることがうかがえる。また，天守1階平面が天守台から張り出していることも特徴の一つである。さらに頼重と2代藩主頼常は，寛文11年（1671）から延宝5年（1677）に北ノ丸（新曲輪）・東ノ丸の造営を行い，月見櫓や艮櫓を建築した。北ノ丸は，三ノ丸北東部を拡張し，石垣で三ノ丸と分離させることで造営された。また東ノ丸は，旧「いほのたな町」（魚棚町）東辺に堀を掘削して造営された。これに伴い，桜ノ馬場南面に所在した大手の木橋が撤去され，新たに桜ノ馬場東面に造営された太鼓門が大手門としての機能を担うようになった。そして新曲輪の造営後，三ノ丸に御殿（披雲閣）が造営される。披雲閣の造営により，それまでの御殿（本丸→本丸・二ノ丸）と対面所（桜ノ馬場）に分掌されていた政庁機能が一本化された。同時に，それまで西ノ丸には，生駒期に生駒隼人，松平期には肥田和泉といった大身の家臣ないし身内の屋敷があったが，これら屋敷地も外曲輪へ移動し，内曲輪と外曲輪との機能分化が明確化しており，縄張りにも藩主権力の確立過程が示されていると言える。

その後，宝永及び安政の南海地震や，落雷，火事，そして海城ゆえの高潮被害等の災害記録が見え，また，石垣修理や堀浚え等の許可の記録は見られるが，大幅な縄張りの改変もなく，松平氏の治世は明治維新まで続くことになる。

また，近年，外曲輪において多くの発掘調査が行われ，絵図や文献との整合が確認されている。内曲輪の旧大手前面に所在した藩主連枝松平大膳家屋敷跡では『高松市街古図』に描かれた位置で門を検出した他，同家の家紋をあしらった理兵衛焼や瓦が出土している（大嶋2002・小川2004）。同様の事例は，西の丸町地区の発掘調査において，『高松城下図屏風』に描かれた鍵型の道路が検出され，生駒期には上坂勘解由，松平期には大久保家の屋敷地であり，そのことを示す木簡や家紋瓦が出土している（佐藤2003）。また，外曲輪南辺では『高松城下屋敷割図』に「井戸址」という標記が見え，同位置で生駒家の家紋が刻印された石材を使用した大型井戸が検出されている（小川2006）。

一方，城下については，『高松城下図屏風』によると，早くも17世紀前半～中葉（寛永～明暦期）には総構えラインを超えて城下が拡大している様子が描かれている。18世紀代には，南に延伸された大手筋と，西浜村方面の丸亀街道沿いを中心に町屋が広がり，南端は石清尾山八幡門前（旅籠町・岩清尾馬場町），西端は摺鉢谷川（西浜町）にまで達するようになる。また，これらの町家に挟まれるように，城下南西側に武家屋敷が広がるようになる。さらに拡大した城下の南辺に，新たな寺町が形成されている。その結果，東は仙場川，南は旅籠町から仙場川に架る高橋に延びる三十郎土手と呼ばれた堤と水路，西は摺鉢谷川より内側が一部に田畑を含むものの新たな城下の範囲となった。頼重入部後の慶安・明暦期には，多くの町触が出されており，この時期に町方支配のための都市法が整備されたものとみられる。城下では紺屋町遺跡において発掘調査が行われているのみで，詳細は不明である。紺屋町遺跡は絵図によると江戸時代には紺屋町と鍛冶屋町があった場所に比定され，鍛冶屋町に相当する場所からふいご羽口や鉄滓が出土している（末光2003）。なお，城下町の支配機能としては，町奉行（当初1名で後2名）

と町与力が置かれていた。奉行所は絵図では高松城の南東隅に位置し，発掘調査でも奉行所の堀跡と考えられる遺構が検出されている（小川2005）。

第４節　廃城後の歴史的環境

慶応4年（1868），朝廷は高松藩を朝敵として征討することを命じた。これに対して高松藩は，城下に陣を構えた土佐藩を中心とした官軍に開城した。維新後も内曲輪の管理は高松藩が行っていたが，『公文録』等によると，明治3年（1870）に建物の老朽化および修繕管理費用が多額に及ぶことを理由に政府（弁官）に廃城願を出し，許可されている。明治4年（1871），藩は領民に城内の見物をさせ，藩庁を内町の松平操邸に移して準備を行っていたが，大阪鎮台第2分営が置かれることが決定し，建物の破局が中止され，兵部省（のち陸軍省）の管理となった。その後，鎮台の配置を改め，明治6年（1873）に丸亀に広島鎮台の営所が置かれることとなり，明治7年（1874）丸亀営所の新築により，高松営所が閉じられることとなった。その後も陸軍省の管理下にあり，城郭建物は老朽化を理由にそのほとんどが取り壊され，明治17年（1884）には天守も取り壊しとなった。その後，内曲輪は明治23年（1890）に松平家に払下げとなった。『建物拂下登記願』によると太鼓門・桜御門（及び多聞）・鳥櫓（及び多聞）・武櫓（及び鉄門・黒櫓）・簾櫓・文櫓・多聞・月見櫓（及び多聞）・鹿櫓（及び多聞）・艮櫓が残存していたが，明治35年（1902）の第8回関西府県聯合共進会の会場となった際の高松城の絵図『共進会場平面図』では，建物のほとんどが無くなっていることがうかがえる。同年には天守台に藩主頼重を祀る玉藻廟が，大正6年（1917）には三ノ丸に松平家の別邸として披雲閣が各々建築され，内苑が整備されている。

外曲輪の変貌はさらに激しく，外堀が早くから埋められ城下と一体となった。さらに，明治19年（1886）に尋常小学校，明治23年（1890）に裁判所，明治24年（1891）に郵便局，明治28年（1895）に県庁等公共施設が建築された。明治30～33年（1897～1900）には外堀の北西端の堀川港を埋め，高松築港工事が行われ，明治34～37年（1901～1904）及び大正10年～昭和3年（1922～1928）には拡張工事が行われ，城の北側海域が埋め立てられ，海城としての景観が失われることとなった。明治末～昭和初期にかけては，西ノ丸および内堀の一部が市に譲渡され，その一部に皇太子殿下（昭和天皇）御成婚記念道路（現在の中央道路の根幹）が建設された。

昭和20年（1945）の高松空襲では，桜御門が焼失し，市街地の大部分が空襲に遭い，松平家の文庫や藩政期の文書・記録を引継ぎ保管していた香川県庁も焼失した。高松城内の残存建物のうち月見櫓（含続櫓）・水手御門・渡櫓・艮櫓が昭和22年（1947）に国宝（現在の重要文化財）の指定を受けた。この後，東ノ丸は運輸省や裁判所の所有地となったが，昭和29年（1954）に本丸・二ノ丸・三ノ丸・北ノ丸・桜ノ馬場及び残存する堀が高松市の所有となり，昭和30年に国史跡に指定された。昭和32年（1957）には月見櫓・水手御門・渡櫓の修理が行われた。しかし，艮櫓が所在する東ノ丸北部は日本国有鉄道の所有地で，史跡指定地外となっており，その修理及び修理後の管理が出来ないことから，昭和42年（1967）に史跡指定地内の太鼓櫓台に移築復元された。その後，東ノ丸が県有地になり，昭和59年（1984）には艮櫓台を含む東ノ丸北辺の石垣が史跡の追加指定を受け，現在に至っている。

外曲輪や城下については，戦後の復興で大きく変貌したが，現在も地割りや町名に名残が見られる。

第５節　玉藻廟の歴史的環境

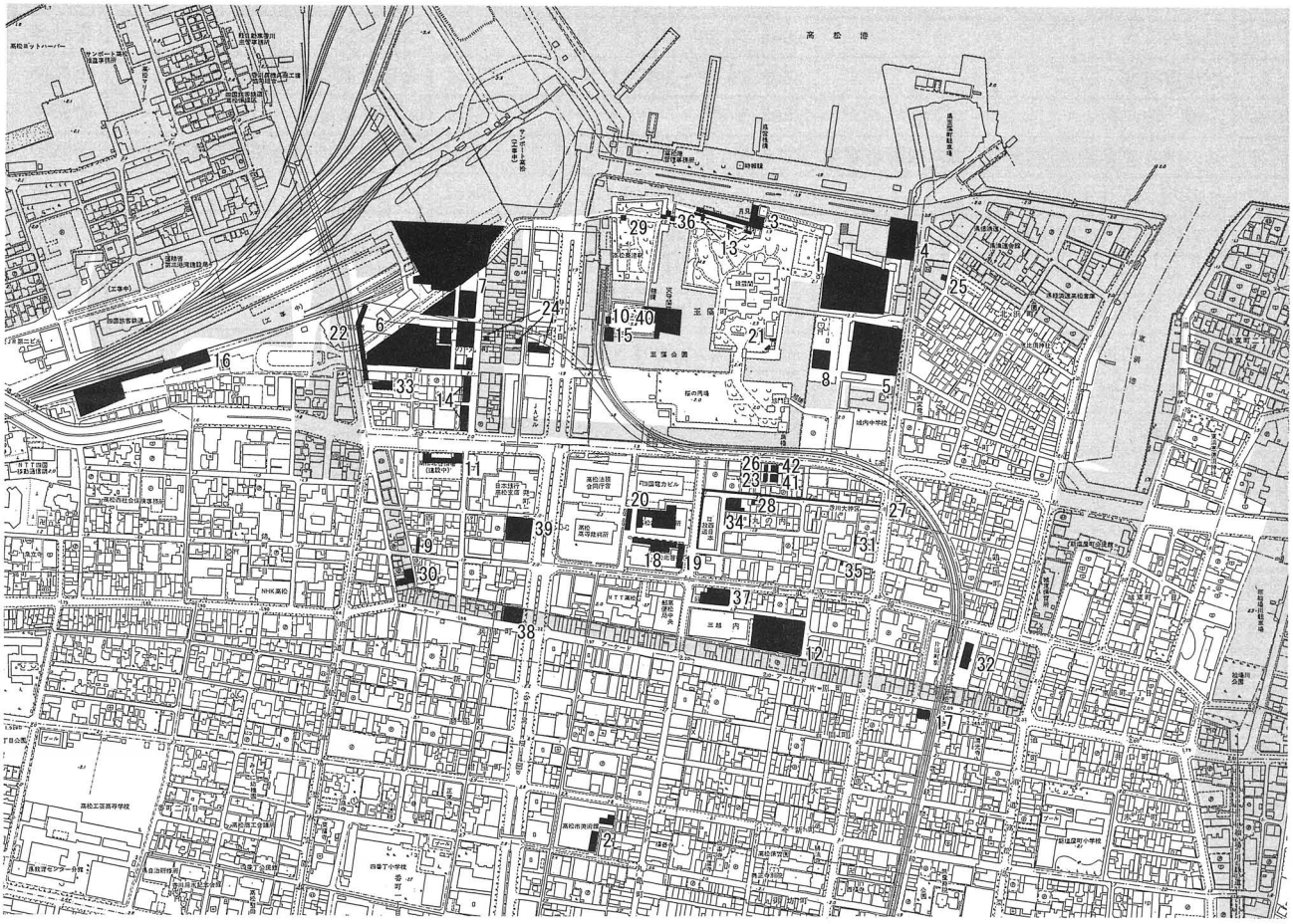
玉藻廟は，高松松平家第11代当主松平頼聰が松平家鎮守の廟として高松藩祖松平頼重候を祀った御廟で，明治34年（1901）4月に起工，翌35年（1902）3月に完成した。建築の経緯については，第5章で詳しく述べるが，御廟は讃岐東照宮屋島神社に倣って建築され，御神体は松平家菩提寺の仏生山法然寺般若台より理兵衛焼の松平頼重像を遷座したものである。

12代当主頼壽は明治42年（1909）に頼聰を合祀し，代々の御霊を祭神とした。寛永19年（1642）5月28日に松平頼重が高松に入部したことにちなんで，5月28日を大祭日として祭典を執り行っている。特に，昭和16年（1639）5月28日には松平頼重入部300年を記念して大祭を執り行っている。

昭和19年（1944）夏，第2次世界大戦の戦火が及ぶことを懸念して，御神体を屋島神社に遷座しており，その後玉藻廟は空家状態であり，戦後荒廃していたと言われている。昭和29年（1954）に高松城が高松市の所有になったが，玉藻廟及び関連諸施設は松平公益会が管理することとなった。その後，昭和31年（1956）に財団法人松平公益会敷地内に新玉藻廟が建築され，屋島神社より御神体を再遷座することになり，玉藻廟及び関連諸施設を高松市に寄贈されている。

表4 高松城略年表

西暦	和暦	主な出来事
1588	天正16	生駒親正が野原の海浜で高松城築城に着手
1627	寛永4	幕府隠密が讃岐を探索し高松城の様子について報告
1636	寛永13	石垣の修築を許される
1640	寛永17	生駒藩騒動の処分として，生駒高俊を出羽国矢島１万石に転封
1642	寛永19	松平頼重，常陸下館から讃岐高松12万石へ転封を命じられる
1646	正保3	二ノ丸（＝西ノ丸・桜の馬場）・三ノ丸の石垣修築を許される
1662	寛文2	落雷で高松城本丸（＝二ノ丸）北西隅の矢倉焼失，多聞56間類焼，黒金門東北隅の矢倉のそばで鎮火する
1670	寛文10	天守修築完成
1676	延宝4	北ノ丸矢倉（＝月見櫓）の上棟をする
1677	延宝5	艮矢倉が完成
1707	宝永4	宝永南海地震で天守・多聞の屋根壁破損，石垣・塀崩壊，櫓崩壊 石垣の修築許される
1729	享保14	乾櫓（＝簾櫓？）に落雷
1854	安政1	安政南海地震で天守屋根壁破損，本丸一重櫓破損，石垣・塀破損，城内建物大破
1868	慶応4	官軍に開城
1884	明治17	高松城天守解体
1917	大正6	披雲閣が完成
1954	昭和29	高松市の所有となる
1955	昭和30	史跡指定を受け，高松市立玉藻公園として開放



第５図　高松城跡および周辺部発掘調査箇所位置図

表5　高松城跡周辺発掘調査履歴（～2008.5.31）

	遺 跡 名	調査期間	面 積	調査原因	調査機関
1	東ノ丸跡	1985.4.15～1986.5.31	6,047㎡	県民ホール建設	県教委
2	紺屋町遺跡	1985.10.16～1986.1.7	200㎡	市立美術館建設	市教委
3	水手御門	1990.5.14～1990.6.5	2,000㎡	公園整備	市教委
4	県民小ホール地区	1995.2.7～1995.3.31	1,000㎡	県民小ホール建設	県教委
5	県立歴史博物館地区	1995.4.1～1996.3.31	5,000㎡	県立歴史博物館建設	県埋文
6	西の丸町地区Ⅱ	1995.12.1～1997.3.31	4,539㎡	サンポート高松総合整備事業	県埋文
7	西の丸町地区Ⅲ	1997.6.1～2000.12.31	10,052㎡	サンポート高松総合整備事業	県埋文
8	作事丸	1997.11.20～1997.12.25	300㎡	事務所建設	市教委
9	西内町	1997.7.10	47㎡	PTA会館建設	市教委
10	地久櫓	1997.12.3	4㎡	史跡整備	市教委
11	高松北署地区	1998.3.1～1998.6.30	1,000㎡	高松北警察署建設	県埋文
12	内町	1998.4.16	65㎡	店舗建設	市教委
13	三の丸	1998.7.8～1998.8.11	14㎡	史跡整備	市教委
14	西の丸町地区Ⅰ	1999.4.1～2000.12.22	390㎡	サンポート高松総合整備事業	県埋文
15	地久櫓台	1999.10.25～2004.3.23	170㎡	史跡整備	市教委
16	浜ノ町遺跡	2000.2.15～2002.3.31	4,992㎡	サンポート高松総合整備事業	県埋文
17	片原町遺跡	2000.6.15～2005.6.22	120㎡	ビル建設	市教委
18	丸の内地区	2001.4.1～2001.9.30	488㎡	家庭裁判所建設	県埋文
19	松平大膳家中屋敷跡	2002.2.1～2002.3.25	99㎡	弁護士会館建設	市教委
20	松平大膳家上屋敷跡	2002.4.15～2002.9.1	970㎡	ビル建設	市教委
21	三の丸，竜櫓台北側	2002.10.7～2002.10.10	8㎡	公園整備	市教委
22	西の丸町Ｄ地区	2002.10.10～2002.10.30	131㎡	サンポート高松総合整備事業	県教委
23	丸の内	2002.11.28～2002.11.29	10㎡	ビル建設	市教委
24	無量壽院跡	2002.11.28～2003.3.14	490㎡	都市計画道路高松駅南線建設	市教委
25	中堀，北浜町	2003.5.13	14㎡	共同住宅建設	市教委
26	丸の内，都市計画道路高松海岸線街路事業	2003.6.11	23㎡	都市計画道路高松海岸線建設	市教委
27	丸の内，再生水管布設工事	2003.8.18～2003.9.22	296㎡	再生水管布設	市教委
28	丸の内，個人住宅建設	2003.8.25～2003.8.26	22㎡	個人住宅建設	市教委
29	二の丸，玉藻公園西門料金所整備工事	2003.8.26～2003.9.4	10㎡	公園整備	市教委
30	外堀，西内町，共同住宅建設	2003.10.8～2003.10.9	30㎡	共同住宅建設	市教委
31	丸の内，共同住宅	2003.11.12～2003.11.19	50㎡	共同住宅建設	市教委
32	東町奉行所跡	2003.12.8～2004.3.15	511㎡	共同住宅建設	市教委
33	西の丸町	2004.7.13～2004.7.19	6㎡	ビル建設	市教委
34	丸の内	2004.7.21	19㎡	ビル建設	市教委
35	丸の内	2004.11.9	48㎡	個人住宅建設	市教委
36	鉄門	2005.1.24～2005.8.19	62㎡	史跡整備	市教委
37	厩跡	2005.2.21～2005.5.12	511㎡	立体駐車場建設	市教委
38	外堀，兵庫町	2005.5.11～2005.5.12	320㎡	ビル建設	市教委
39	寿町二丁目地区	2006.1.12～2006.3.28	550㎡	ビル建設	市教委
40	天守台	2006.11.1～2008.3.31	1,530㎡	史跡整備	市教委
41	江戸長屋跡Ⅰ	2007.6.18～2007.7.31	84㎡	都市計画道路高松海岸線建設	市教委
42	江戸長屋跡Ⅱ	2008.4.1～2008.4.30	70㎡	都市計画道路高松海岸線建設	市教委

＊試掘調査後本調査を実施したものは本調査のみ記載(試掘調査後本調査着手前のものを含む)

第３章　工事の概要

第１節　玉藻廟記録保存

業務概要

業　務　名	史跡高松城跡玉藻廟記録保存業務委託
履行場所	高松市玉藻町
受　託　者	財団法人文化財建造物保存技術協会
履行期間	平成18年8月28日～平成18年12月20日
工　　程	委託契約　　平成18年8月
	現地調査　　平成18年9月～10月
	報告書作成　平成18年11月～12月

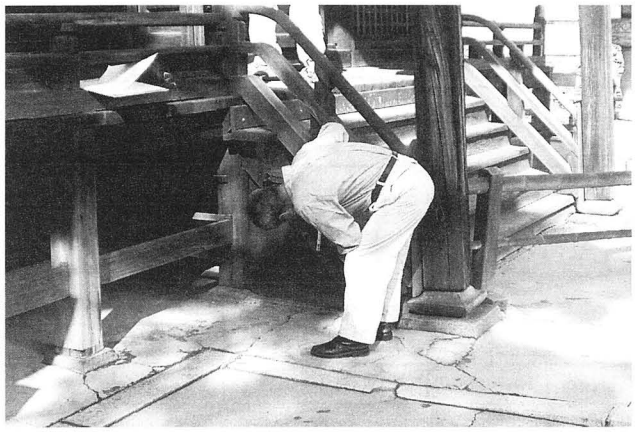


写真1　解体前階段調査

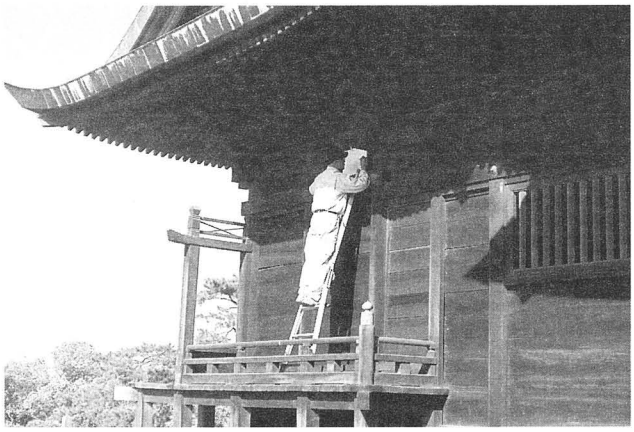


写真2　解体前側面調査

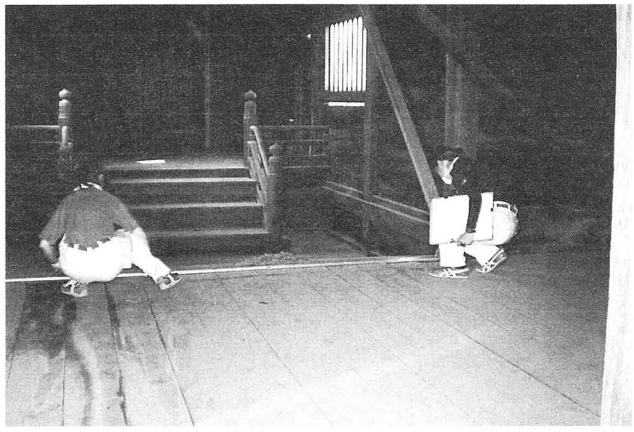


写真3　解体前拝殿調査

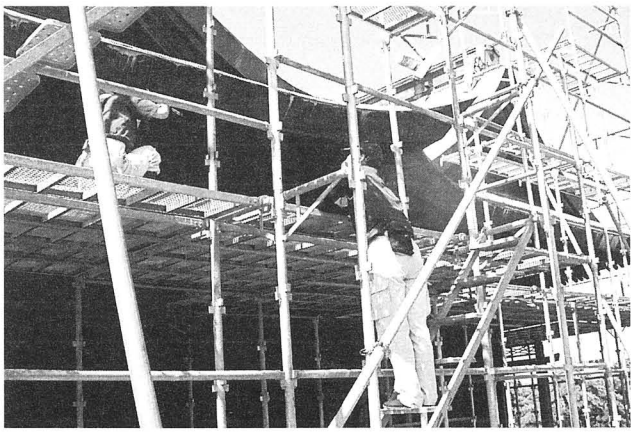


写真4　屋根調査状況

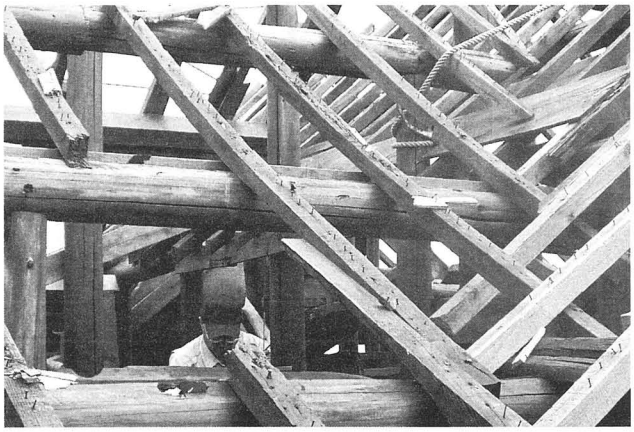


写真5　拝殿小屋組み調査

第２節　玉藻廟解体工事

工事概要

工　事　名	史跡高松城跡玉藻廟解体工事
工事場所	高松市玉藻町地内
請　負　者	株式会社熊組
工　　期	平成18年8月30日～平成18年11月10日
工事規模	玉藻廟解体延べ面積86.3㎡，附帯施設解体1式
工事工程	工事請負契約　平成18年8月
	附帯工　　平成18年9月
	足場工　　平成18年9月～10月
	解体工　　平成18年10月～11月

表6　解体工事施工実績表

工　種	種　別	細　別	規　格	単位	実施数量
直接仮設工	足場工	足場工	単管足場	式	1
		昇降用足場	H=13.6m	ヶ所	1
とりこわし工	とりこわし工	屋根仕上材撤去	銅版	㎡	173
		建物解体	木造	㎡	86.3
		基礎解体		㎡	86.3
		土間コンクリート撤去		㎡	256
		木柵撤去		m	73.0
附帯工	灯籠撤去	灯籠撤去		対	1

写真6　西側灯籠撤去状況

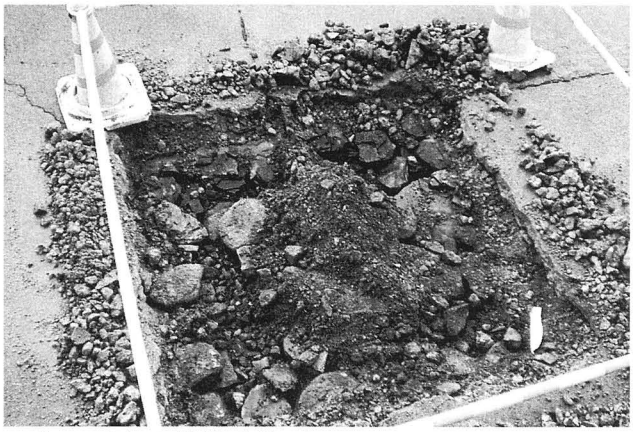


写真7　東側灯籠撤去状況

写真8　野地板解体状況①

写真9　野地板解体状況②

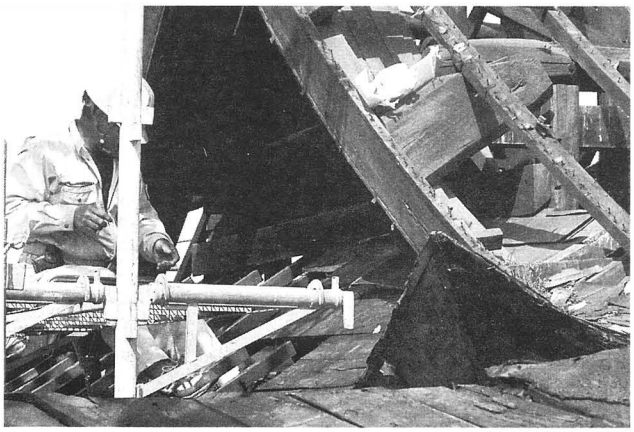


写真10　本殿屋根解体状況

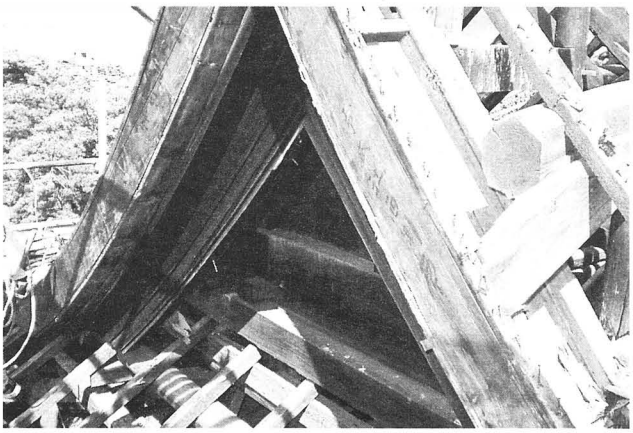


写真11　本殿小屋組み状況

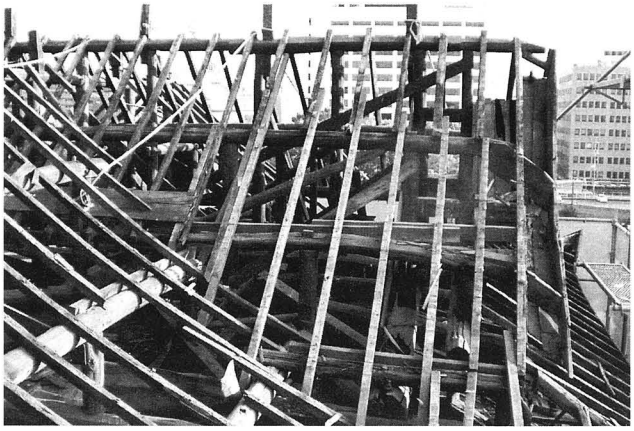


写真12　拝殿小屋組み

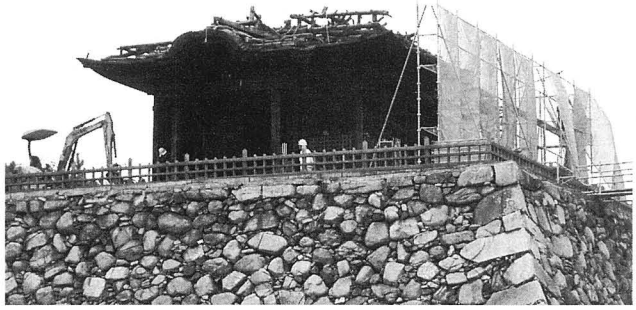


写真13　小屋組み解体完了

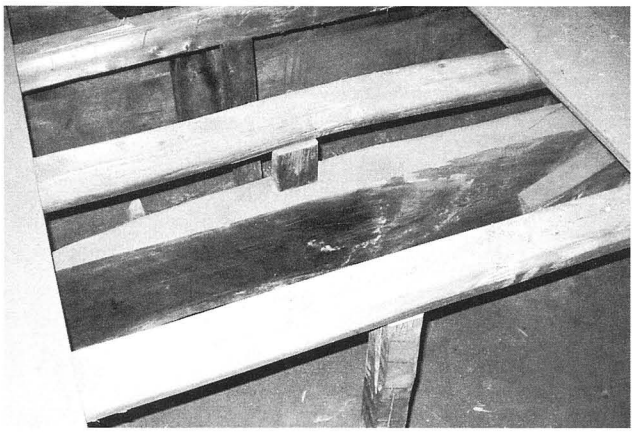


写真14　本殿床下状況

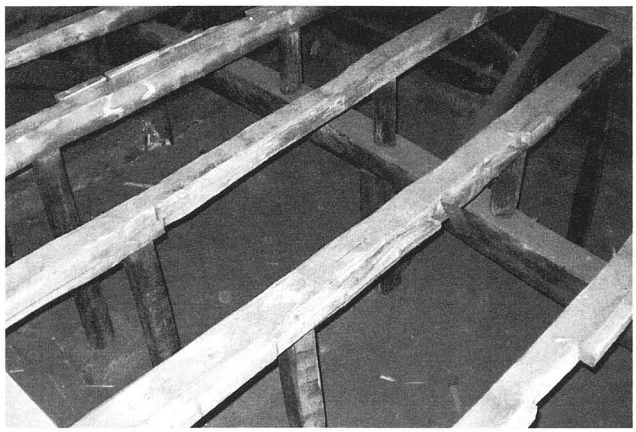


写真15　拝殿床下状況

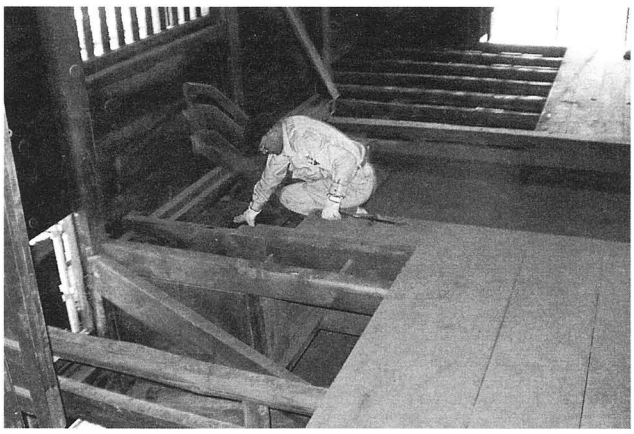


写真16　拝殿床解体状況

写真17　廃材積み込み状況

写真18　廃材搬出状況

写真19　本殿基礎

写真20　床面モルタル撤去状況

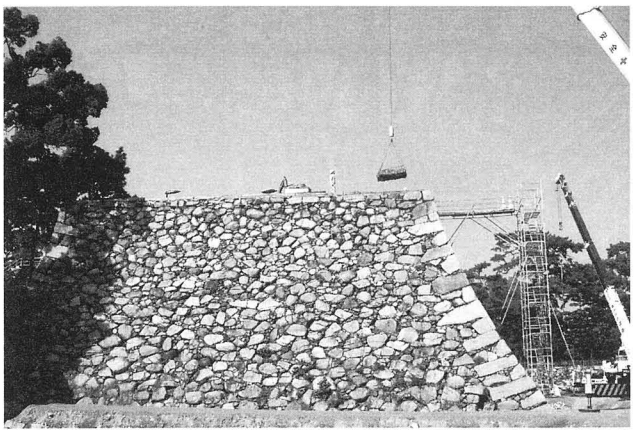


写真21　解体完了状況

第３節　玉藻廟関連施設撤去工事

工事概要

工　事　名　史跡高松城跡天守台石垣解体工事
工事場所　高松市玉藻町地内
請　負　者　四国産業株式会社
工　　期　平成19年9月28日～平成20年4月30日
工事規模　本丸跡に所在した玉藻廟の附属施設の撤去を行った。
　　手水舎解体延べ面積19.2㎡，狛犬1対，灯籠3対，神明鳥居1基
工事工程　工事請負契約　平成19年9月
　　解体工　　平成19年12月

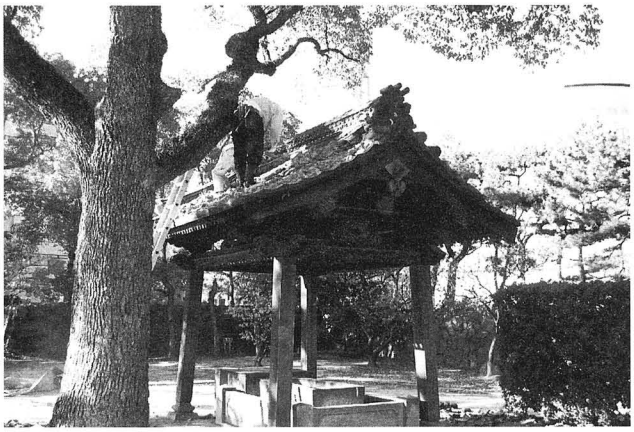


写真22　手水舎解体状況①

写真23　手水舎解体状況②

写真24　手水舎解体状況③

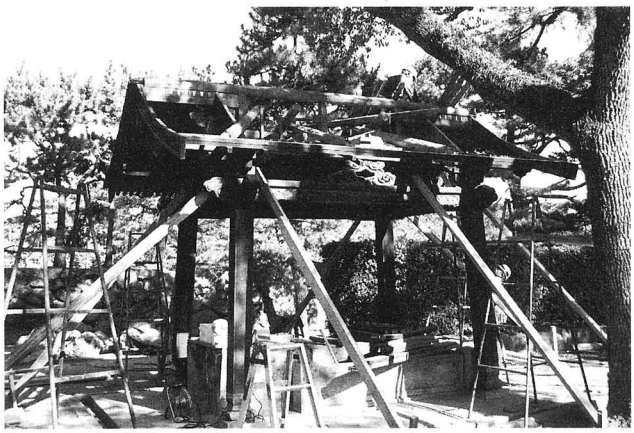


写真25　手水舎解体状況④

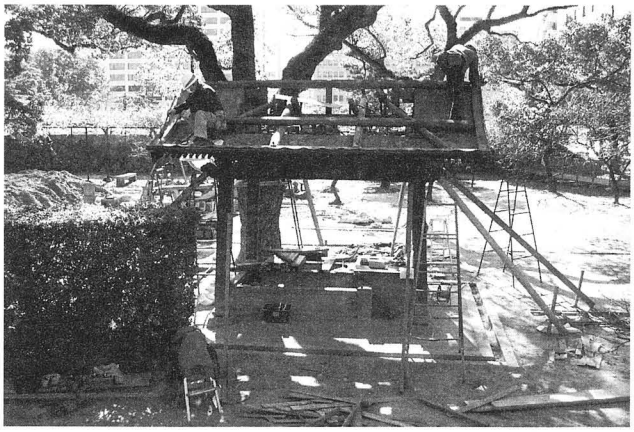


写真26　手水舎解体状況⑤

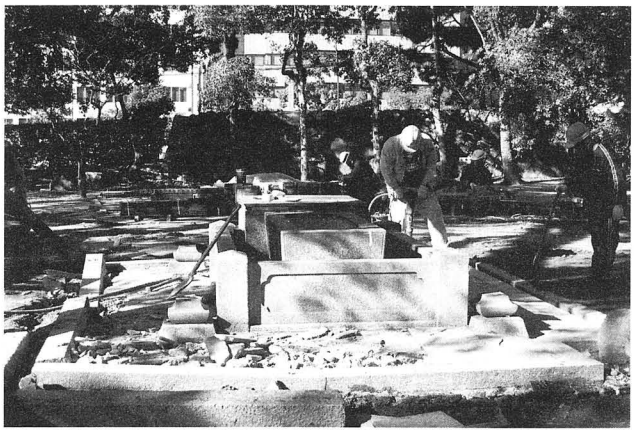


写真27　手水舎解体状況⑥

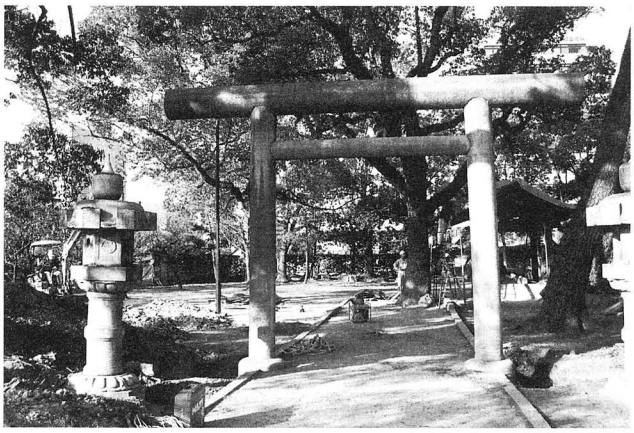


写真28　鳥居撤去状況

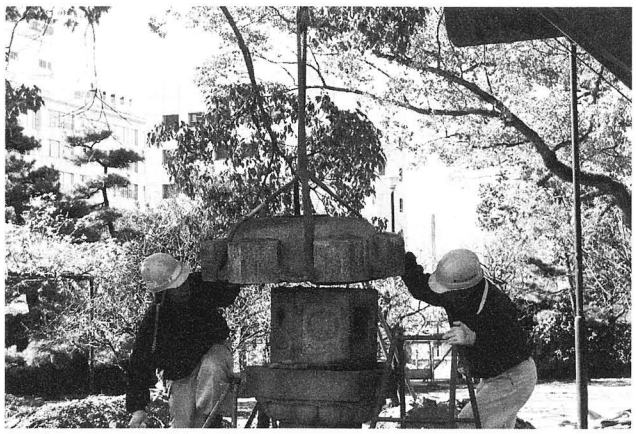


写真29　灯籠撤去状況

第４節　玉藻廟階段撤去工事

①史跡高松城跡天守台発掘調査業務委託

業務概要

履行場所	高松市玉藻町地内
受託者	四国産業株式会社
履行期間	平成18年11月1日～平成19年3月29日
業務規模	天守台発掘調査に伴い，階段の上部の撤去を行った。 撤去面積　54.54㎡
工事工程	委託契約　平成18年11月 階段撤去　平成18年12月～平成19年1月

②史跡高松城跡天守台階段撤去工事

工事概要

工事場所	高松市玉藻町地内
請負者	四国産業株式会社
工期	平成19年3月13日～平成19年3月30日
工事規模	玉藻廟の階段の下部の撤去を行った。 撤去面積　22.26㎡
工事工程	工事請負契約　平成19年3月 階段撤去　平成19年3月

第４章　調査の概要

第１節　建造物の名称・所在地

名　　称　　史跡高松城跡　旧玉藻廟
所 在 地　　香川県高松市玉藻町2番1号

第２節　建造物の概要

① 構造及び形式（解体前）

a　概要

社殿は権現造（本殿・幣殿・拝殿よりなる），南に面して建つ。

【拝　殿】桁行3間，梁間2間，一重，入母屋造，正面千鳥破風付，向拝1間（向唐破風付），銅板葺。
【幣　殿】桁行1間，梁間2間，一重，両下造，銅板葺。
【本　殿】桁行3間，梁間2間，前室付き，一重，入母屋造，銅板葺。

b　平面

【拝　殿】桁行3間，梁間2間，背面中央間にて幣殿と接続する。四周に縁を廻らし（背面中央間を除く），正面のみに高欄を設ける（後設）。正面中央間の縁から向拝柱間に木階（5級），登り高欄を設ける。
【幣　殿】桁行1間，梁間2間，本殿との境に縁，高欄を廻らし，木階（3級），登り高欄を設けて本殿と接続する。拝殿との境には木階（1級）を設ける。
【本　殿】桁行3間（背面2間），梁間2間，四周に縁を廻らし，両側面に高欄，両側の背面側に脇障子を設ける。

c　基礎

【拝　殿】身舎廻りは（背面中央間を除く）礎石（花崗岩延石）を並べ，礎石上に土台を置く。縁束は礎石（花崗岩切石）建ち，向拝柱は石製礎盤上に建つ。
【幣　殿】両側面は，礎石（花崗岩延石）を並べ，礎石上に土台を置く。
【本　殿】縁束・側柱間に亀腹を設け，縁下及び亀腹はコンクリート叩きとし，雨落葛石を廻らす。身舎廻りは礎石（花崗岩延石）を並べ，礎石上には土台を置く。縁束は礎石（花崗岩切石）上に建つ。

d　軸部

【拝　殿】柱は，正面中央間のみ丸柱で，その他は角柱で土台建ち。背面中央間を除いて腰貫，内法貫，切目長押（外周のみ），内法長押を廻らし，頂部を頭貫，台輪で繋ぐ。向拝柱は几帳面取り角柱で，礎石・石製礎盤上に建つ。向拝柱頂部は虹梁で繋ぐ。
【幣　殿】柱は角柱（面取り）で土台建ち。両側面に腰貫，内法貫，内法長押を廻らし，頂部を頭貫，台輪で繋ぐ。
【本　殿】柱は丸柱で土台建ち。四周に腰貫，内法貫，切目長押，内法長押を廻らし，頂部を頭貫，台輪で繋ぐ。

e　斗栱

【拝　殿】柱頂部に平三斗組を置く，正面中央間のみ中備に平三斗を置く。斗栱は実肘木にて丸桁を受ける。向拝組物は，向拝柱上に大斗を置いて連三斗とし，内側は出三斗として，二組の組物を繋いだ構えとなる。出三斗上の実肘木にて菖蒲桁を受ける。丸桁は平斗上の実肘木にて受ける。虹梁間には蟇股（三つ持ち合わせ亀甲の家紋か）を置く。
【幣　殿】柱頂部に平三斗組を置き，実肘木にて丸桁を受ける。
【本　殿】両側面と背面の柱頂部に二手先斗栱を置く。一段目通し肘木上の中備に巻斗を置いて二段目の通し肘木を受け，二手先目の実肘木にて丸桁を受ける。組物間には琵琶板が入る。正面の柱頂部ならびに中備には出三斗を置き，一手先目の巻斗にて幣殿の天井桁を受ける。

f　軒廻り

【拝　殿】軒は二軒繁垂木。木負，茅負，布裏甲，軒付銅板包。
向拝は唐破風を置き，唐破風中央には茨垂木8本を架け，菖蒲桁にて受ける。唐破風中央に懸魚（兎の毛通し）を付ける。唐破風両端には打越垂木，飛檐垂木の納まりとする。

【幣　殿】軒は二軒繁垂木。木負，茅負，布裏甲，軒付銅板包。

【本　殿】軒は二軒繁垂木。木負，茅負，布裏甲，軒付銅板包。

g　小屋組

野垂木は等間隔に配し，野垂木は棟木ならびに母屋に釘打ちにて止める。小屋梁は梁間方向は二段に掛け，下梁は拝殿中央棟束位置より本殿背面まで一本で通す。

棟木，母屋には全社殿とも野垂木，野地板を張る。幣殿の野棟木は本殿の棟束に枘差し込栓止めとする。各野垂木上には束立ちで箱棟を受ける。

【拝　殿】桁上部の各柱間位置と梁間中央（棟通り）に敷梁を縦横に架け，この上部の同位置に小屋梁（母屋束踏梁）と中引梁（棟束踏梁）を架けて，梁組を構成する。梁間中央の棟通りに棟木を，棟両脇と桁通りに母屋束を配して母屋を架け，鼻母屋置く。母屋束は梁間，桁行とも小屋貫で緊結され，筋違で補強していた。

【幣　殿】梁間中央に梁を架け，両側の桁に小屋梁を片持梁とし軒側まで延ばして母屋束踏梁とする。梁間中央に架かる梁の片持梁上に中引梁（棟木束踏梁）を入れて棟束を立て，その両側に一の母屋・二の母屋，更に片持梁先端に三の母屋束を立てて母屋を受ける。棟束，母屋束間は筋違で繋ぐ。棟木，母屋の先端は本殿・拝殿の棟束ならびに母屋束に緊結する。

【本　殿】桁行方向に梁を架け渡し，先端は片持梁で木負位置まで延ばす。この梁の中央桁行に梁，桁位置と片持梁先端は束立ちで，上部の梁（母屋束踏梁）を受ける。棟通りには中引梁（棟束踏梁）が入り，棟束が立つ。棟束両脇には一の母屋，二の母屋が棟束にのり，片持梁先端が三の母屋で梁直上に置く。棟束・母屋束間は筋違で緊結する。

h　縁廻り

【拝　殿】四周に切目縁を廻らし，正面のみ高欄（高欄親柱は擬宝珠付）を置き，向拝には登り高欄を設け，木階段5級を備える。

【幣　殿】内部背面側の本殿との接続箇所に切目縁を設け，高欄（高欄親柱は擬宝珠付）を置く，その中央には本殿に至る登り高欄，木階3級（現状木階の下に5級の木階が残る）を備える。

【本　殿】四周に切目縁を廻らすが，高欄は両側面と正面の外縁上（半間）に設け，正面の縁は幣殿の中央間まで張り出し，木階（3級）登り高欄が付く。切目縁正面両側の各隅のみ擬宝珠親柱を納める。背面柱筋の両縁上には脇障子をそれぞれ置き，笠木，竹の節付きとする。

i　妻飾り

【拝　殿】妻飾は，虹梁大瓶束の納まりとなる。
前包上，指母屋位置に平三斗組（大斗，枠肘木，巻斗，実肘木）。斗組上に指母屋を入れ，指母屋間に虹梁（鯖尻り，眉決り付）を渡す。虹梁中央に大瓶束，上部の大斗肘木で指棟木を受け，指母屋，指棟木で破風板を受ける。破風板拝部に蕪懸魚（鰭付）。
千鳥破風（正面，向拝上部）。
虹梁大瓶束式で，両妻と同形式であるが，指母屋位置の斗組は大斗肘木形式となる。

【幣　殿】なし。

【本　殿】妻飾は，虹梁大瓶束の納まりとなる。各納まりは拝殿と同様。

j　屋根

拝殿入母屋造，幣殿両下造，本殿入母屋造の権現造の形式をとる。野垂木上に野地小舞を釘打ちし，土居葺上にアスファルト防水シートを敷き，銅板を葺く。

【拝　殿】入母屋造，正面中央に千鳥破風，向拝部に唐破風付。各面とも銅板葺。棟は両妻間，千鳥破風部，唐破風部ともに箱棟で銅板包み。棟の両端及び端部は鬼板（銅板包み）で納める。

【幣　殿】一重両下造で，前方は拝殿，後方は本殿屋根上に接続する。両面とも銅板葺とし，箱棟は銅板包み。
【本　殿】一重入母屋造，平葺，棟とも拝殿と同形式。棟上両端に千木・勝男木各2組を置く。

k　床組
【拝　殿】地盤はコンクリート叩き仕上げ。床板は梁間方向に張り，大引を桁行中央間柱筋に入れ，根太は梁間方向（2間）を六ツ割とする。大引より下部の床束は，梁間中央の1本のみで，束石上に建ち，この床束は床束下部に小梁を入れ足固めとし，床束をコンクリートに埋め込んで建てる。更に両脇間は床板より床束下部に斜材（筋違）を入れて補強している。
【幣　殿】拝殿接続部より本殿木階下部に6本の根太が梁間方向に入る。床束は床石上に建ち，上部で床板を受けるが，床束のない（コンクリート埋め込み）ものが2本ある。また，木階下部より2本目は根太のみで床束はなく，束石が残り，3本目の根太は床板より10cmほど下がった位置にあり，束下部を足固めで止めている。
【本　殿】床板は拝・幣殿と同様に梁間方向に張り，根太は桁行に柱際と柱真，その中間の5本で割り付けられ，床束で受ける。拝殿と同様に桁行の床高中間に大引梁を入れ，大引下部も中央に床束を建て，束石上に建つ。

l　天井
本殿（桁行9間割，梁間5間割）・幣殿（桁行9間割，梁間12間割）・拝殿（桁行12間割，梁間6間割）ともに格天井。

m　柱間装置
【拝　殿】正面中央間は両開き両折桟唐戸，正面両脇間，両側面及び背面両脇間は，横板張りの板壁となる。幣殿と接続する背面中央間には開放。
【幣　殿】両側面は横板張りの板壁とするが，両側面中央間は腰高まで横板張りの板壁とし，その上に連子窓を設ける。拝殿と接続する正面ならびに本殿と接続する背面には開放。
【本　殿】正面中央間は両開き両折桟唐戸，正面両脇間，両側面，背面ともに横板張りの板壁とする。ただし，内部の正面両脇間，両側面，背面には縦板張りの板壁を張って二重にしている。

②　主要寸法
表7　玉藻廟主要寸法表

区　分	摘　要	寸法			
		本　殿	幣　殿	拝　殿	合　計
桁　行	桁行両端柱真々	3.733m	3.733m	6.768m	
梁　間	梁間両端柱真々	3.227m	4.075m	3.733m	
軒の出	側柱真より茅負外下角まで	1.921m	1.697m	1.515m	
（向拝）	向拝柱真より茅負外下角まで	—	—	1.194m	
軒　高	柱礎石上端より茅負外下角まで	3.871m	4.340m	4.340m	
（向拝）	向拝礎石上端より茅負外下角まで	—	—	3.814m	
棟　高	柱礎石上端より棟頂上まで	7.344m	7.595m	7.910m	
平面積	側柱真々内側面積	12.046㎡	15.212㎡	25.265㎡	52.523㎡
軒面積	茅負外下角内側面積	31.873㎡	5.162㎡	41.978㎡	79.013㎡
（向拝）	茅負外下角内側面積	—	—	7.460㎡	
屋根面積	平葺面積	—	—	—	185.31㎡

③　創立
香川県高松市玉藻町にある玉藻廟は，高松城天守跡地に，第11代松平頼聰公が松平家の鎮守の廟として藩祖松平頼重を祀ったもので，明治34年（1901）4月8日起工，同年11月19日上棟，翌年3月に完成した。

高松城は天正15年（1587），生駒親正が豊臣秀吉から讃岐の藩主に封ぜられ，その居城として翌16年築造に着手した城である。以降，島嶼部を除く香川県全域を占めていた讃岐の政治や経済・交通・文化などの中心となり，現在の高松市にまで発展の基となった。

江戸幕府の大政奉還により，江戸から明治に移行。明治2年（1869）6月には，藩主松平頼聰が版籍を奉還し，藩知事に任ぜられて引き続き藩政に当たった。その後22年（1889）5月，陸軍大臣秘書福家安定より，高松城払い下げについて内部情報がもたらされ，翌23年（1890）2月，高松城は旧藩主松平頼聰により払い下げられた。払い下げ後，城内に最初に建てられたのが玉藻廟であった。

『玉藻御廟御造営御遷座御祭典記事』によると，玉藻廟建設に際し，明治33年（1900）11月，松平家の家扶辻盛令が上京の際，頼聰より，松平家の菩提寺である仏生山来迎院法然寺の般若台にある藩祖頼重像を天守台に祀るため，屋島神宮石の間造りに倣った建物を建設するよう指示している（註1）。そして辻が高松へ戻った後の12月13日，大工藤本松蔵にそのことを内密に伝えて屋島神社の間取りや模様などを図面に表すよう指示し，翌34年（1901）1月10日，松枝舎（現㈶松平公益会の前身）関係者が仏生山へ拝礼する時に藤本が同行して頼重像の寸法を調べたという。さらに，同月15日に辻が造営の絵図面を持って上京して頼聰へ渡し，在京中の2月5日に，藤本は中野武營とともに頼聰のもとへ行き，御廟建設やその位置などについて，次のとおり決定した。

・構造は屋島神社に倣い，造作方は東京邸宅の琴平宮社殿に倣うが，彫刻類はなく簡素にする。
・社殿は南に面し，社殿の四方全てに人が通れるようにする。
・拝殿より本殿への渡りは屋島神社に倣い，階段は拝殿一段，本殿二段とする。
・千木・勝男木は取り付ける。

辻は帰郷の前日に当たる2月7日に造営発表の許可をもらい，10日松枝舎等に玉藻廟造営の発表を行った。3月7日には各施工担当棟梁へ申しつけ，4月より工事が始められた。

天守台上に社殿の配置を決定し，4月9日に那須善次郎が上京の際に起こし絵図を持ち帰って頼聰に確認した。4月23日に東京の家扶浅田数太からの伝言では，拝殿は必要なく石の間にて拝礼できるようにしては，とのことであった。そのため，幣殿を取設することを願い出るため，絵図面を持って再び伺ったところ，東京諸神社の類例調査を行った後の7月2日にその許可を得た。

明治34年（1901）6月19日に地鎮祭を執行，同月30日に天守台の水盛を行い，11月5日に社殿の柱を立て，同月19日に上棟式を行った。明治35年（1902）3月に建物が完成し，4月6日，祭神として法然寺より頼重公尊像を遷座した。

註1　仏生山来迎院法然寺は高松市仏生山町に位置し，寛文10年（1670）高松藩松平家の菩提寺として建立された。山頂には法然上人と松平家の墓所がある般若台がある。また，屋島神社は高松市屋島中町に位置し，屋島東照宮とも称する。祭神は徳川家康，相殿に松平頼重を祀る。文化12年（1815）社殿が完成したが，昭和48年（1973）火災により焼失。翌年新社殿が再建された。

第５章　調査事項

第１節　調査の内容

①　実施工程表

表8　史跡高松城跡玉藻廟記録保存業務工程

区分 ＼ 期間		9月				10月				11月				12月				備考
		1週	2週	3週	4週	1週	2週	3週	4週	1週	2週	3週	4週	1週	2週	3週	4週	
着手打合せ及び事前協議		調査行程、調査内容等打合せ																
現地調査・図画作成	図画作成のための実測等	環境、平面・立面調査		断面・屋根調査		小屋組調査												
	構造形式等建造物調査			構造形式、構成部材調査														
	写真撮影ほか	解体前写真・詳細写真他																
	図画作成	平面・断面・立面各図及び詳細図作成																
報告書作成	史料調査（沿革等調査）					建造物の沿革及び変遷等調査												
	報告書等取り纏め								図画及び写真整理及び報告書本文作成									
	成果品提出														成果品（図画及びデータ提出）			

②　写真撮影（仕様）

玉藻廟解体前の姿を記録保存するため，現状の建物を大判カメラ（5×7判）にて撮影した。また，組物や建具などの細部写真については，35mmフィルムなどにて撮影した。

③　実測の方法

・実測調査

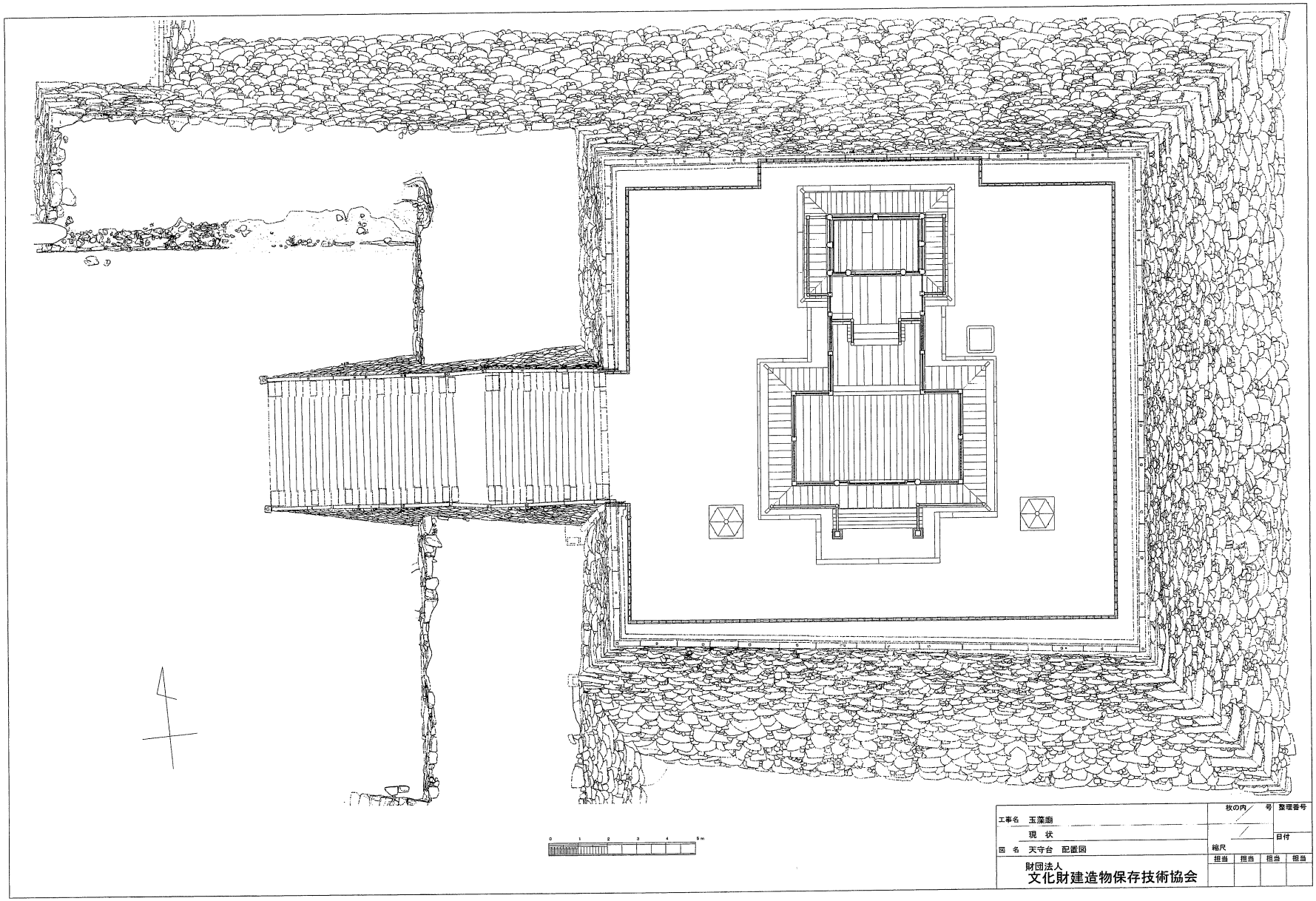
調査対象となる建造物の，図面作成のため外観・軸部・小屋組・床組・屋根等の各部分について詳細な実測を行うとともに，建造物の変遷について，各部に残る痕跡及び墨書等の調査も併せて実施した。

・調査用部分解体

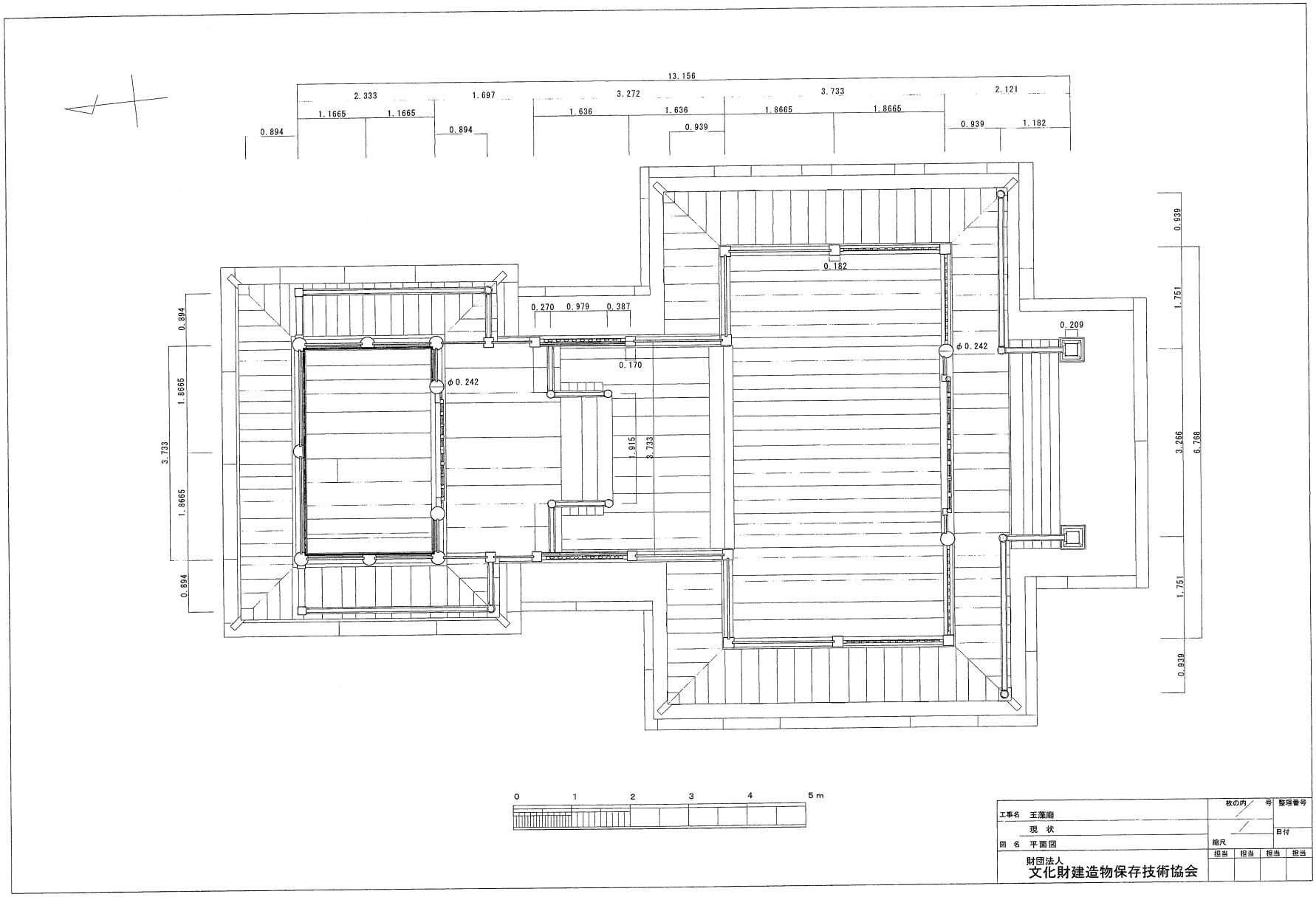
調査に必要な箇所の部分解体を行った。解体箇所については，床板・天井板及び屋根の一部について調査用解体を行った。

④　図面調整

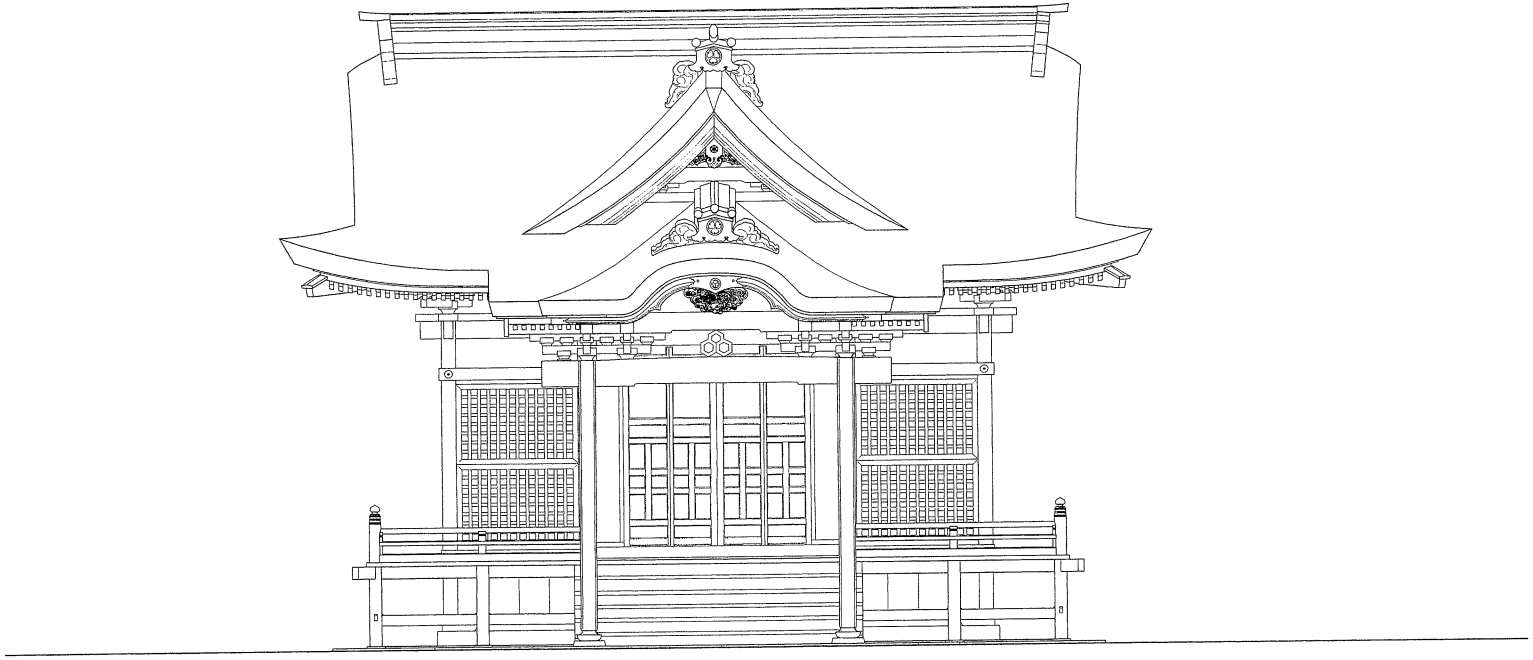
図面はJw-winＣＡＤで製図し，Ａ２判サイズで墨入れ仕上とした。製図した図面は，天守台配置図・平面図・断面図（桁行，梁間断面図）・立面図とした。

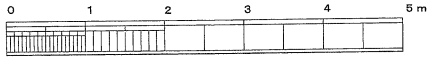

0 1 2 3 4 5m
工事名 玉藻廟
現 状
図 名 天守台 配置図
枚の内 号
整理番号
日付
縮尺
担当 担当 担当 担当
財団法人
文化財建造物保存技術協会

第６図　天守台配置図


13.156
2.333
1.697
3.272
3.733
2.121
1.1665
1.1665
1.636
1.636
1.8665
1.8665
0.894
0.894
0.939
0.939
1.182
0.894
1.8665
3.733
1.8665
0.894
0.939
1.751
3.266
6.768
1.751
0.939
0.182
0.270
0.979
0.387
0.209
φ0.242
φ0.242
0.170
1.915
3.733
0
1
2
3
4
5m
工事名 玉藻廟
現 状
図 名 平面図
枚の内 号
整理番号
縮尺
日付
担当
担当
担当
担当
財団法人
文化財建造物保存技術協会

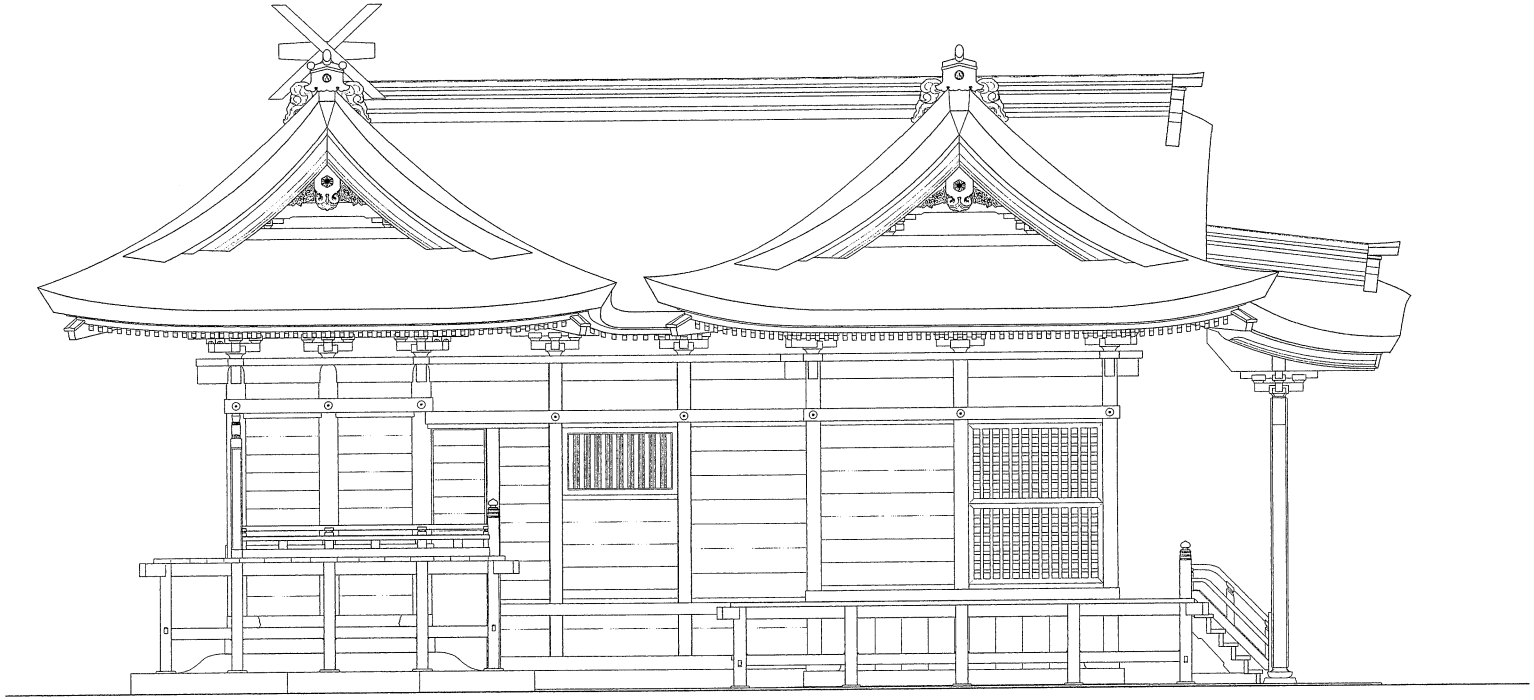
第７図　玉藻廟平面図

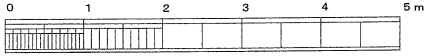




工事名　玉藻廟	枚の内／　号	整理番号		
現　状	／	日付		
図　名　南立面図	縮尺			
財団法人 文化財建造物保存技術協会	担当	担当	担当	担当

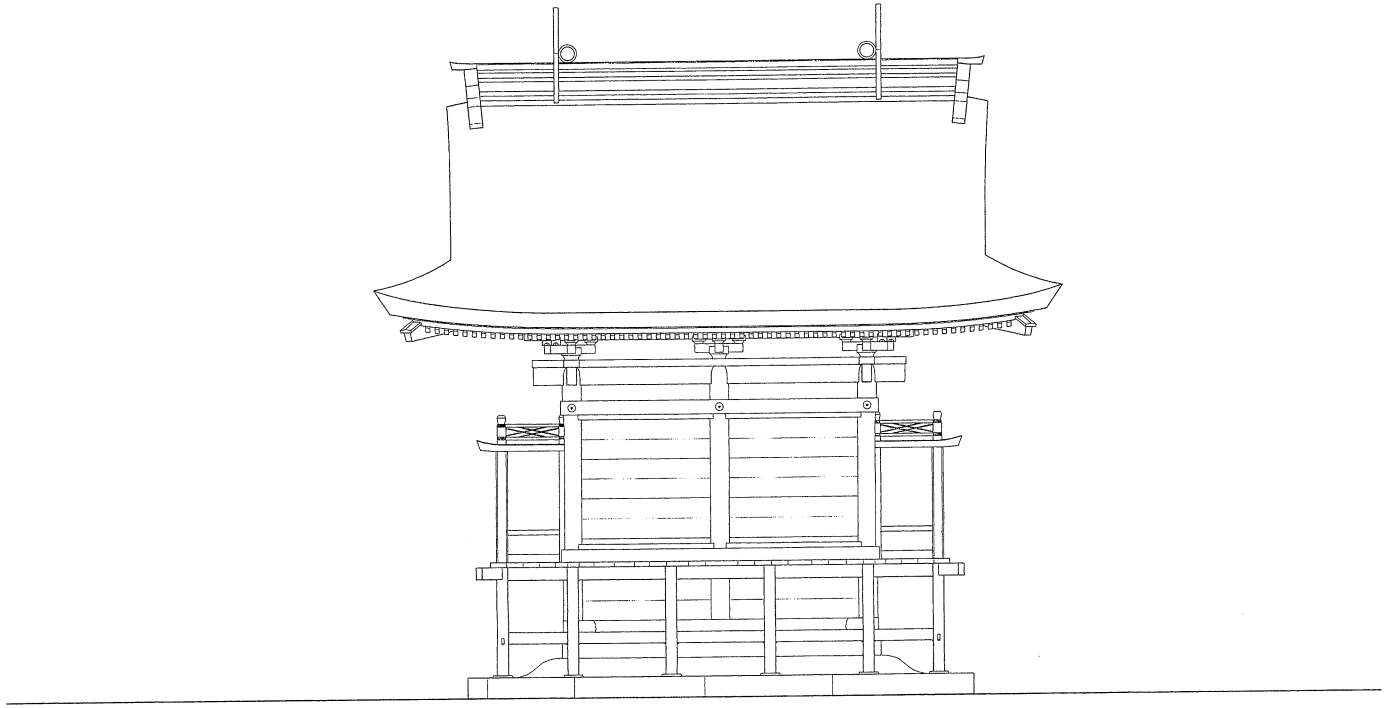
第８図　玉藻廟南立面図

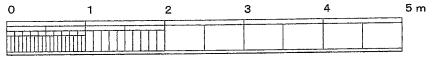




工事名　玉藻廟	枚の内　号	整理番号		
現　状		日付		
図　名　西立面図	縮尺			
財団法人 文化財建造物保存技術協会	担当	担当	担当	担当

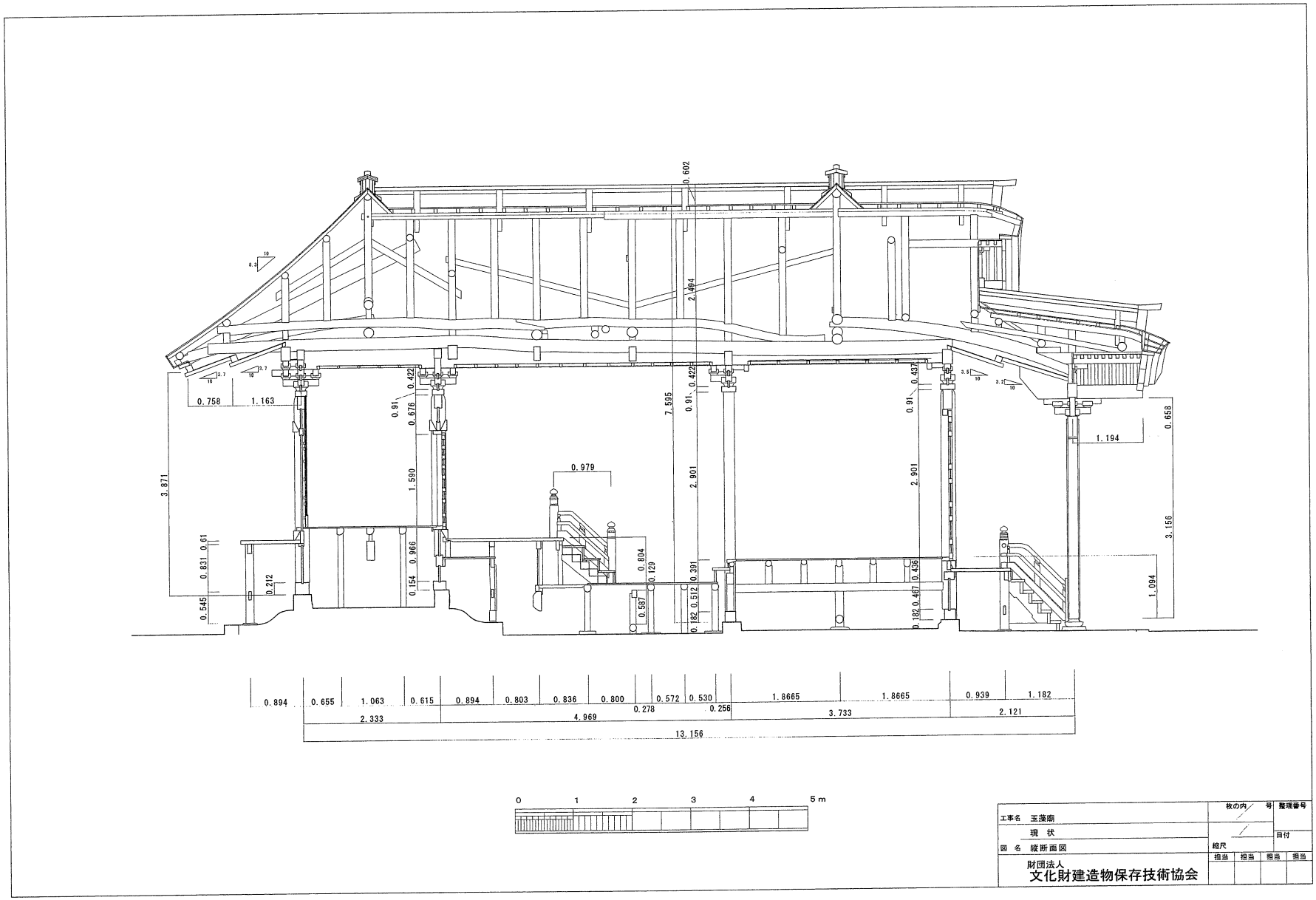
第９図　玉藻廟西立面図



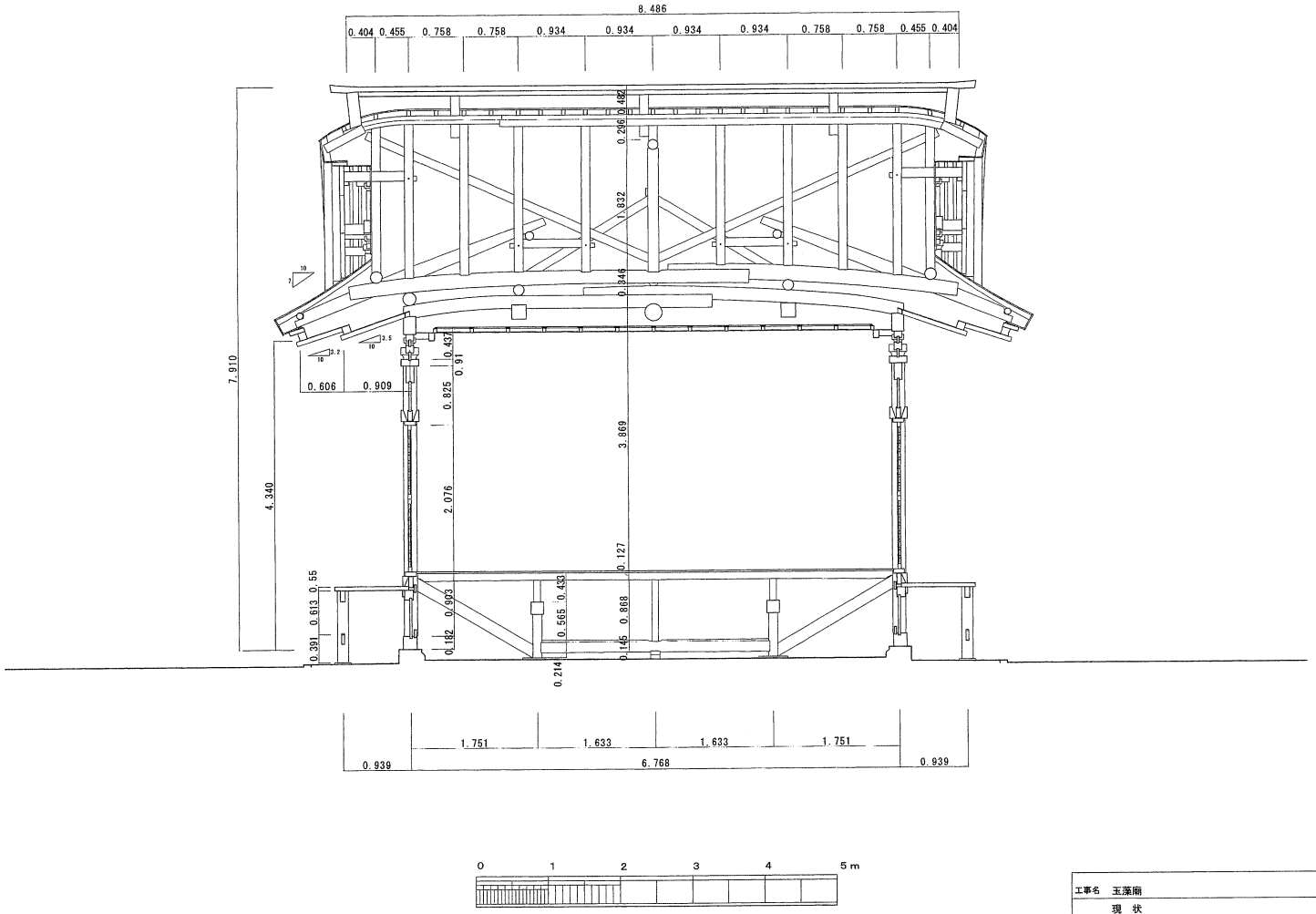


工事名 玉藻廟	枚の内／ 号	整理番号			
現 状	／	日付			
図 名 北立面図	縮尺				
財団法人 文化財建造物保存技術協会	担当	担当	担当	担当	

第10図　玉藻廟北立面図

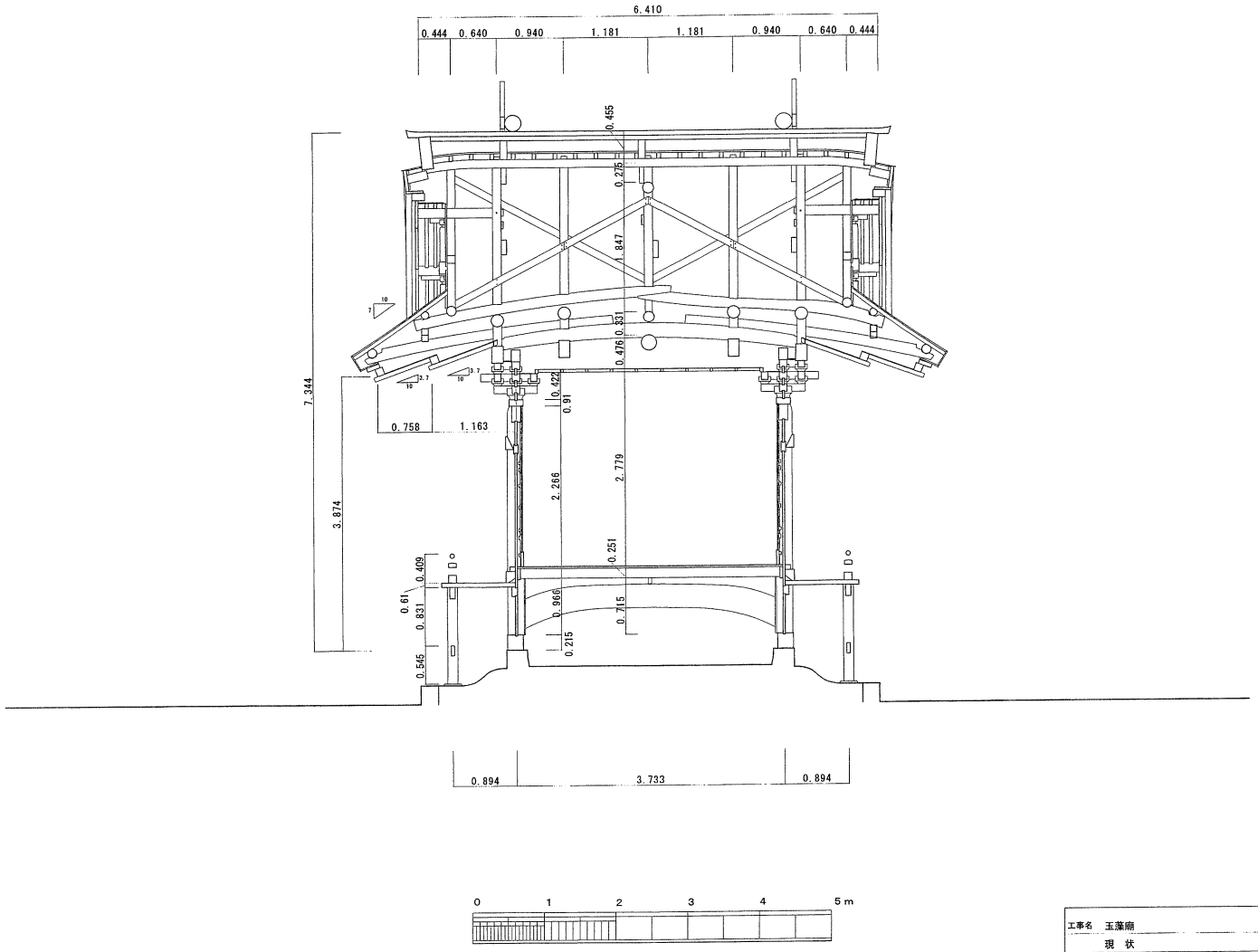


第11図　玉藻廟縦断面図



工事名 玉藻廟	枚の内 / 号	整理番号	
現 状	/	日付	
図 名 横断面図（拝殿）	縮尺		
財団法人 文化財建造物保存技術協会	担当	担当	担当	担当

第12図　玉藻廟横断面図（拝殿）



工事名 玉藻廟	枚の内 / 号		整理番号	
現 状	/		日付	
図 名 横断面図（本殿）	縮尺			
財団法人 文化財建造物保存技術協会	担当	担当	担当	担当

第13図　玉藻廟横断面図（本殿）

写真30　全景（南東より）

写真31　全景（北東より）

写真32　正側面拝殿・向拝を見る（南東より）

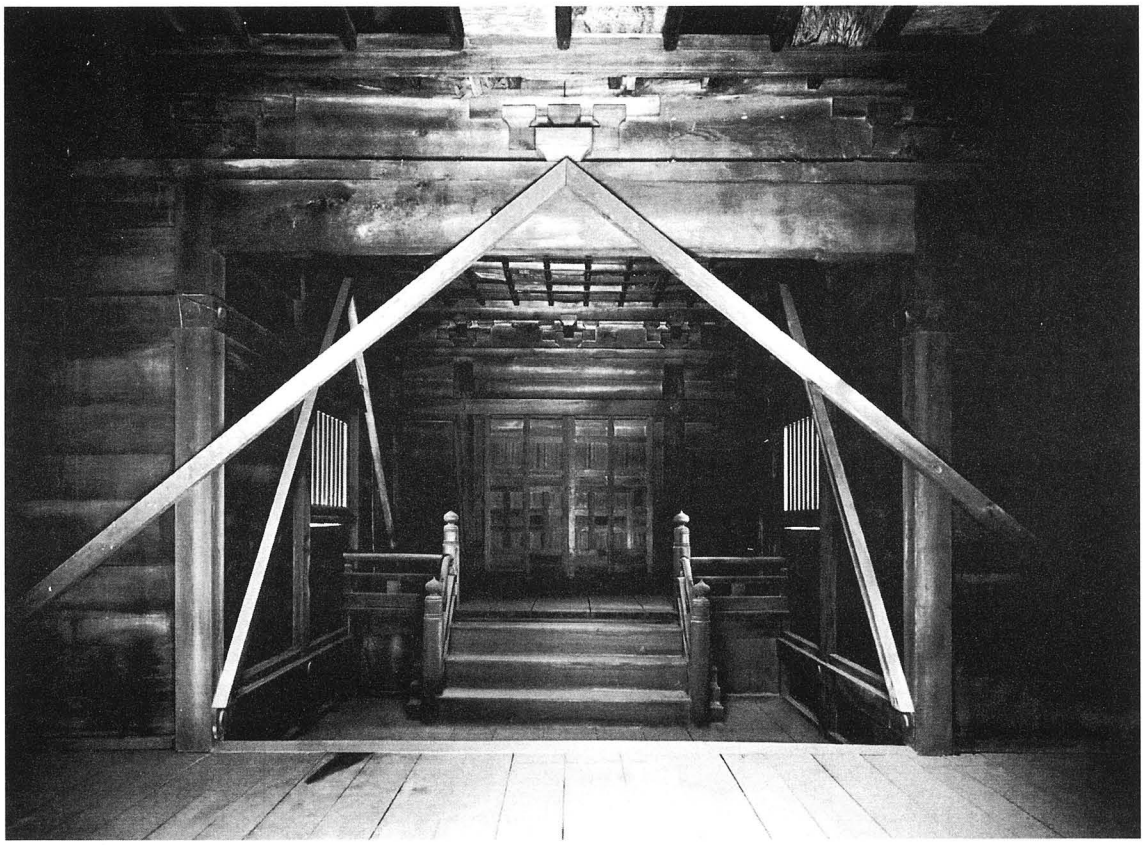


写真33　内部拝殿より幣殿・本殿を見る（南より）

写真34　正側面拝殿・向拝を見る（南東より）

写真35　正側面拝殿・向拝を見る（南西より）

写真36　東側面（北東より）

写真37　本殿東側面（東より）

写真38　西側面（北西より）

写真39　本殿西側面（西より）

写真40　拝殿西側面（西より）

写真41　本殿・幣殿西側面（西より）

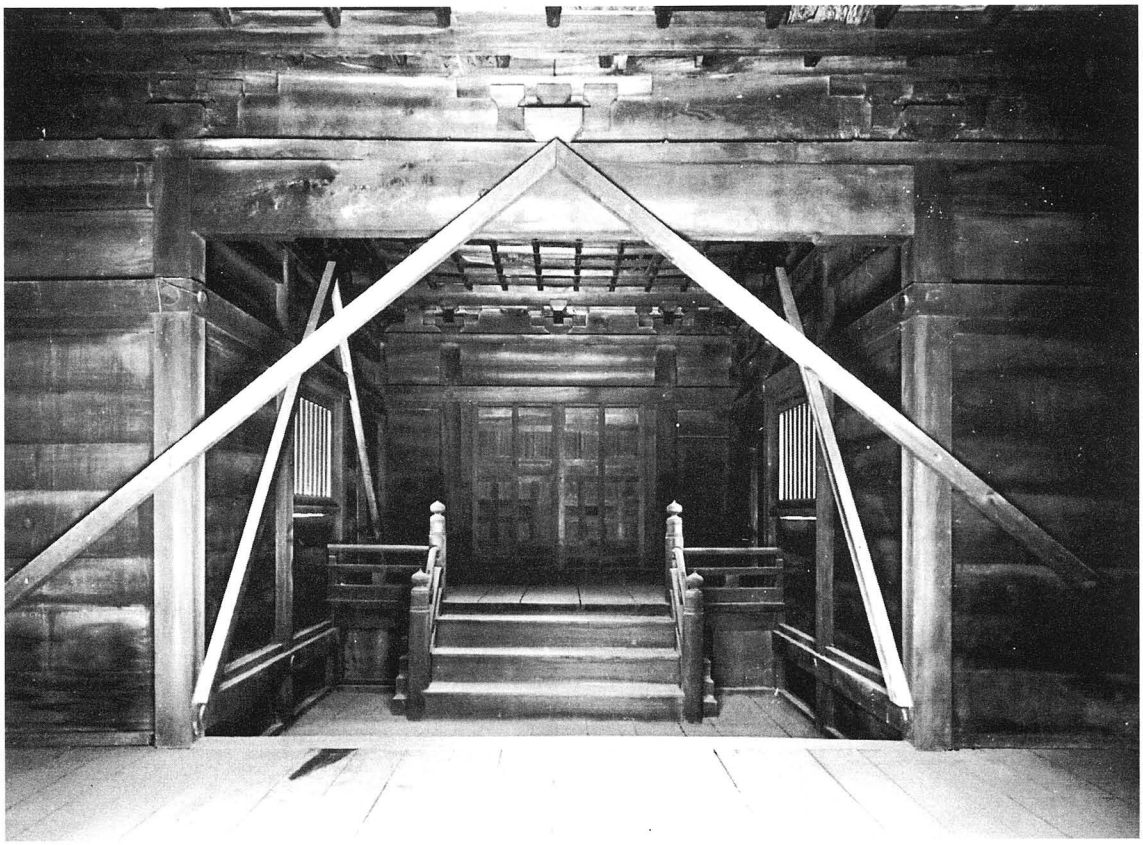


写真42　内部本殿より幣殿・拝殿を見る（南より）

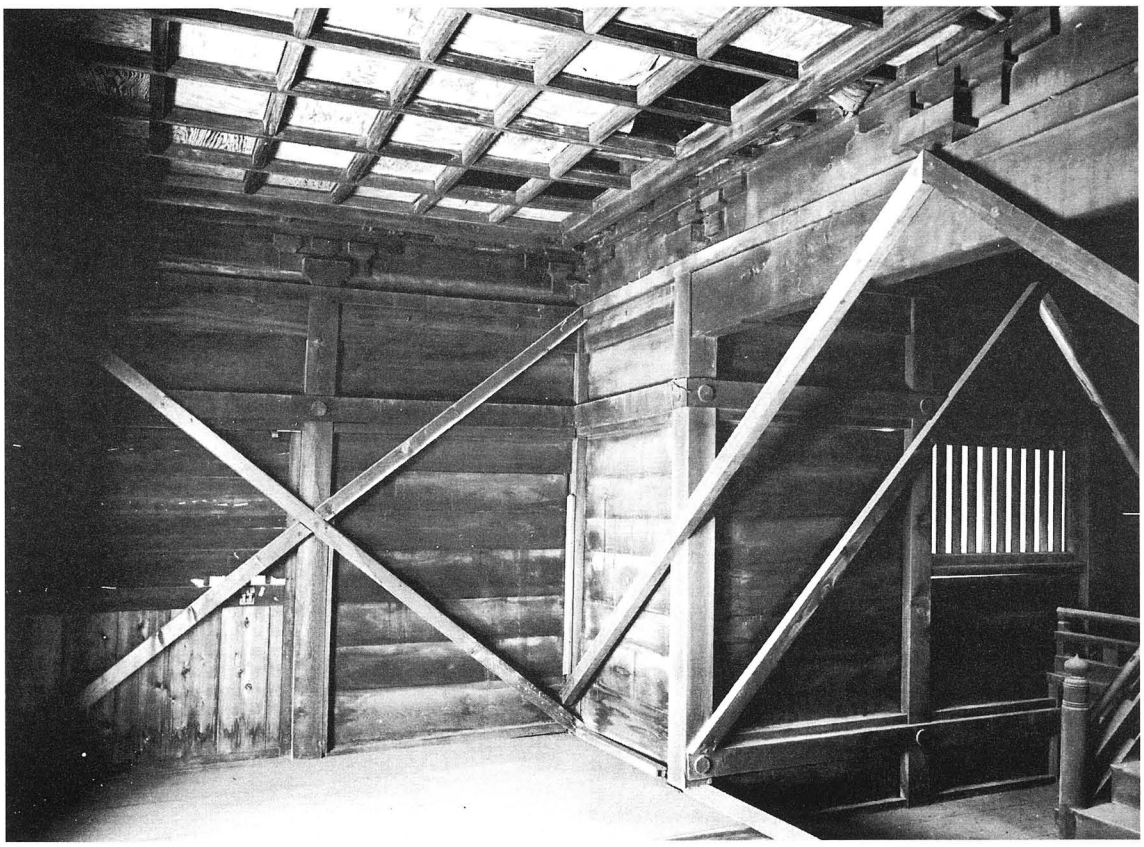


写真43　内部拝殿・幣殿（南東より）

写真44　全景東側面（南東より）
　玉藻廟が建てられる以前は，天守台に高松城天守が建てられていたが，明治17年に老朽化に伴い解体された。

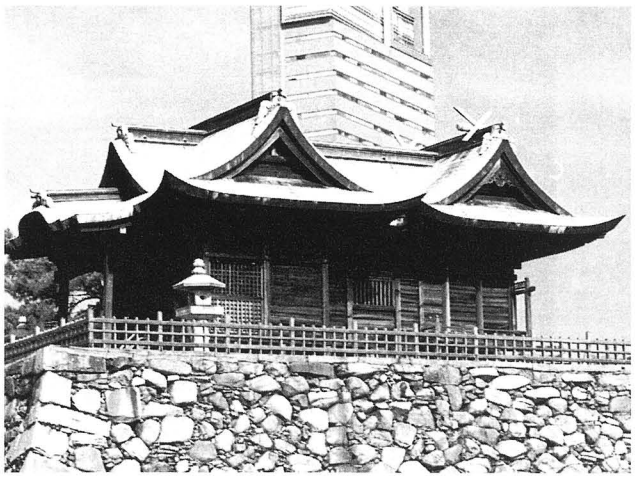


写真45　全景東側面（南東より）

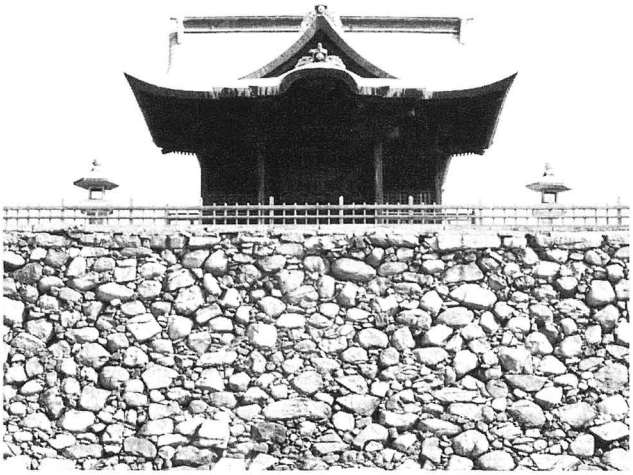


写真46　全景正面（南より）
　建物の左右に石灯籠が各2基建てられていたが，解体前は各1基のみであった。

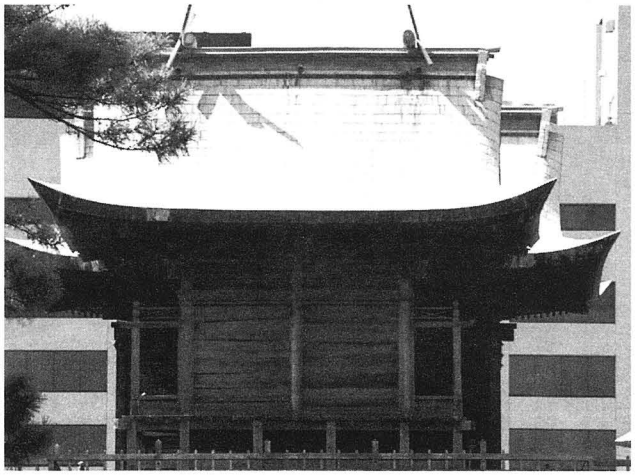


写真47　全景背面（北より）

写真48　全景背側面（北東より）

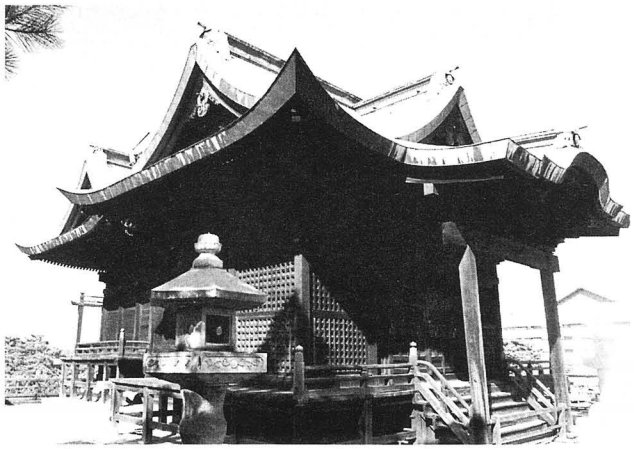


写真49　外観正側面（南西より）

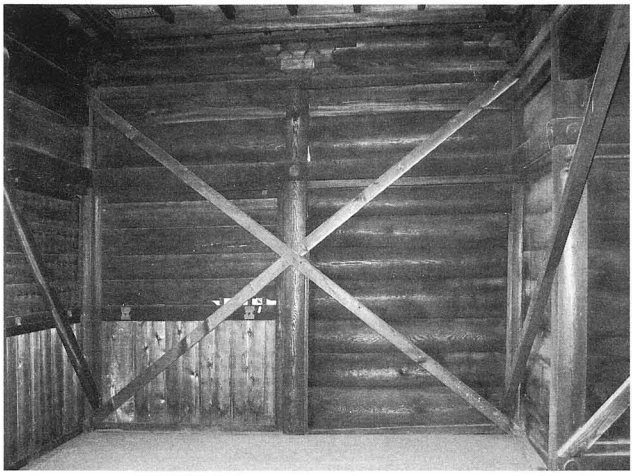


写真50　内部拝殿西側面（東より）
　拝殿南側に向拝を設け，北側が幣殿と接続する。東西面は板壁で，正面寄りには蔀戸が設けられていた。

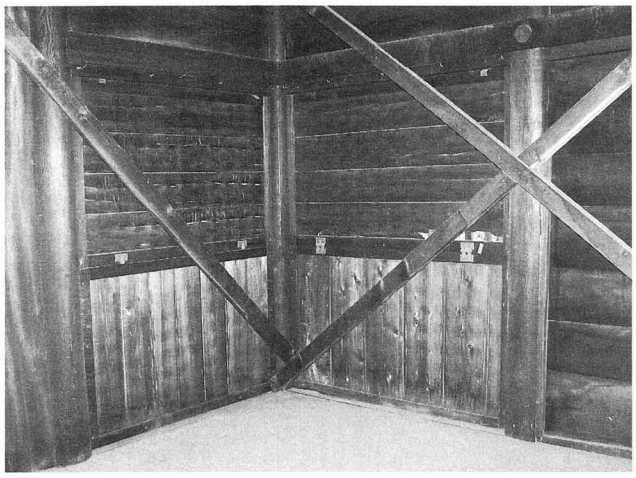


写真51　内部拝殿正側面（北東より）
　各壁面には，補強材として筋違が設けられていた。

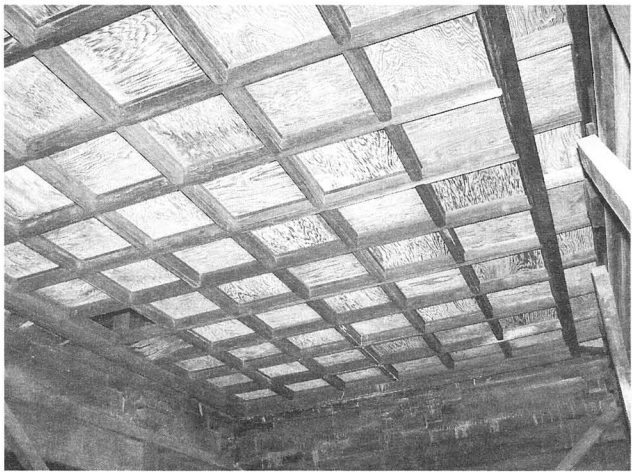


写真52　格天井（南西より）

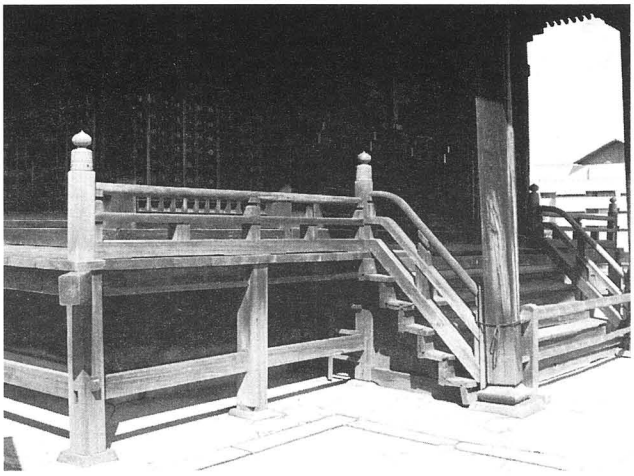


写真53　縁廻り拝殿正面側（南西より）
　拝殿には縁が四周（幣殿との接続箇所は除く）にあったが，高欄ならびに登り高欄は後補である。

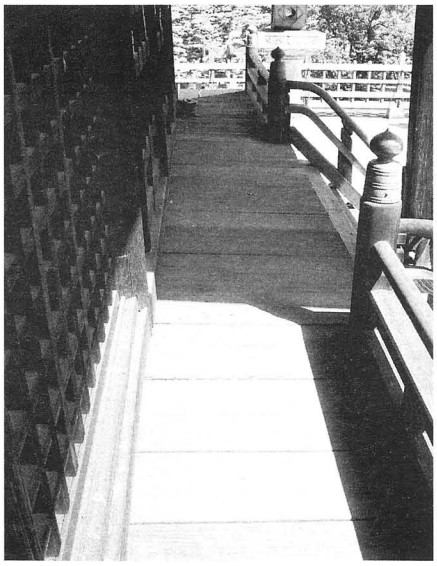


写真54　縁廻り正面（西より）

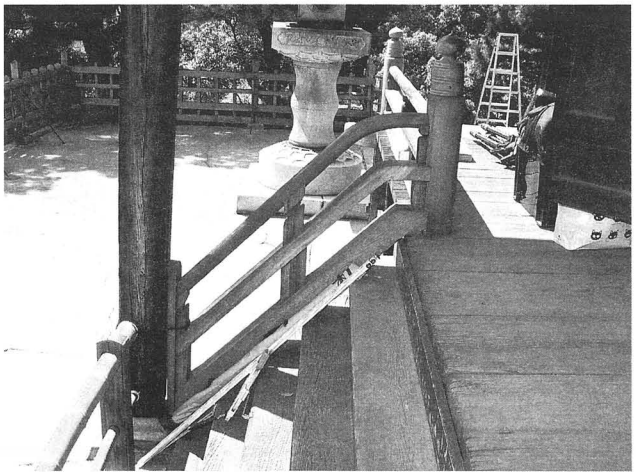


写真55　登り高欄詳細（東より）

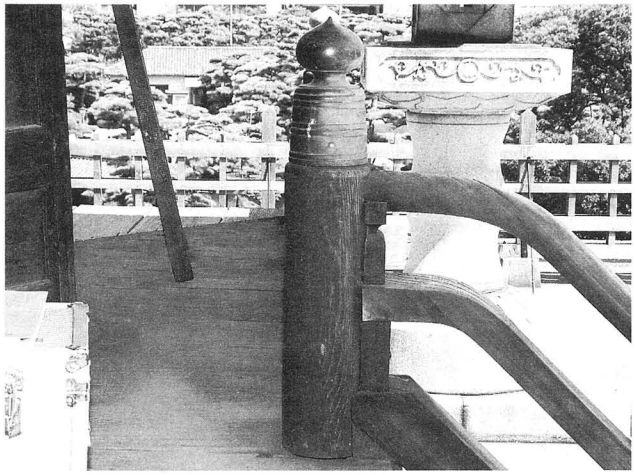


写真56　高欄親柱詳細（西より）

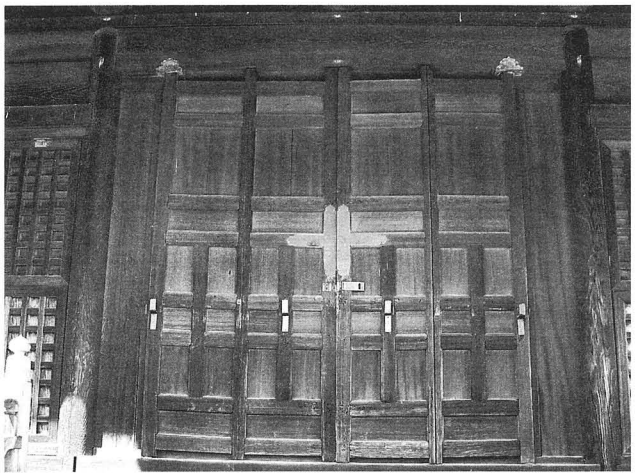


写真57　正面唐戸（南より）

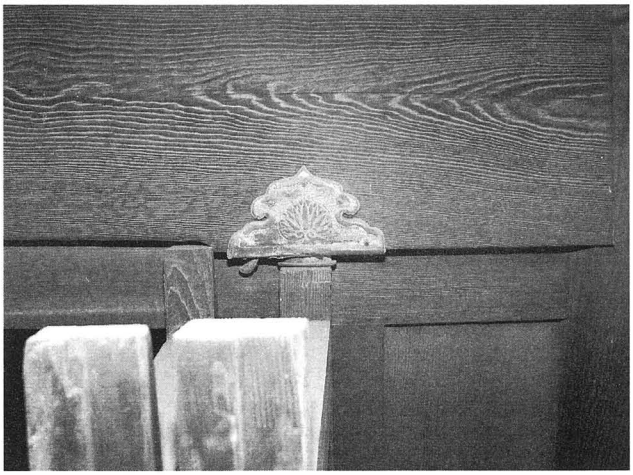


写真58　唐戸幣軸上金具詳細

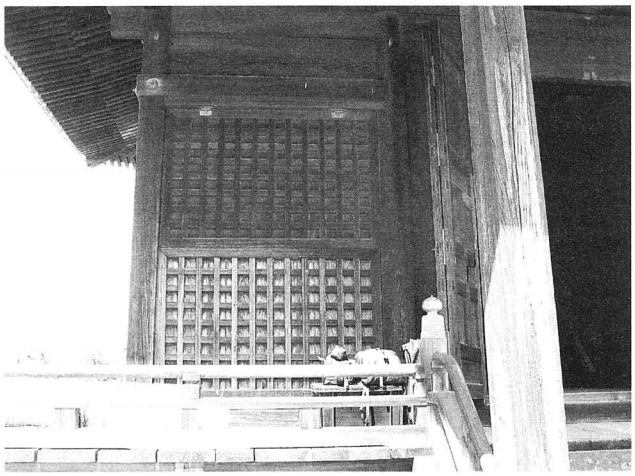


写真59　蔀戸正面西側（南より）
　蔀戸は拝殿の正面脇間ならびに東西面・正面寄りの４箇所に設けられていた。

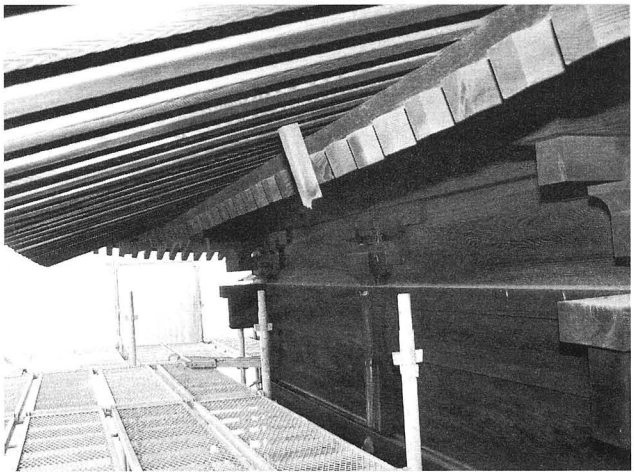


写真60　軒廻り東側（北東より）
　軒は二軒繁垂木。

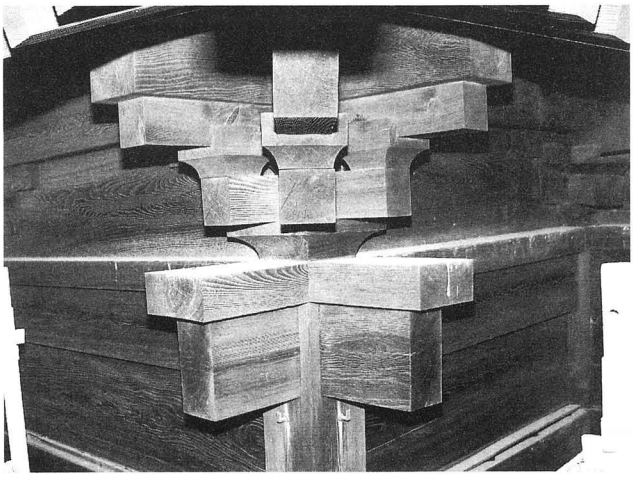


写真61　組物詳細
　木鼻などには彫刻や装飾がなく，簡素な造りである。拝殿の組物は平三斗組で，実肘木にて丸桁を受ける。

写真62　拝殿銅板屋根東側（本殿(北)より）

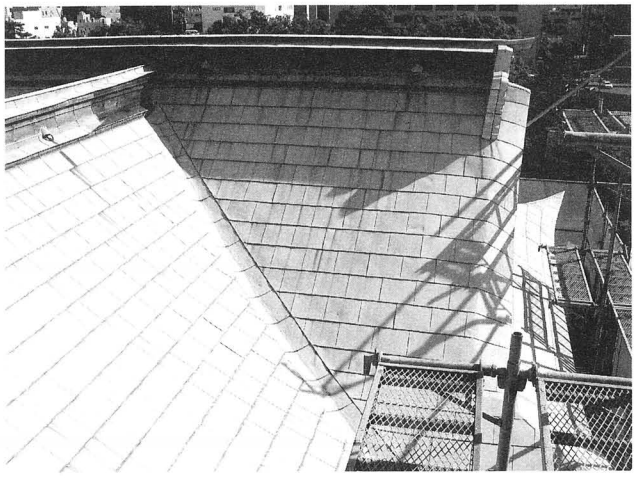


写真63　拝殿銅板屋根西側（本殿(北)より）

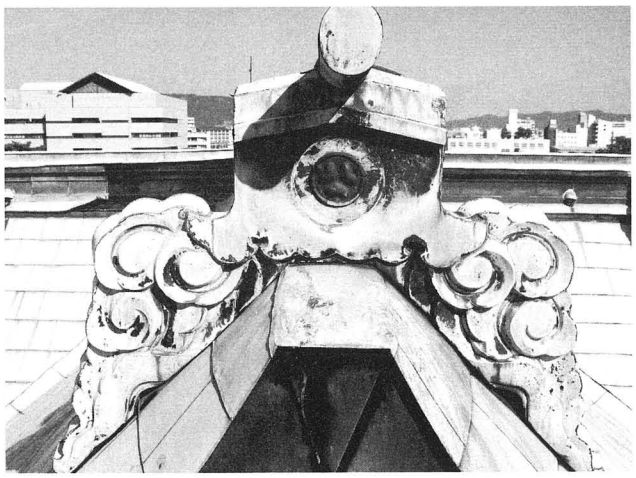


写真64　拝殿鬼瓦（西側）

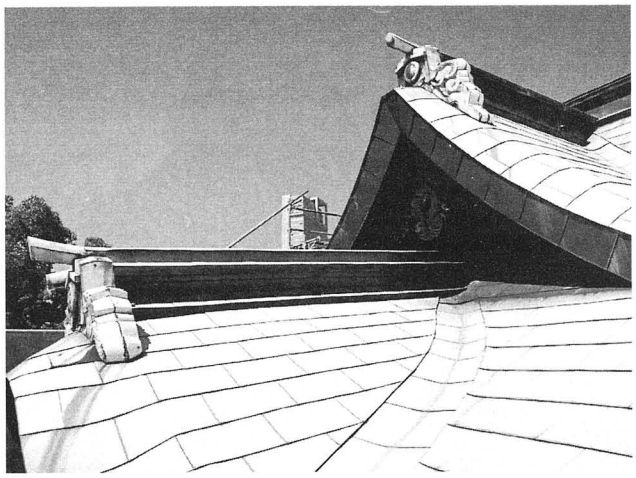


写真65　千鳥破風ならびに向唐破風（南東より）

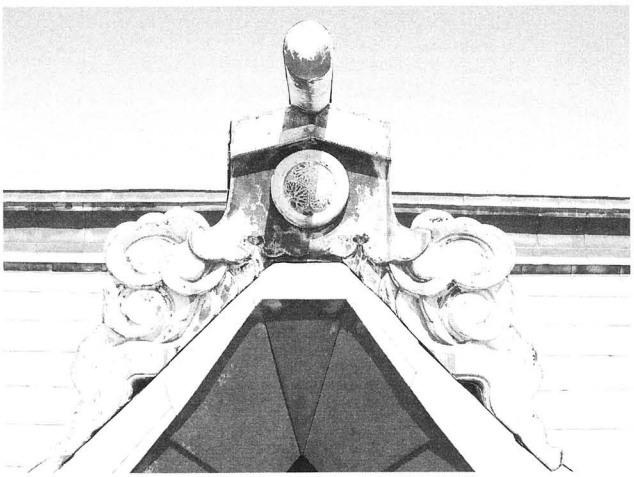


写真66　千鳥破風鬼瓦（南より）

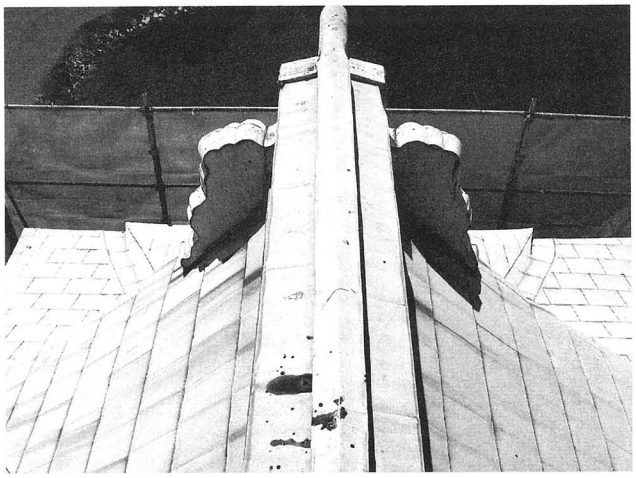


写真67　千鳥破風棟詳細（北より）

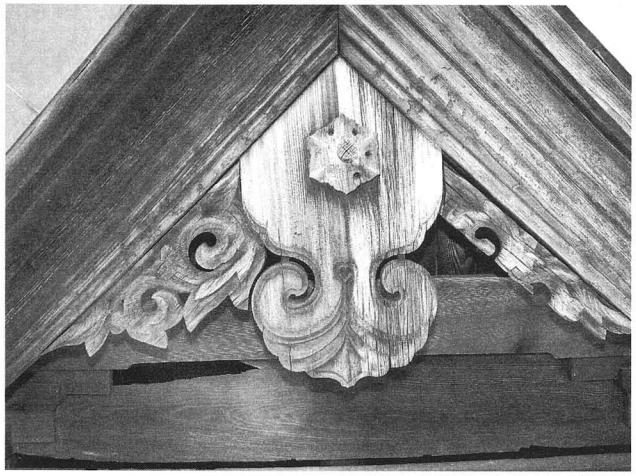


写真68　千鳥破風妻飾り詳細（南より）
妻部には，蕪懸魚が取り付く。

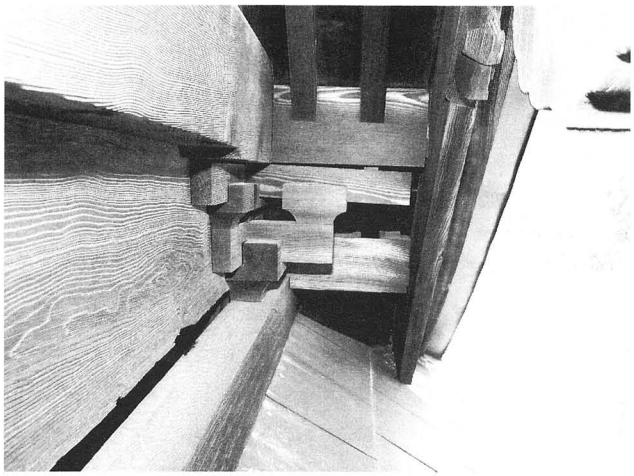


写真69　千鳥破風妻部組物詳細（東側）

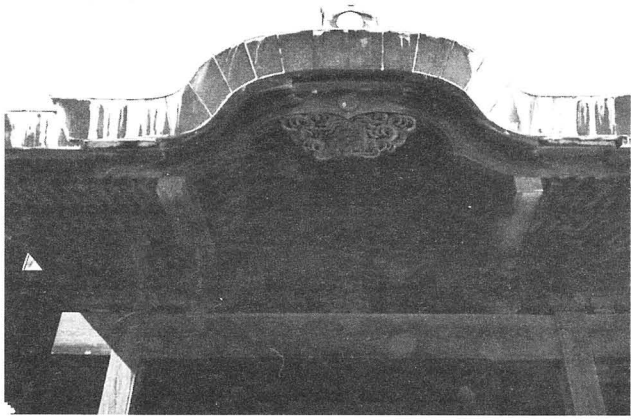


写真70　向唐破風（南より）
拝殿前に向拝を，屋根には向唐破風を設けていた。

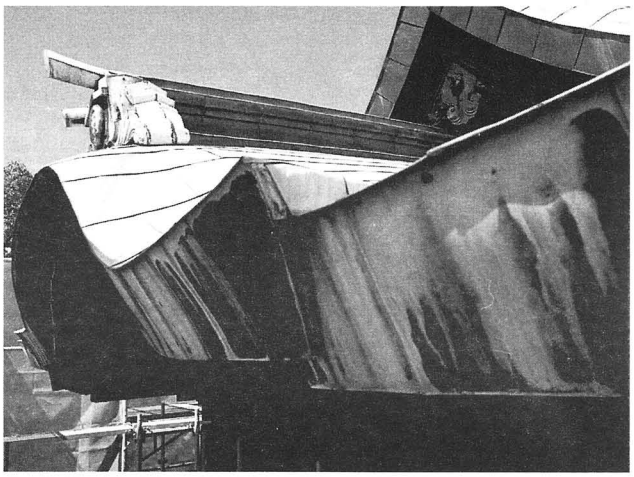


写真71　向唐破風軒付詳細（南東より）
軒付は銅板包み。

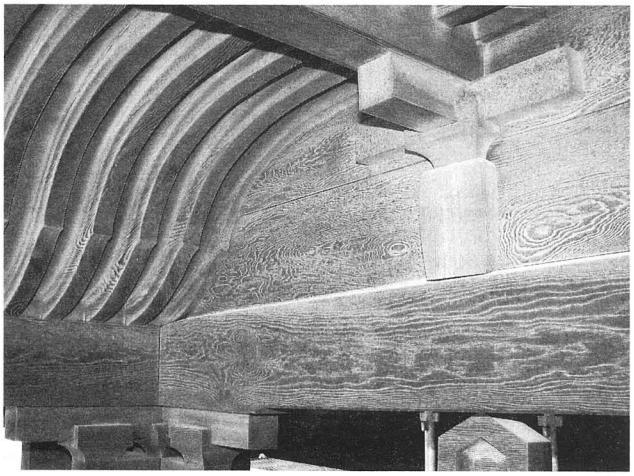


写真72　向拝軒廻り詳細（南東より）
虹梁上に大瓶束・大斗を置き，実肘木にて棟木を受ける。

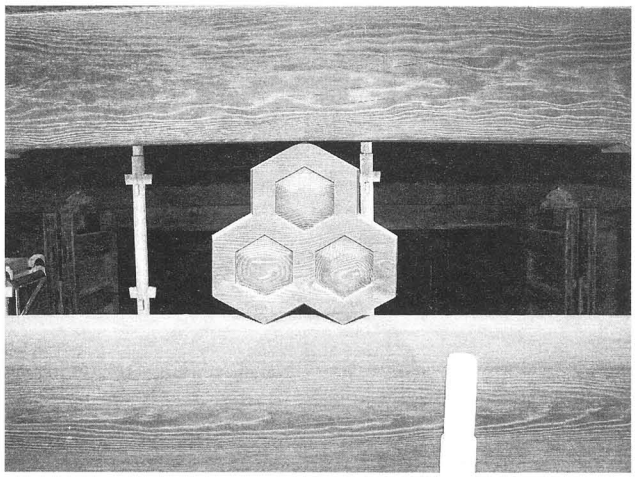


写真 73　向拝蟇股（虹梁間）
向拝虹梁間には，三持ち合い一重亀甲文様を置くが，この文様は三つ葉葵文様を簡略化したものとも考えられる。

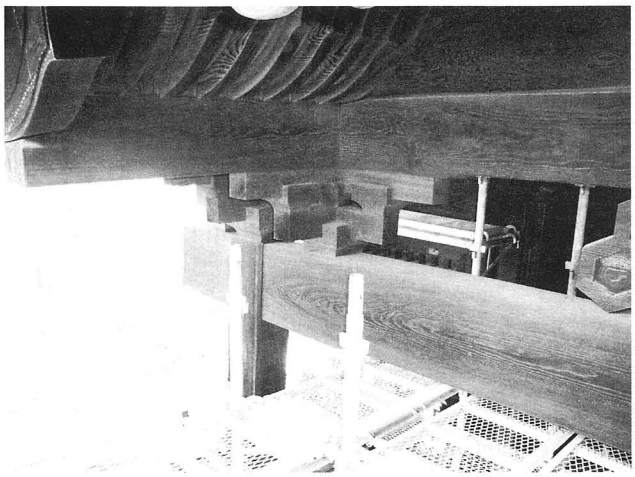


写真74　向拝組物西側（南東より）
　向拝組物は，柱上に大斗を置いて外側に連三斗，内側に出三斗を設けた，二組の組物を繋いだ構えとなる。

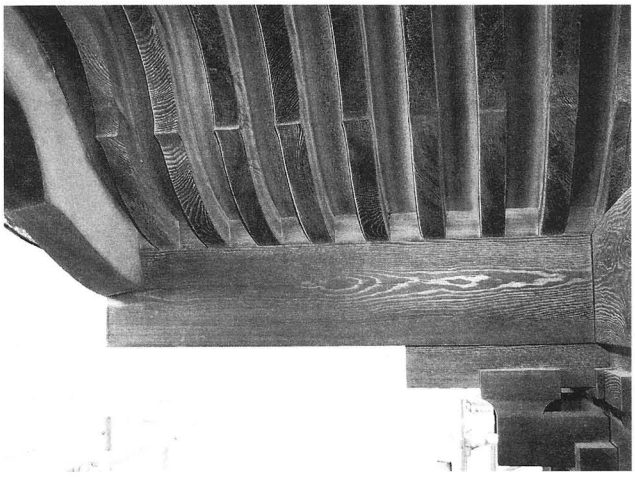


写真75　向拝菖蒲桁茨垂木との取合詳細（東より）

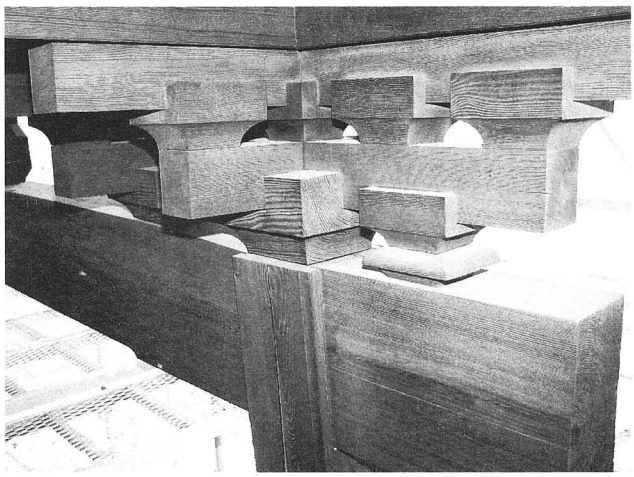


写真76　向拝組物西側詳細（北西より）

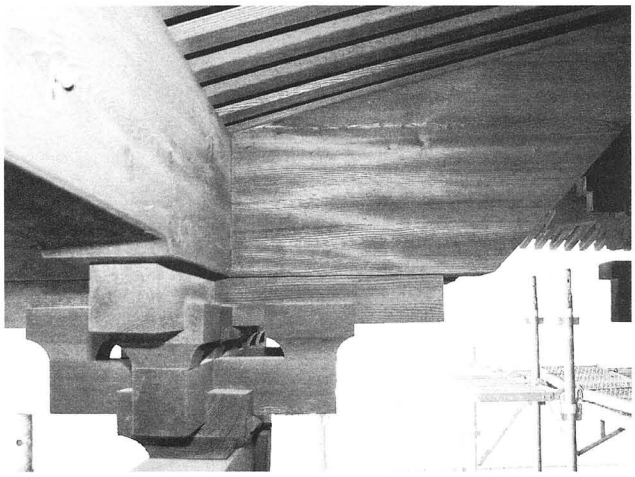


写真77　向拝手狭西側（東より）

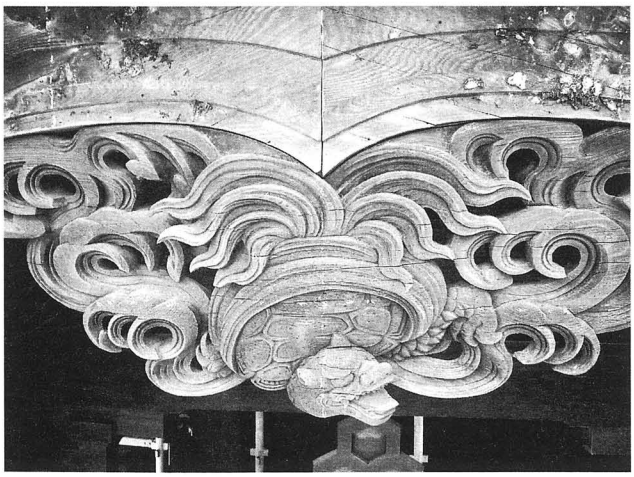


写真78　向拝懸魚（南より）

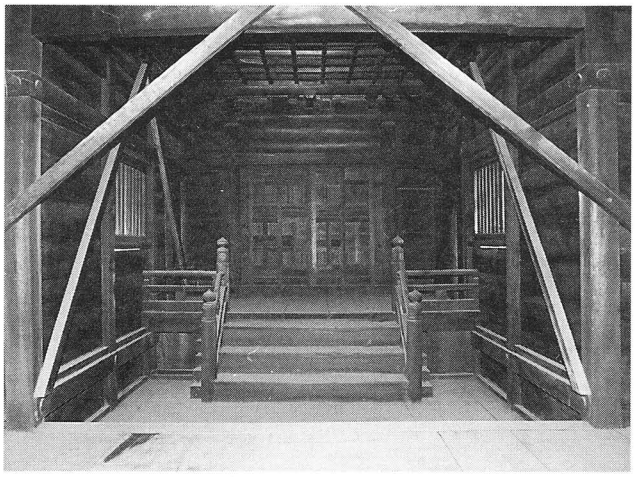


写真79　内部幣殿（拝殿(南)より）

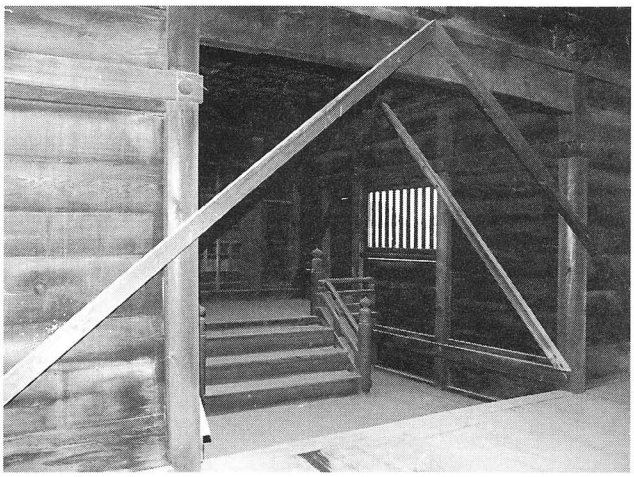


写真80　内部幣殿東側（拝殿(南西)より）

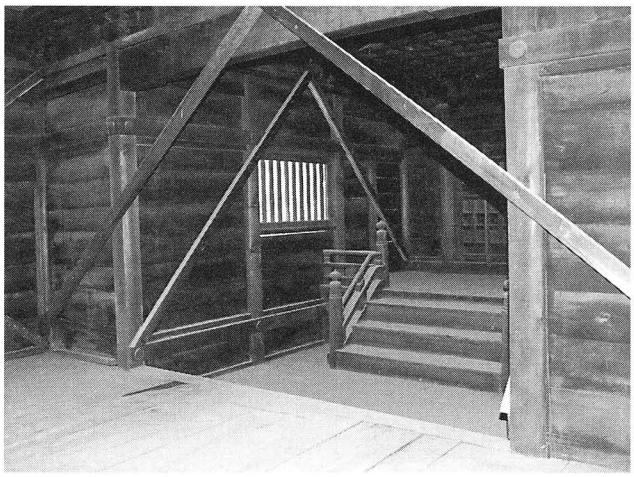


写真81　内部幣殿西側（拝殿(南東)より）

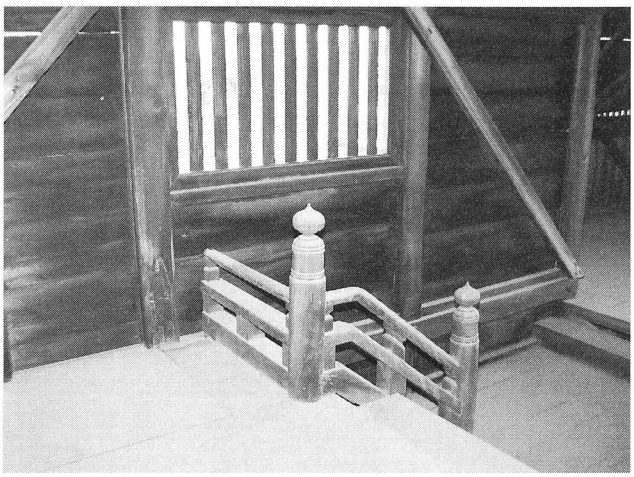


写真82　内部幣殿東側（前室(北西)より）

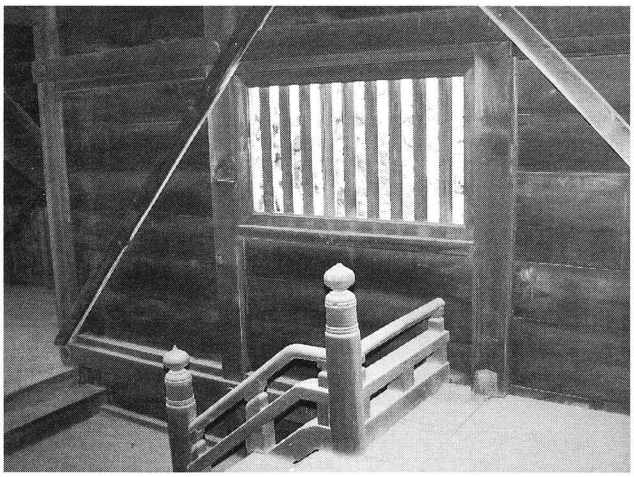


写真83　内部幣殿西側（前室(北東)より）

写真84　格天井（南より）

写真85　連子窓（西側）
　連子窓の内側には，かつて障子またはガラス戸が取り付けられていた可能性が高い。

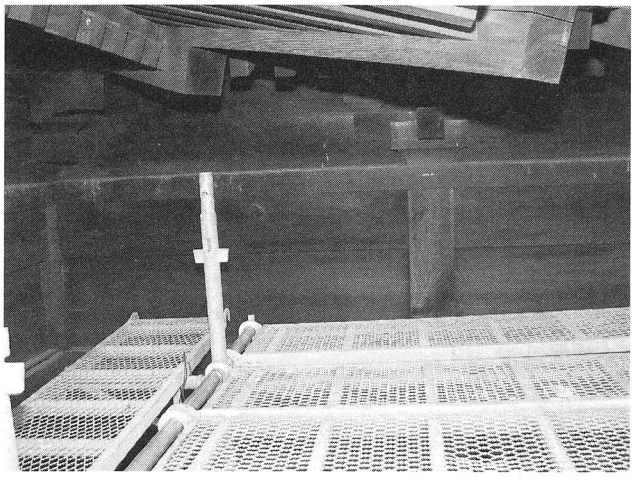


写真86　軒廻り詳細（東側）
　幣殿の組物は、拝殿と同様，柱頂部に平三斗組を置き，実肘木にて丸桁を受けていた。

写真87　軒廻り見上げ（東側）

写真88　幣殿屋根銅板（本殿(北東)より）

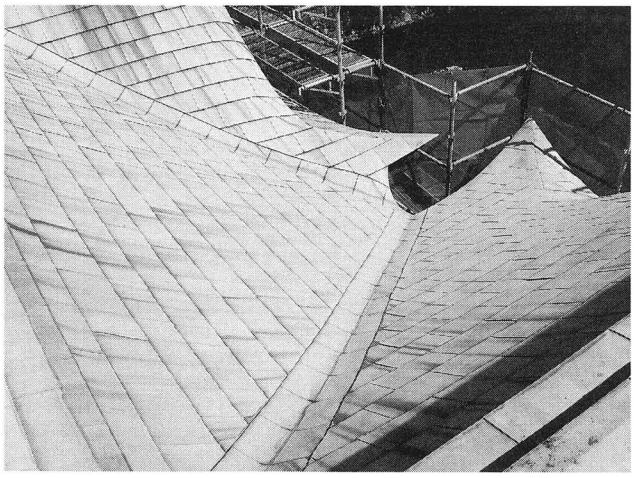


写真89　軒付取合い部詳細（南西より）

写真90　内部前室・本殿（幣殿(南)より）
本殿正面側には前室が設けられている。痕跡ならびに史料調査により，創建当時は現在位置より約20cm北にあったことが判明した。

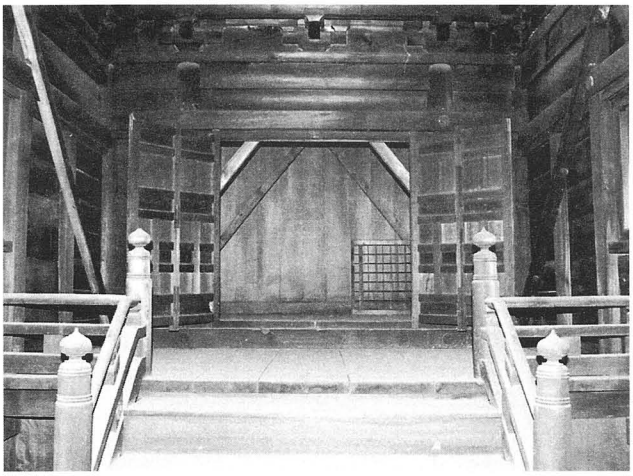


写真91　内部前室・本殿（幣殿(南)より）
本殿正面唐戸を開放した状態。

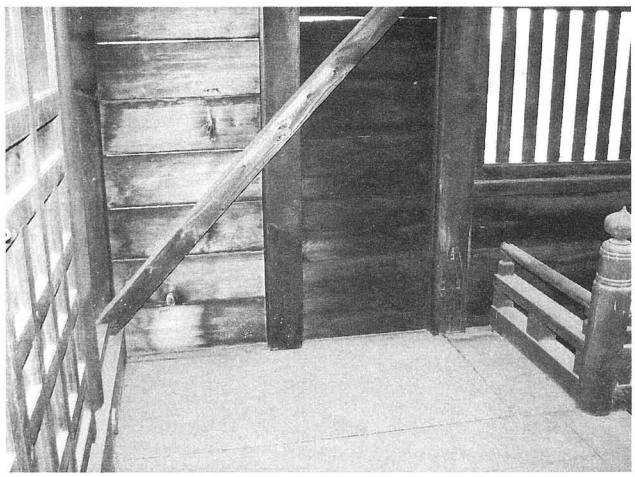


写真92　内部前室東側（西より）
前室本殿寄りには，かつて本殿外濡縁への出入口があり，鏡戸が取り付けられていた。

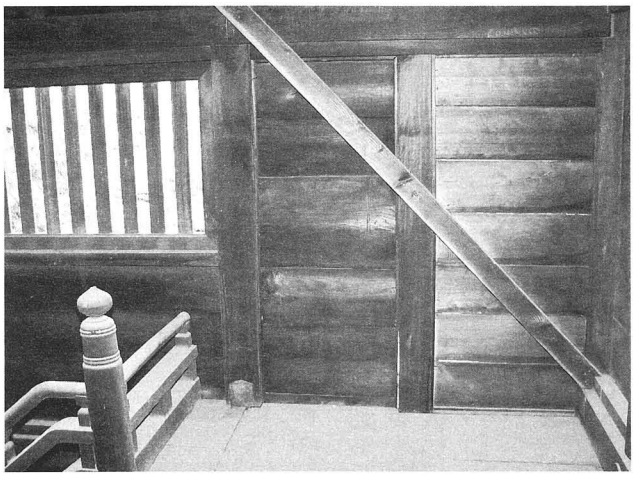


写真93　内部前室西側（東より）

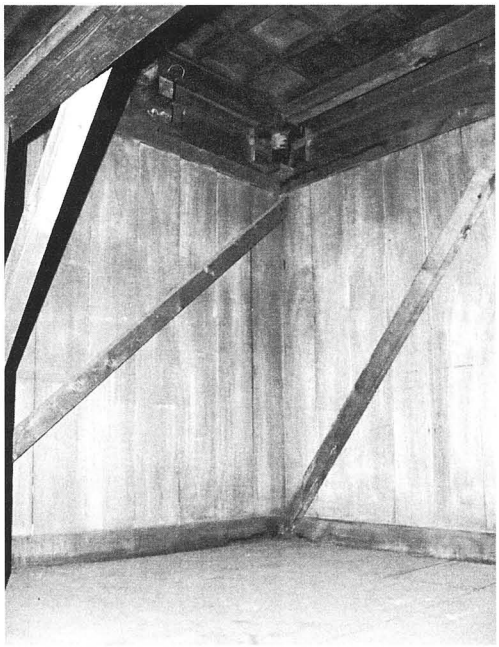


写真94　内部本殿背側面（南東より）

写真95　内部本殿背側面（南西より）

写真96　前室登り高欄ならびに木階（南西より）
　創建当時の木階は5級であったが，解体前には，その上に3級の木階が新設されていた。

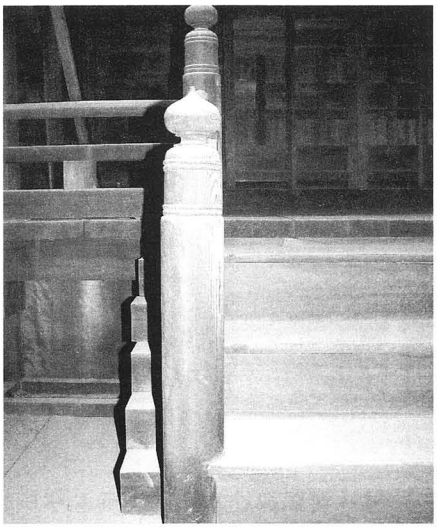


写真97　登り高欄親柱（西側）詳細

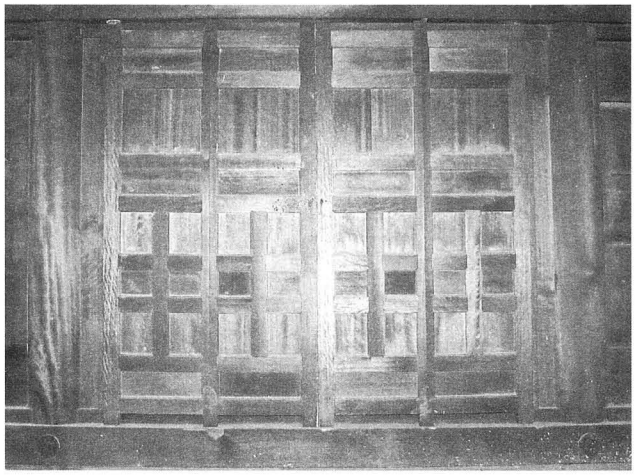


写真98　正面唐戸（南より）

写真99　濡縁ならびに高欄（東より）
　本殿外側には，創建当時は濡縁ならびに高欄が四周（正面は除く）廻っていたが，現在高欄は東西面のみであった。

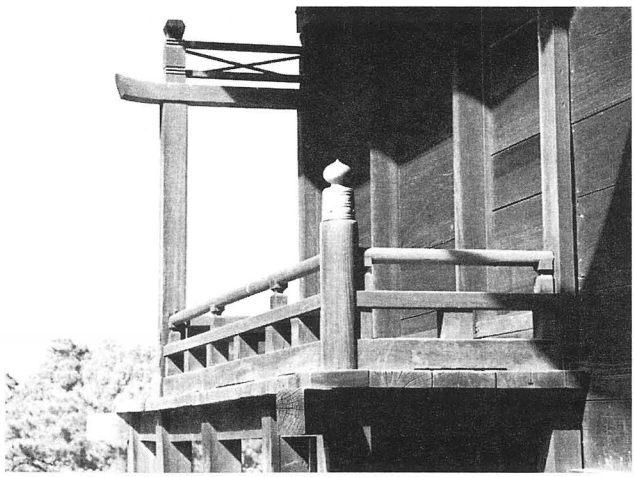


写真100　脇障子（西側）詳細（南西より）
　創建当時，脇障子には松皮菱組子板が入っていた。

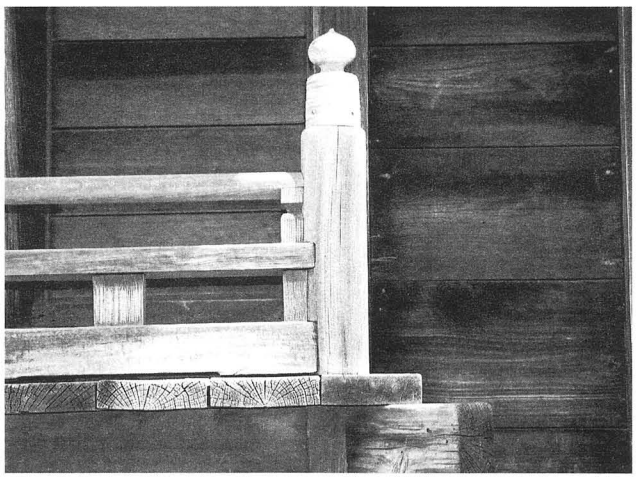


写真101　高欄親柱（西側）詳細（西より）

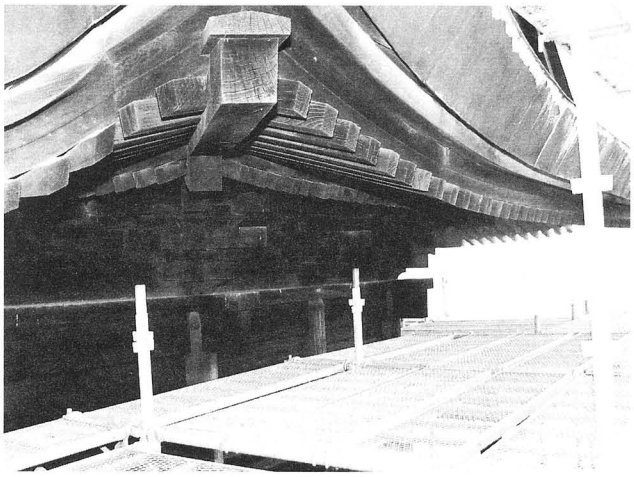


写真102　軒廻り（東側）詳細（南東より）

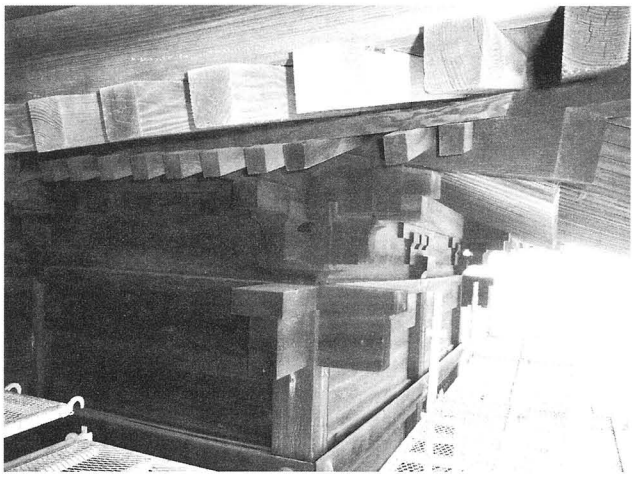


写真103　組物（背面）詳細（北東より）
両側面と背面の柱頂部に二手先組を置く。

写真104　幣殿・本殿の屋根銅版（拝殿(南)より）

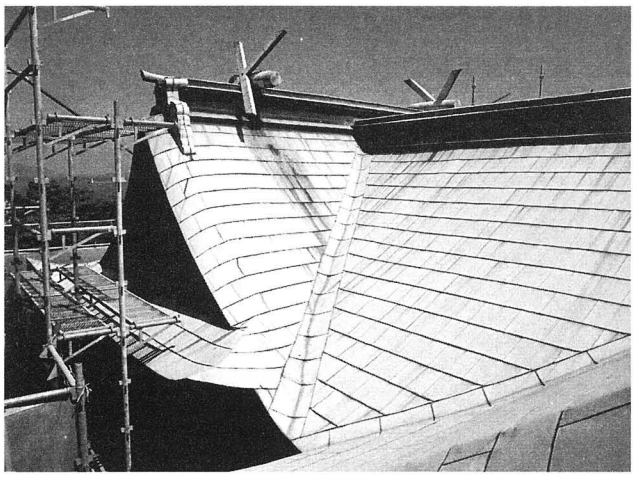


写真105　本殿の屋根銅版（拝殿(南西)より）

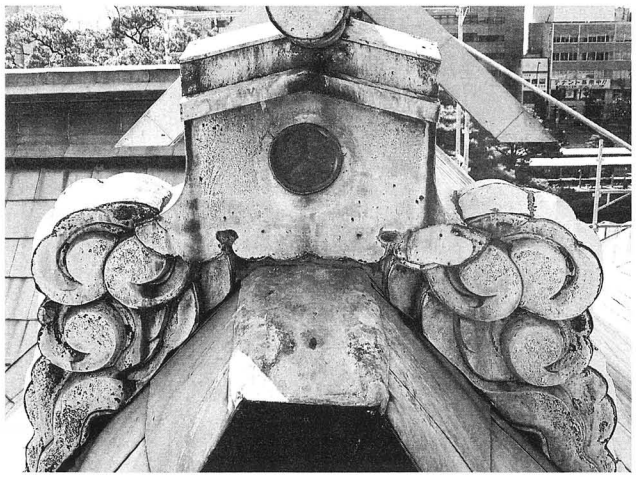


写真106　鬼板（東側）

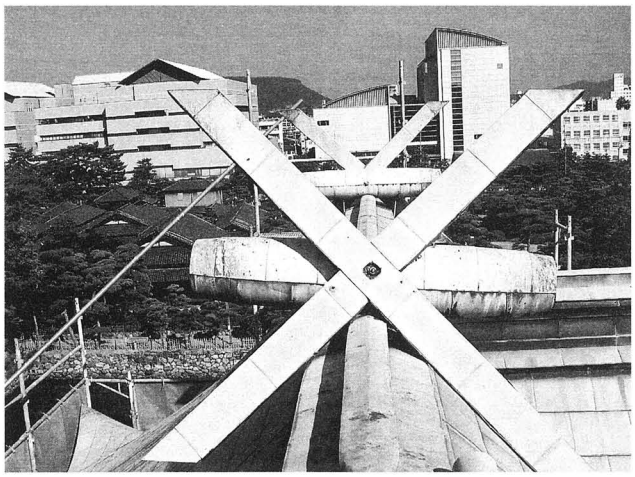


写真107　千木・勝男木（西側）
本殿大棟には千木・勝男木がのり，千木は上部を水平としていた。

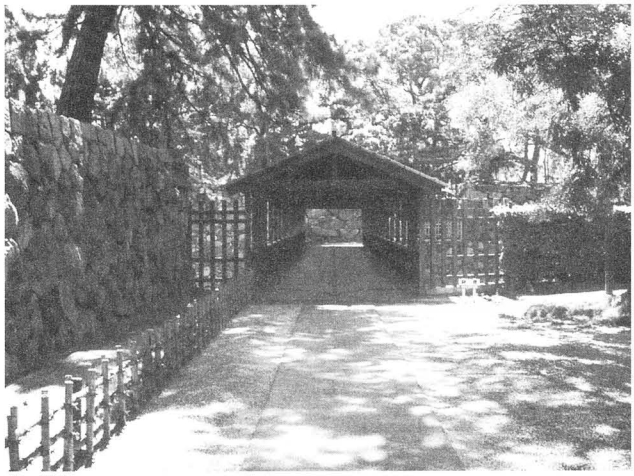


写真108　鞘橋（北より）
　天守台にある玉藻廟へは，鞘橋を渡って行く。この鞘橋も，玉藻廟と同じ頃に建設されたと言われている。

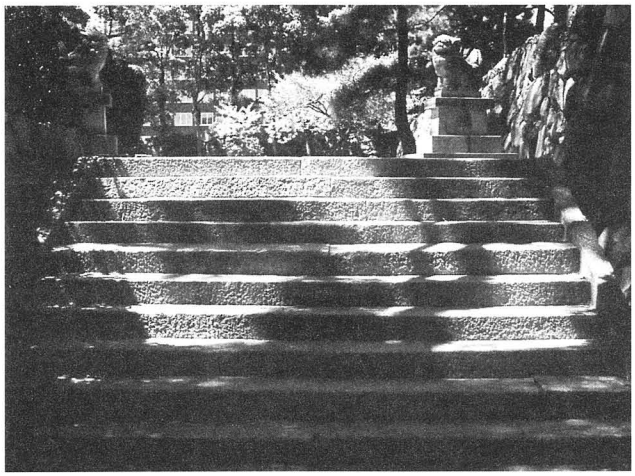


写真109　石段ならびに狛犬（東より）
　鞘橋を渡ると石段が設けられている。石段上には狛犬がある（昭和16年の銘あり）。

写真110　手水鉢（南西より）
　手水鉢は史料により，玉藻廟と同じ頃に作製された。

写真111　石鳥居ならびに石灯籠（西より）
　石鳥居は玉藻廟竣工時に，松平氏一族より奉納された。

写真112　石灯籠⑤～⑧
　石鳥居の両脇にある石灯籠。

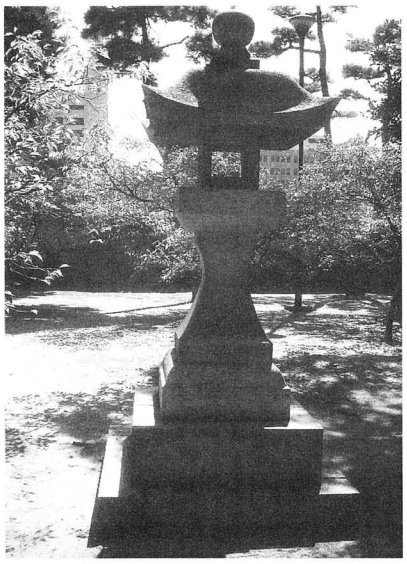


写真113　石灯籠③・④
　この石灯籠は，玉藻廟竣工時に第百十四銀行より奉納された。

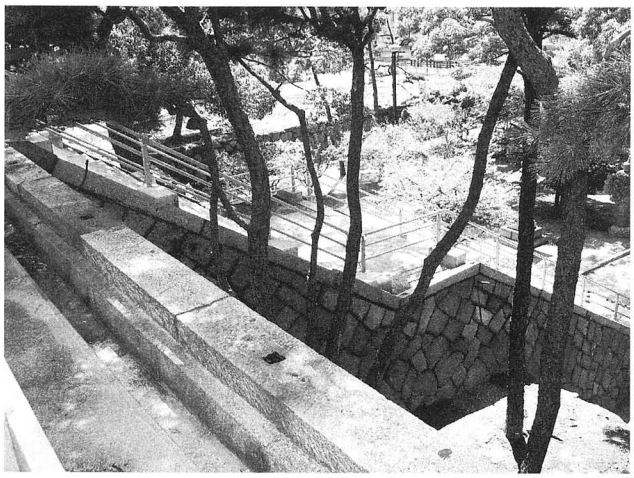


写真114　石階段（北東より）
　天守台へ登る石階段が，天守台の西側に設けられていた。

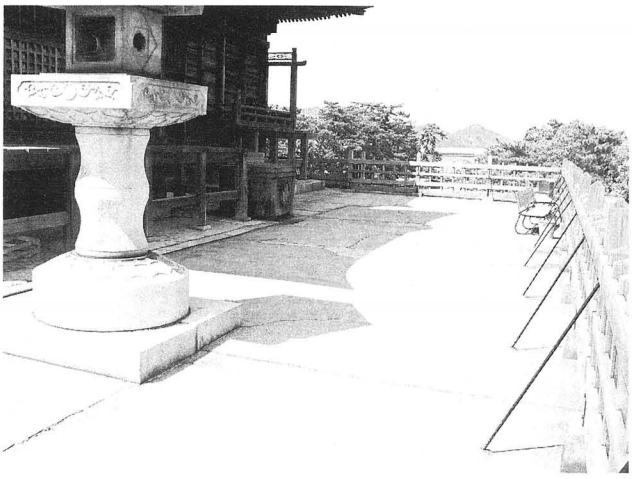


写真115　地盤ならびに木柵（東側）
　建物周囲はコンクリートにて舗装され，周囲に木柵を廻らせていた。

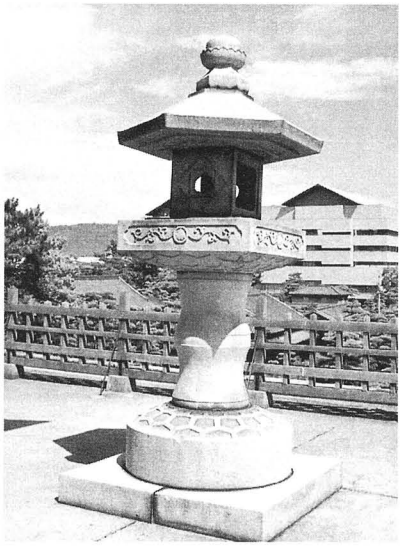


写真116　石灯籠①（東側）
　東西両石灯籠には「明治三十七年八月一日　従五位賴壽」の陰刻があった。

写真117　石灯籠②（西側）

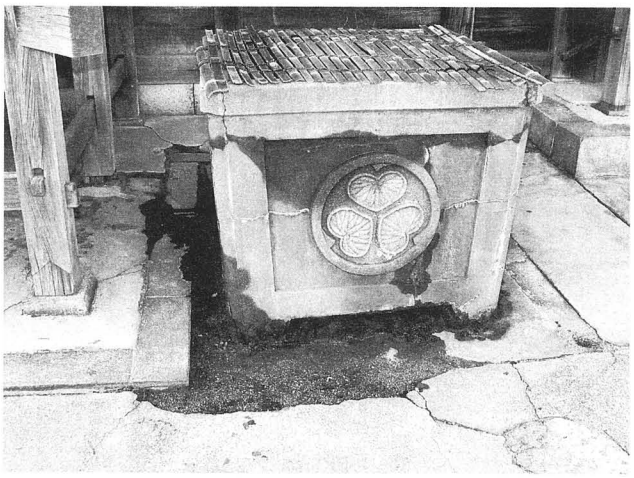


写真118　水盤（東より）
　幣殿東側には水盤が設けられていた。

写真119　正面より見た風景（中央）

写真120　正面より見た風景（東側）
東側には艮櫓が見える。

写真121　正面より見た風景（西側）

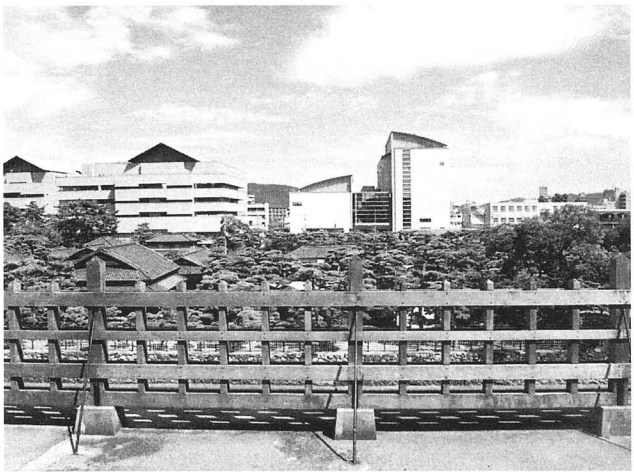


写真122　東側より見た風景（中央）

写真123　東側より見た風景（北側）
北東側には披雲閣が見える。

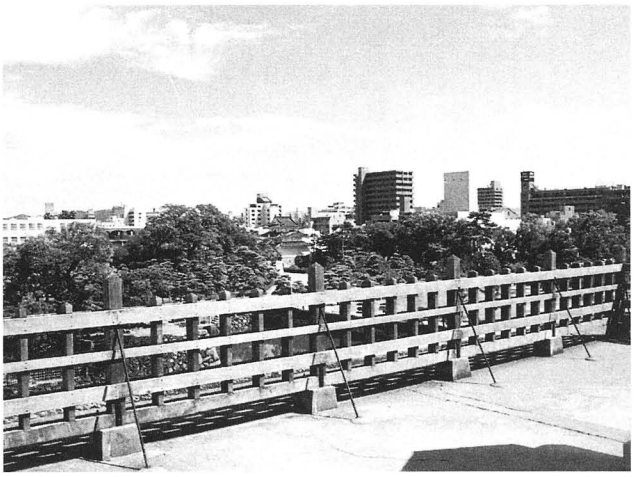


写真124　東側より見た風景（南側）

写真125　背面側より見た風景（中央）
正面には高松港が見える。

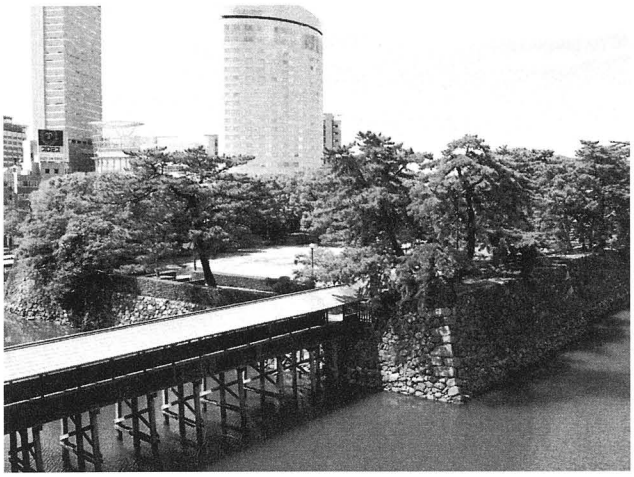


写真126　背面側より見た風景（西側）
西側には鞘橋が見える。

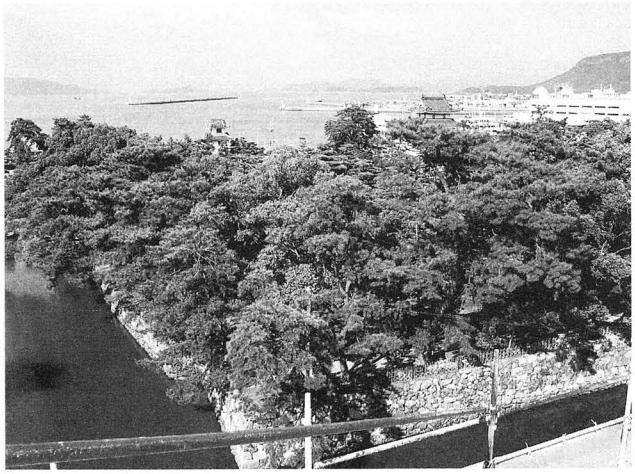


写真127　背面側より見た風景（東側）
東側には月見櫓が見える。

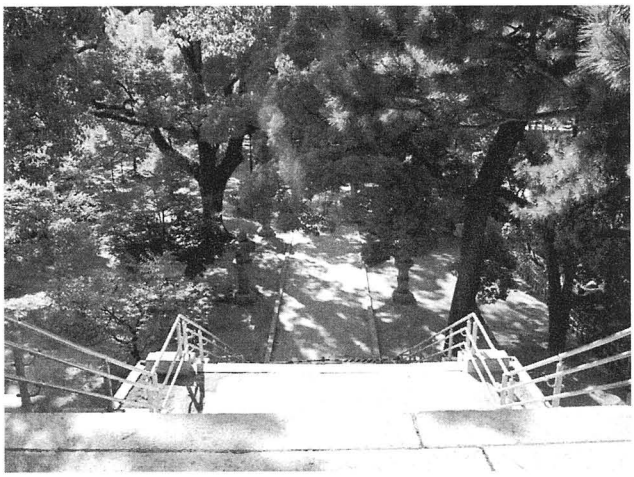


写真128　西側より見た風景（中央）
天守台西側には石段が設けられている。

写真129　西側より見た風景（南側）

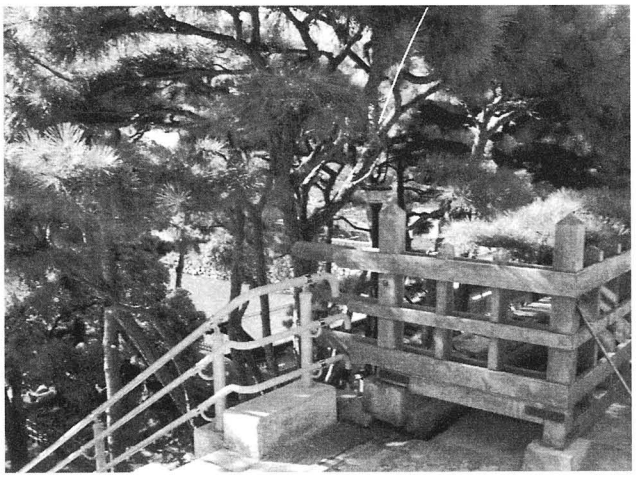


写真130　西側より見た風景（北側）

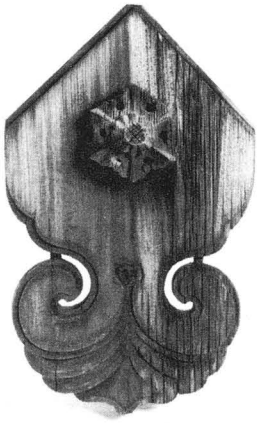


写真131　蕪懸魚

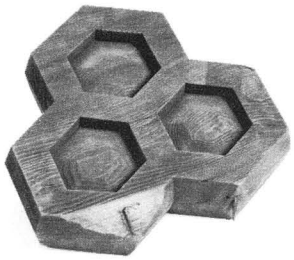


写真132　虹梁間蟇股

写真133　唐破風内の彫物

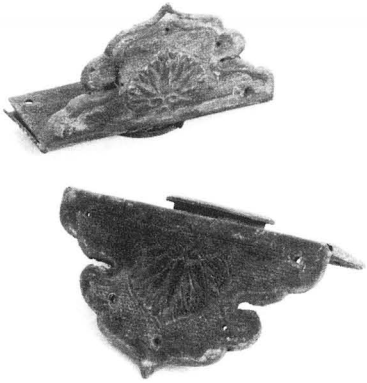


写真134　唐戸幣軸上金具

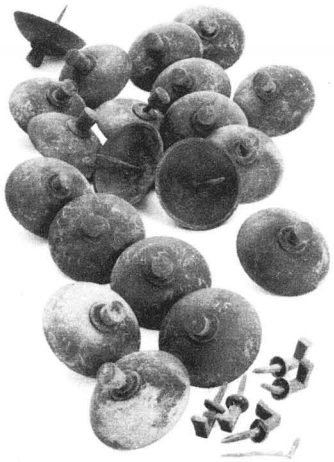


写真135　拝殿扉乳金物

第２節　創建時の技法について

①　平面計画

今回の社殿調査として，解体前に平面・軸部等解体中に屋根・小屋組等の実測を行った。建物の実測調査はその都度詳細に行って調書を作成した。調査の結果，経年による破損や，風雨による被害は各部に影響を及ぼし社殿は全体に北側へ傾斜し，特に，拝殿の傾斜が大きかったことが判明した。また，各部材とも東および南側が風化し，妻飾り懸魚，縁廻り材，脇障子など，欠失した箇所が多く，建物の傾斜に伴って部材接続部，軸部・縁廻りに弛緩が生じていた。

今回の実測調査では，建物の建設時が明治であったこと，社殿建築であったことを考慮し，尺とメートルによる実測を行って誤差を最小限に止めるよう実施した。

○　平面計画

社殿は拝殿・幣殿・本殿からなる権現造である。

拝殿は，桁行3間梁間2間で，正面中央間に向拝がつき，背面中央間を除く四方に木口縁が廻り，正面向拝部に木階が取り付けられていた。

幣殿は桁行2間で，拝殿中央間と本殿を繋ぐ位置に設けられ，背面側に木階が取り付く。

本殿は桁行3間，梁間2間，四方に切目縁を廻し，正面向拝1間分に前室を設け，幣殿の木階に接続していた。

拝殿桁行全長は58枝で，中央間28枝，両脇間各15枝，梁間は2間とも16枝，全長32枝で割り付けられている。桁行全長が，実測値では22.3～22.4尺であった。これを枝割寸法で割り付けると1枝3.84寸～3.86寸≒3.85寸に割り付けられ，桁行全長が22.33尺となる。また，梁間全長は，実測値では12.3尺で，これも枝割寸法で割り付けると，3.84≒3.85寸となり，梁間寸法とほぼ合致する。結果，拝殿各間は桁行が中央間10.78尺，脇間2間は5.775尺，全長22.33尺。梁間2間は6.16尺，全長12.32尺となる。背面中央間を除く三方に出3.1尺の縁が設けられ，正面向拝の出は7.0尺であった。

幣殿は拝殿背面と本殿間に設けられ，拝殿・本殿とは建物構造から桁行，梁間方向が逆となるため，梁間が全長12.32尺（16枝×2間）となり，拝殿梁間と同寸となる。また，桁行は3間で，本殿寄り1間は，本殿向拝部となり本殿の前室となるが，全長で16.4尺，前端間及び中央間は，1間＝14枝（5.4尺）となり，後端間は14.5枝（5.6尺）となり，枝割寸法は3.86寸≒3.85寸と拝殿枝割りとほぼ近い数値が得られた。

本殿は桁行12.32尺で，拝殿梁間及び幣殿梁間と同寸となり，枝割は32枝で（1枝＝3.85寸）割り付けられる。また，梁間は全長7.7尺で20枝（1枝＝3.85寸）の平面で，四周に2.95尺出した縁を廻している。向拝の出は前記した幣殿後端間で5.6尺（14.5枝）とし，本殿の前室としている。更に，木階5級を幣殿背面部に突出させている。

これらの平面計画寸法と実測値とには若干の相違が見られるが，加工時の誤差や経年劣化による変化によると考えられる。但し，前述したように，柱間が完数値ではないこと1枝寸法及び枝割に関しても絶対的要素が少ないが，許容出来る数値として判断したい。

6枝掛巻斗間の寸法は全長2.20尺（大斗真より1.1尺）で，この巻斗上に各2本の垂木が割付けされている。実測値では巻斗長5.6寸，垂木幅1.7寸で，1枝は数値上では3.9寸となり，次の巻斗間の1枝は3.88寸前後となる。また，垂木幅も1.7寸弱が多く，1枝数値が若干大きくなっている。

以上より，垂木間隔，巻斗全長，斗組の大きさは正確に割付けされていなく，部材寸法や加工はその精度の許容範囲内の施工と推測できる。

今回の調査では，軸部解体時の実測が不可能であったため，確認できた部分の資料でのみ記載した。

○　枝割について

各実測値は表9に示したとおりであるが，実測値に完数値が表れなかった。拝殿梁間では，柱間で最小実測値6.11尺，最大実測値6.19尺，平均値6.15尺，各間は16枝割で，1枝3.844寸となった。本殿では，両側面で最小値3.818尺，最大値3.835尺，平均値3.828尺で，1枝3.828寸。背面では2間で6.145尺，6.158尺，平均値6.151尺で，1枝3.844寸となり，3.84～3.85尺間の数値が得られた。従って，この箇所の寸法は実測値から1枝3.85寸と推測することができる。

幣殿の梁間寸法と本殿桁行2間は社殿の形式上，同数値と考えられるが，実測値では，拝殿・幣殿接続部が12.280尺，各間32枝割で平均3.837寸／枝となり，1枝の最小値を示した。最大値は幣殿中央部（12.335尺）・本殿向拝柱部（12.335尺）・本殿縁柱部（12.335尺）で平均が3.854寸／枝であった。本殿背面は12.303尺で平均3.844寸／枝であったので，1枝平均は3.848寸となり，前記と同様の寸法が得られた。

拝殿斗栱は三ツ斗組形式で，垂木は6枝掛に納められていたが，正確な寸法では納められていなかった。

○　計画寸法の推定

実測値を基本にして計画寸法を推定し，整理すると，本殿梁間全長12.32尺で，幣殿梁間全長寸法及び拝殿両側の梁間全長と同寸となった。また，拝殿桁行はこれに両脇間約10尺を加えた22.33尺の全長となり，関連性が伺えた。これに対し，幣殿の桁行（2間分）は各間5.4尺で，この部分のみ1枝寸法が相違しているが，接続部（本殿前室）の向拝の出は5.6尺で拝殿・本殿ほか，どの間とも合致しない。拝殿向拝の出については，実測値では7尺となるが，これは向拝の出を7尺という完数で決定しておき，完数である7尺から，拝殿縁の出3.1尺（1枝に換算すると，縁の出8枝＝1枝3.875寸）と拝殿縁から向拝柱までの寸法を求めたものである。

さらに，前記してきた柱間寸法については，垂木枝割りの数値を基準として各社殿の柱間数値を求めたものであるが，あらかじめ，建物の規模等を考慮して，各社殿の総柱間数値を各柱間枝割りの近似値から完数に近い数値としてとして決めておき，社殿各間及び垂木枝数を枝数に応じて割り振った可能性もある。

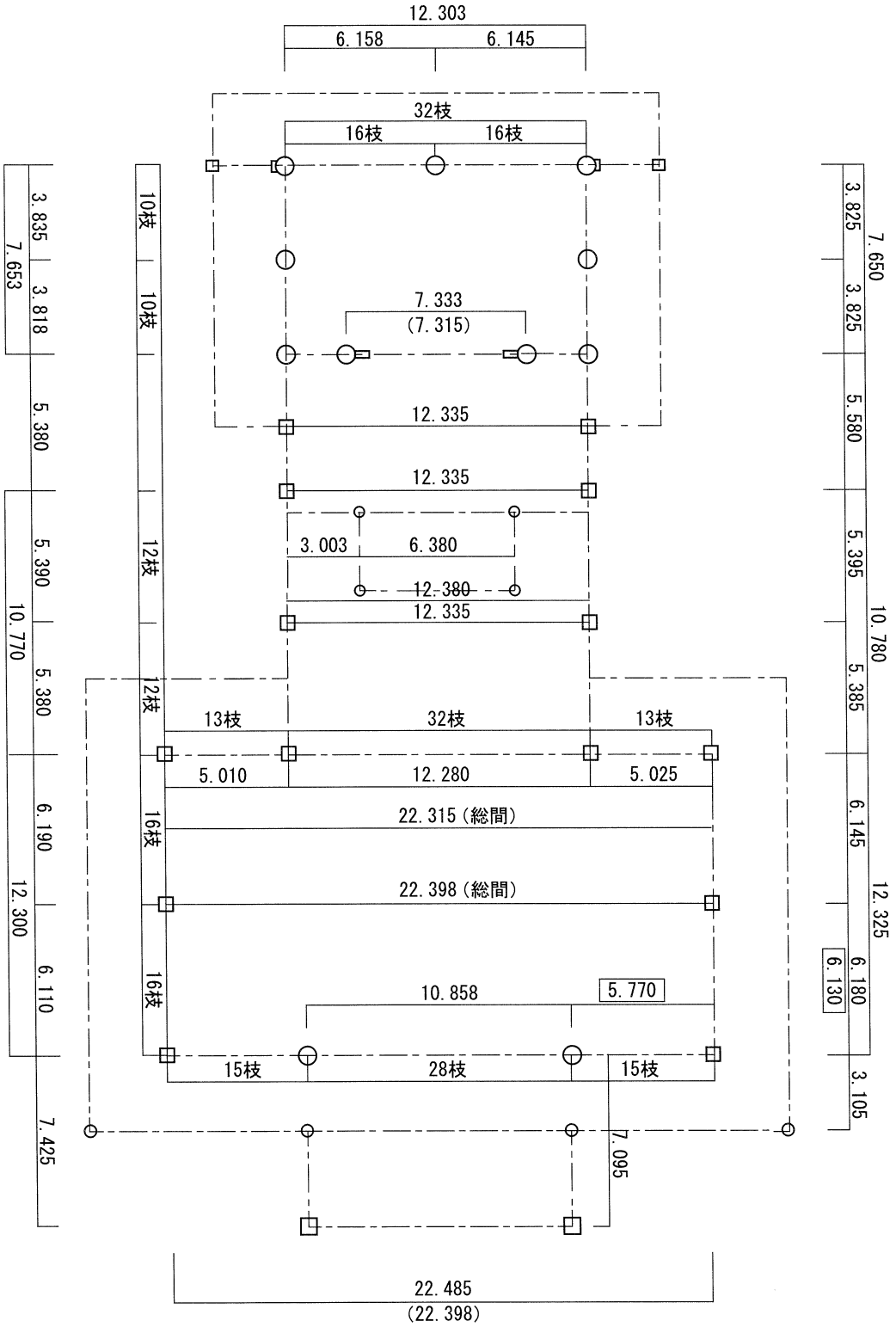
まず，拝殿の桁行全長を22.3尺，梁間全長を桁行総間より10尺縮めた12.3尺に決め，枝数と総間数値から割り出した1枝＝0.385寸×58枝，総間22.33尺の数値から22.3尺を決定し，各間についてはそれぞれ枝数に応じて割り振った結果，各間の枝割に若干の濁りが出たものと推察される。

各所の推定寸法は以下の通りである。

表9　各所推定寸法値表

場　　所	推定寸法	枝　数	一枝寸法
本殿梁間全長	7.70尺	20枝	3.850寸
拝殿梁間全長	12.30尺	32枝	3.843寸
幣殿梁間全長	12.30尺	32枝	3.843寸
本殿桁行全長	12.30尺	32枝	3.843寸
拝殿桁行全長	22.30尺	58枝	3.844寸
幣殿桁行全長	16.40尺	——	——
拝殿向拝の出	7.00尺	——	——
本殿向拝（前室）の出	5.60尺	14.5枝	3.862寸

以上より，枝割寸法，柱間寸法，総割寸法とも実測値及び推定寸法と，本殿梁間及び前室の出を除いて合致していないことが分かった。



第14図　各柱間実測数値

凡　　例

（　）内の数字は縁上で実測

□の数字は組物（肘木幅真）で実測

ゴシックの数字は床上で実測

② 創建当時の平面構成

香川県立ミュージアムには玉藻廟建設経緯が記されている『玉藻御廟御造営御遷座御祭典記事』（以下『造営記事』とする），ならびに玉藻廟建築材料が記載されている『玉藻廟御宮設計書』（以下『設計書』とする）が所蔵されている（別掲参照）。この2点の古文書と，絵はがきなどの資料，建造物に残る痕跡調査により，解体前の玉藻廟は創建当時より若干の改造を行っていたことが判明した。

主な改造箇所は幣殿・本殿縁廻りで，間取りは創建当時より変更はなかった。なお，小屋組番付（詳細は③番付（小屋組）を参照）ならびに『造営記事』を見ると，創建当時は幣殿を石の間とし，建物の構造は香川県高松市にある屋島神社に倣った。屋島神社は高松藩主第8代松平頼儀が社殿の造営を命じ，文化12年（1815）完成。明治15年（1882）藩祖松平頼重を合祀したが，昭和48年（1973）本殿や拝殿などを焼失，翌年に再建された。そのため，当時の様子をうかがい知ることができなかったが，本殿・拝殿間は石の間としていたと考えられる。玉藻廟については，前述の資料と痕跡により，玉藻廟の創建の際には，構造も石の間とする計画を立てていたが，建設中に計画変更を行い，解体前のとおり，幣殿にも床板を張ったと考えられる。

［創建時と現状建物の比較］

(1) 背面高欄（写真136・137）

玉藻廟が掲載されている絵葉書により，創建当時は背面にも高欄が設けられていたことが判明した。

(2) 本殿脇障子（写真138・139）

脇障子に松皮菱組子板が入り，背面への出入口となっていた可能性があることが，『設計書』より判明した。

(3) 本殿内部壁板（写真140・141）

腰貫から頭貫下端間に壁板を張っていた可能性があることが，痕跡により判明した。ただし，側面柱は見えるが，背面は柱面にも板張りとしていた。

(4) 本殿濡縁境出入口（写真142・143）

創建当時は鏡戸を建て込み，濡縁への出入口としていたことが，『設計書』ならびに痕跡により判明した。

(5) 前室高欄位置（写真144・145）

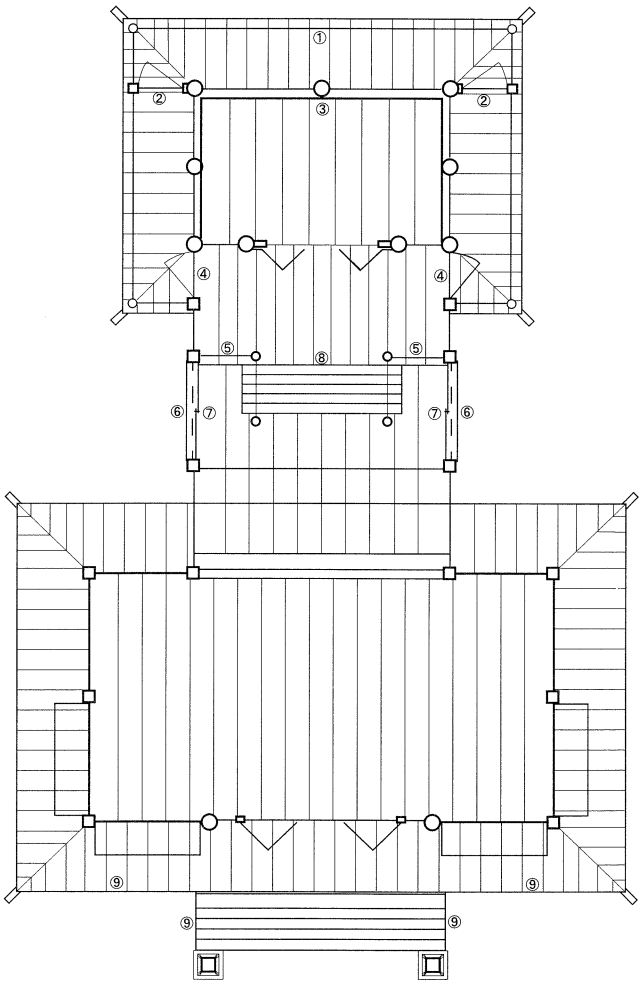
前室縁板は，解体前よりも約20cm短く，高欄の位置も前室正面両隅柱位置にあったことが，『設計書』ならびに痕跡により判明した。

(6) 掛戸（写真146）

幣殿連子窓の外側には掛戸があったことが，『設計書』ならびに痕跡により判明した。

(7) 引違い障子窓（写真147）

幣殿連子窓の内側には引違い障子窓（2本）が入っていたことが，『設計書』ならびに痕跡により判明した。



第15図　創建時推定略平面図

(8) 木階

解体前の木階は，5級上に3級の木階を被せていたが，創建当時は5級の木階であったことが『設計書』により判明した。

(9) 拝殿正面高欄ならびに向拝登り高欄（写真148）

解体前は，拝殿濡縁正面の脇間に高欄を設け，向拝木階端には登り高欄を設けていたが，創建当時はそれらがなかったことが，『造営記事』ならびに『設計書』より判明した。

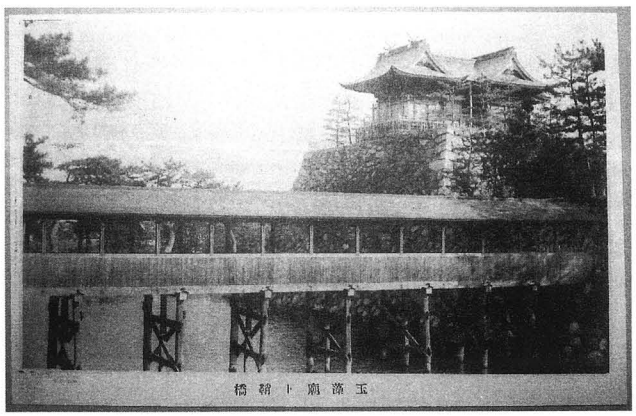


写真136　玉藻廟絵はがき（香川県立ミュージアム蔵）
玉藻廟背面側に高欄が廻らされている。

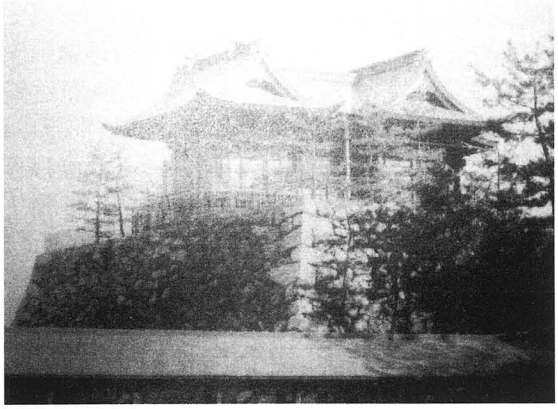


写真137　玉藻廟絵はがき（拡大）

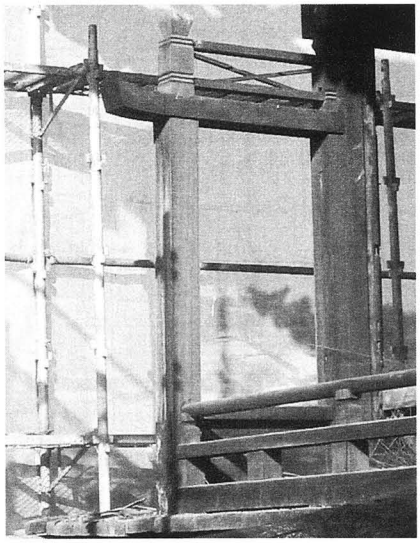


写真138　本殿脇障子（西側）①

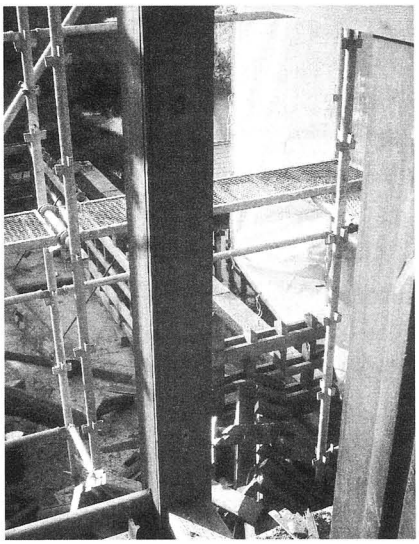


写真139　本殿脇障子（西側）②

脇障子親柱に猿栓穴が残り，本殿背面隅柱に蝶番痕跡が残る。

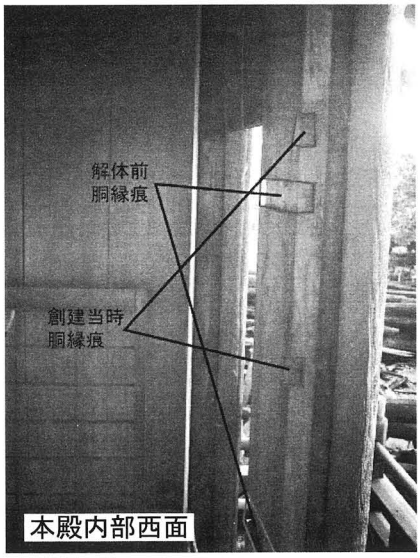


写真140　本殿内部壁板（胴縁痕跡）①

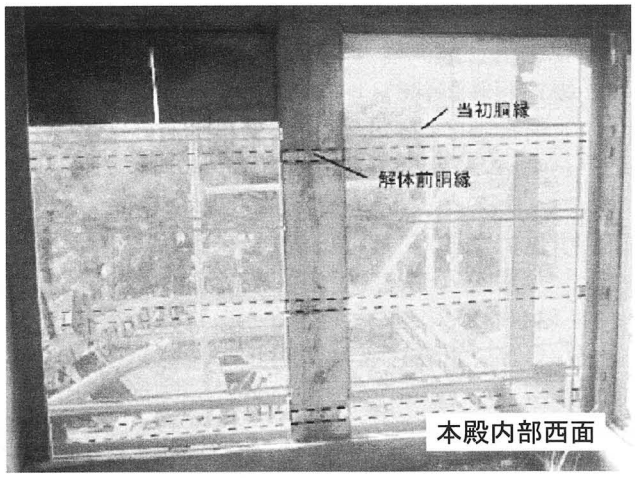
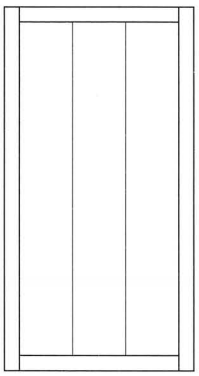


写真141　本殿内部壁板（胴縁痕跡）②

現状壁板及び胴縁の取付跡のほかに，旧壁板取付痕跡が残る。

写真142　前室・本殿濡縁境
出入口①
猿栓及び蝶番痕跡が残る。

写真143　前室・本殿濡縁境
出入口②



第16図　鏡戸（推定復元図）

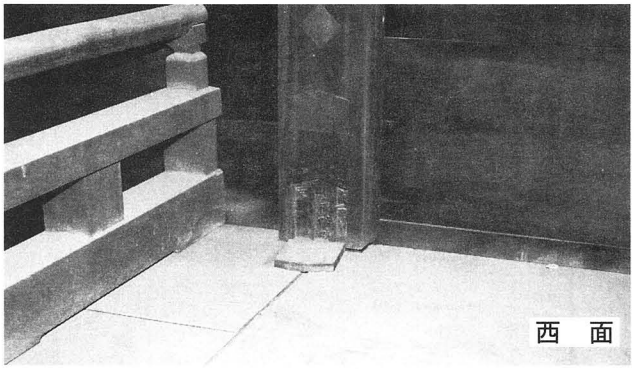


写真144　前室高欄位置①
現状高欄の脇柱に旧高欄が取り付いた痕跡が残る。

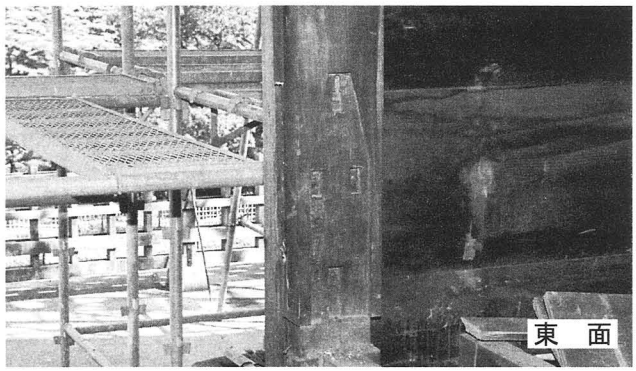


写真145　前室高欄位置②

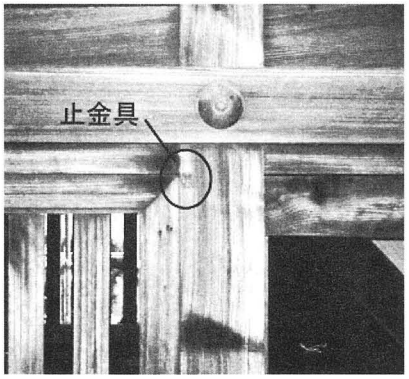
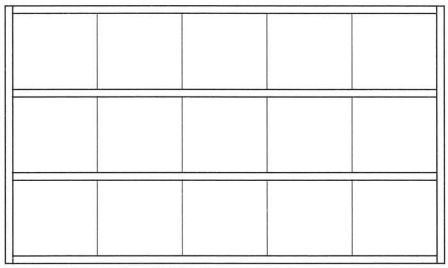


写真146　掛戸
幣殿連子窓上部に残る掛戸金具



第17図　掛戸（推定復元図）

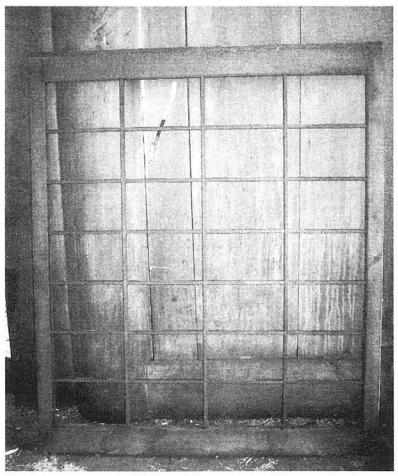


写真147　引違い障子窓
解体中に発見した連子窓内側障子（ガラス戸）

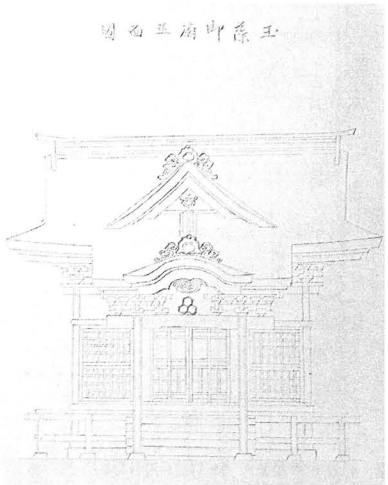


写真148　拝殿正面姿図（『造営記事』（香川県立ミュージアム蔵）に記載されている玉藻廟立面図）
創建時の玉藻廟の立面図では，拝殿正面に高欄が描かれていない。

③　番付（小屋組）

今回の調査により小屋組より多数の番付墨書が発見された。

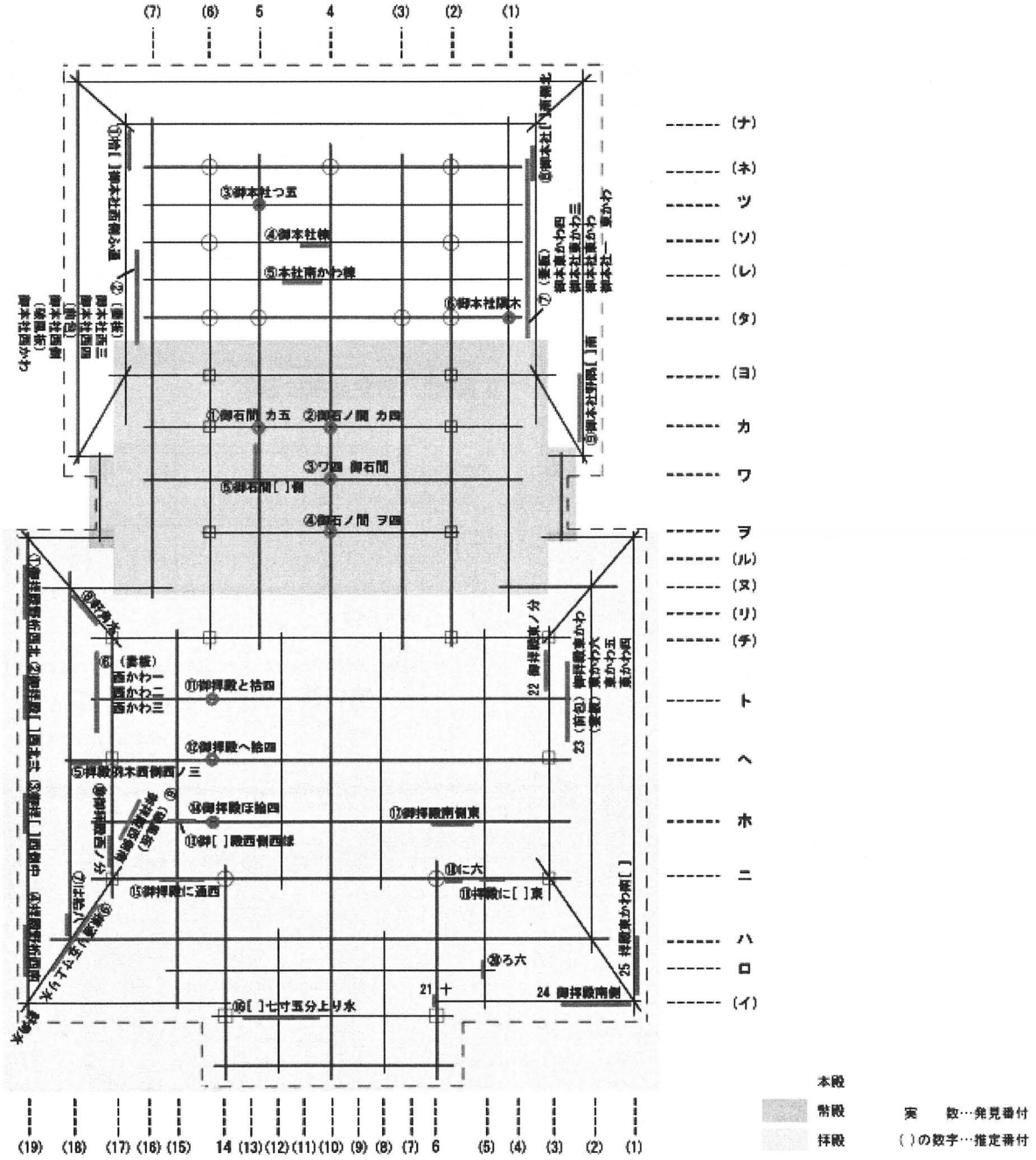
桁行方向（南北方向）の番付は，拝殿と幣殿・本殿に分けられ，拝殿は右隅を基準に，幣殿・本殿は軒先を基準に各々「一，二，三…」の漢数字で番付されていた。一方，梁間方向（東西方向）の番付は，拝殿より本殿まで一連の番付が付され，「イ，ロ，ハ…」で番付されていた。したがって，小屋組番付は，漢数字と「イロハ」文字からなる組合せ番付であることが判明した。

拝殿・本殿の妻部分に「東かわ」「西かわ」，各部位の鼻母屋等に「西南」「南」「西」「東」の方位番付が見られ，隅木・敷梁には陸水上り寸法が記されていた。

通り番付としては，拝殿母屋に「に通」，隅木に「棟通り」などの番付が確認できた。

各部位の番付には拝殿「御拝殿」，幣殿「石ノ間」，本殿「御本社」と記されていたので，設計当初は幣殿を「石の間」，本殿を「本社」と名付けられていたことが分かった。

番付は，母屋材・土居桁などは上端に記され，棟束・母屋束などには南面に記されていた。



第18図　創建時小屋組推定番付

写真149　拝殿①鼻母屋
「御拝殿野桁西北」

写真150　拝殿②鼻母屋
「御拝殿」

写真151　拝殿③鼻母屋
「西北弐」

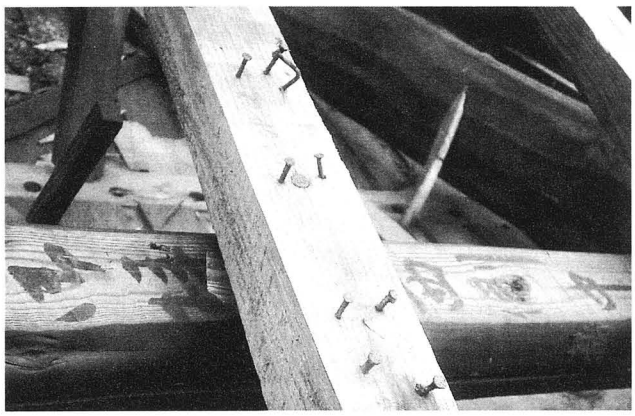


写真152　拝殿④鼻母屋
「御拝[ ]西側中」

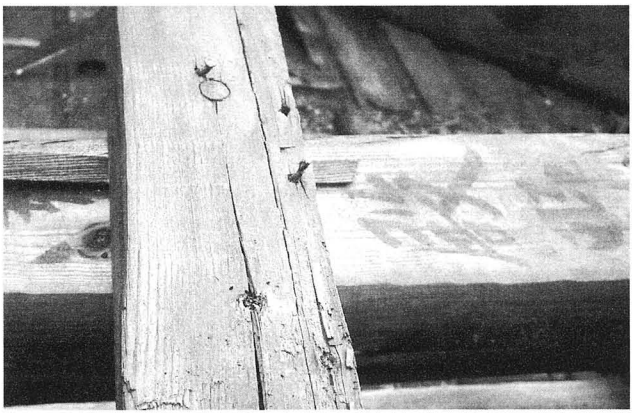


写真153　拝殿⑤鼻母屋
「御[ ]殿野桁西南」①

写真154　拝殿⑥鼻母屋
「御[ ]殿野桁西南」②

写真155　拝殿⑦桔木
「拝殿羽木西側　西ノ三」

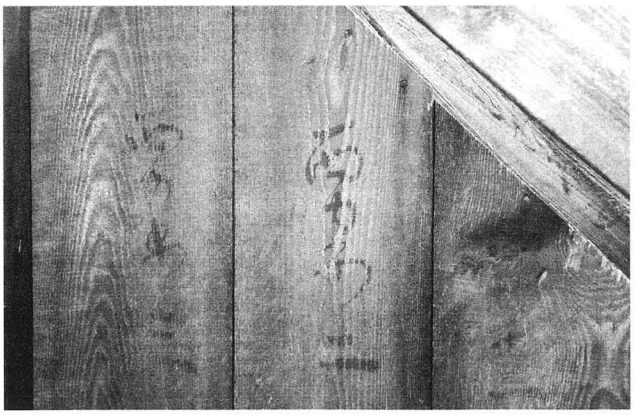


写真156　拝殿⑧妻板
「西かわ一　西かわ二　西かわ三」